

調査報告

## 長井前ノ山古墳調査報告 II

－発掘調査－

福島県立博物館学芸課考古学分野

### はじめに

福島県立博物館では、研究事業「東北地方南部における初期農耕社会形成過程の研究」の中で、会津坂下町に所在する長井前ノ山古墳を対象とした測量調査を平成11年に実施し、平成12・13年の2年に渡って発掘調査を実施した。

調査は福島県立博物館藤原妃敏、田中敏、荒木隆、長島雄一（現福島県立川口高等学校）、菊地芳朗（現福島大学）、渡部昌二（現福島県立若松商業高等学校）、伊藤知雄（現岩瀬郡天栄村立湯本中学校）が担当し、福島大学、東北学院大学、大阪大学の学生や多くの地元研究者の方々の参加を得た。

調査の結果、長井前ノ山古墳は東北初発見となった合掌形石室を持つ古墳時代中期の前方後円墳であることが明らかになり、平成14年に調査速報を発表している。（菊池2002）その後、調査報告の作成に着手したが、通常業務との兼ね合いの中、正式報告を刊行するまでに多くの時間を費やすことになってしまった。

開館30周年を迎えた平成28年度を節目の年として、これまで関係者が準備していた原稿をもとに荒木が編集を行い、とりあえず現段階の正式報告として公表することとし、文化財保護法に基づく調査担当機関としての責務を果たす。

本報告は、当館現職または元職員を中心に原稿を準備し、第1章・第3章・第4章1・第6章1・2を菊地、第2章を田中、第4章2～4を菊池の原稿を基に荒木が加筆修正、第4章5を藤原、第5章を伊藤の原稿を基に荒木が加筆修正、第6章3を伊藤、第6章4・第7章を荒木が執筆した。また、原稿の一部を外部研究者に依頼しており、第4章2は遠野市教育委員会 黒田篤史氏（当時東北学院大学大学院生）の原稿を基に荒木が加筆修正、第6章5(1)を奈良県立橿原考古学研究所主任研究員 奥山誠義氏（当時財団法人福島県文化振興事業団）、国立歴史民俗博物館教授 齋藤努氏に執筆いただいた。

### 第1章 調査経過

#### 1 第1次調査

福島県立博物館学芸課考古学分野は、1998（平成10）年から5カ年計画で研究事業「東北地方南部における初期農耕社会形成過程の研究」を立ち上げることとなり、その具体的研究目標の一つとして会津地方の古墳の総合的な調査を計画した。

これにより初年度は踏査を進め、未確認の古墳や既知でありながら十分な情報がない古墳の把握に努めた。長井前ノ山古墳（図1）はその過程で注目されるにいたった古墳の一つである。すなわち、古墳群を形成せず単独で存在する前方後円墳とみられた点や、会津盆地周縁部からやや山間に入った場所に立地する点などにおいて、会津地方の大部分の古墳とは異質な印象を受けたのである。

しかし、長井前ノ山古墳については、埋葬施設や遺物が知られていないことはおろか墳丘測量図も作成されておらず、詳細な検討を行うことが不可能な状況にあった。

こうして長井前ノ山古墳の重要性に注目した我々



図1 長井前ノ山古墳の位置

（国土地理院発行5万分の1地形図「喜多方」を使用）

は、研究事業2年目の具体的目標として同古墳の測量調査を計画し、幸いにも地権者の同意を得ることができたため、1999（平成11）年6月22日から調査に着手した。調査は福島県立博物館が主体となり、考古学分野の学芸員5名が作業にあたった。古墳の現状は放置された雑木林であり、当初は生い茂る草木に苦勞しながらの作業となった。また、各学芸員が通常業務を抱えながらの調査であったため、6月26日まで連続して作業を行った後は、少人数による月に数日程度の作業とならざるをえず、最終的に主要な範囲の測量が終了したのは12月15日であった。第1次調査ののべ作業日数は21日間である。調査中には（財）福島県文化センター（当時）、東北大学、福島大学、東北学院大学等の有志にボランティアとして参加いただき、作業を大いに助けていただいた。また、調査期間中の11月7日には地元住民を対象に現地説明会を開催し、33名の参加者を得た。

調査は、古墳の想定主軸線上に基準杭を設定してトラバースを組み、これらの杭を基準に縮尺100分の1、絶対標高による25cm等高線で測量図を作成する方法で行った。また、古墳の位置を平面直角座標系上に示すこととした。これにより、長井前ノ山古墳が墳長37mほどの前方後円墳であることが確実に認められるにいたった。

## 2 第2次調査

測量調査によって長井前ノ山古墳の墳形と規模がほぼ把握されたが、調査期間中に土器や埴輪等が収集できなかったこともあって、古墳の築造年代については不明のままであった。また、後円部が2段築成の可能性が高いと考えられたものの裏付けを欠くなど、墳形と規模に関しても推測に留まらざるをえない部分が少なくなかった。

このため、第2次調査として墳丘発掘調査を行うことを計画した。

それに先立つ2000年4月17～19日には、奈良国立文化財研究所（当時）埋蔵文化財センターの西村康氏に依頼して物理探査を実施した。古墳およびその周辺の4箇所を対象に、地中レーダー探査・磁気探査・電気探査の3種を実施し、後円部中央に東西方向に主軸をもつ長さ約4.5m、幅1m強の埋葬施設の存在が推定されるなど、発掘調査の方針を立てる上であらかじめ非常に有益な情報を得ることができた（菊地・西村2000）。

第2次調査は2000年（平成12）8月22日から9月10日まで実施した。事前の準備日も含めたのべ作業日数は19日間である。調査は菊地を担当者とし、福島県立博物館学芸員、福島大学と大阪大学の学生、

長井区住民が参加した。調査の概要がほぼ固まった9月9日には現地説明会を開催し、約30名の参加者を得た。

調査では、墳丘北側斜面に2箇所、西側斜面に1箇所、南側斜面に1箇所のトレンチ、これに後円部墳頂の3箇所のトレンチを加えた合計7本のトレンチを設定し、墳丘形態・墳丘規模・墳丘構造の把握に努めた。後述するとおり墳丘は地山整形と盛土によって築かれ、葺石や埴輪が採用されていないこともあって墳丘面の確認は容易でなかったが、最終的には墳長36mの前方後円墳で、後円部2段築成という結論を得ることができた。

一方、墳丘上からは年代決定のうえで期待していた古墳時代の土器がまったく出土しなかった。後円部墳頂のトレンチは、埋葬施設の調査を視野に入れた墓壇の確認を目的としたもので、物理探査にもとづく推定どおり、墓壇上縁とみられる長さ約5m、幅3.2mの規模をもつ方形プランを確認した。

また、後円部のほぼ中央からは直径2.5mほどの範囲に拳～人頭大の川原石が敷き詰められた遺構を検出したが、この遺構の性格は不明のまま残された。

## 3 第3次調査

第3次調査は、第2次調査終了時点での課題の追求、および埋葬施設の構造究明を目的として2001年（平成13）8月21日から開始した。調査体制は第2次調査と同様であり、福島県立博物館学芸員を中心に、福島大学と東北学院大学の学生、地元研究者および長井区住民が参加した。墳丘部の調査では、北側斜面に1箇所、南側斜面に3箇所、前方部墳頂に2箇所の合計6本のトレンチを設定し、残された課題の解明に努めた。後円部墳頂では、第2次調査で確認した墓壇と集石遺構を取り込むように改めて調査区を設定し、埋葬施設の検出を目指した。

第3次調査の期間は当初2ヶ月間程度を予定していた。墳丘調査区では、第2次調査の結果をほぼ裏付けるデータとともに新たな情報が加わり、古墳築造当時の形態と墳丘築成過程がほぼ復元可能となった。

一方の墳頂調査区では予想外の事態が重なった。すなわち、第一に第2次調査で確認していた集石遺構が大量の川原石が詰め込まれた中世の経塚状遺構であったこと、第二に墓壇がかなり複雑な過程で埋め戻されていたこと、第三に石棺にきわめて丁寧な被覆が行われていたこと、第四に埋葬施設本体がそれまで福島県に例のない合掌形石棺であったことなどである。これらの理解を導くために、遺構の精査に多くの時間を費やすこととなり、調査期間は大幅

に延長することになった。

以上の理由により、石棺内の調査に入ったのは調査開始からほぼ3ヶ月が経過した11月20日、蓋石をすべて外したのが12月4日であった。季節はすでに冬に入り、調査の継続が困難な状況となりつつあった。棺内調査を進めるにつれ、石棺が中世に攪乱を受けたことで副葬品が残存していない状況がしだいに明らかになったことをふまえ、棺内調査終了時点で第3次調査を打ち切り、残る課題を次回の調査に引き継ぐことを決定した。そこで、12月16日に現地説明会を開催して26名の参加者を得た。12月24日には、のべ日数91日間わたった調査を終了した。

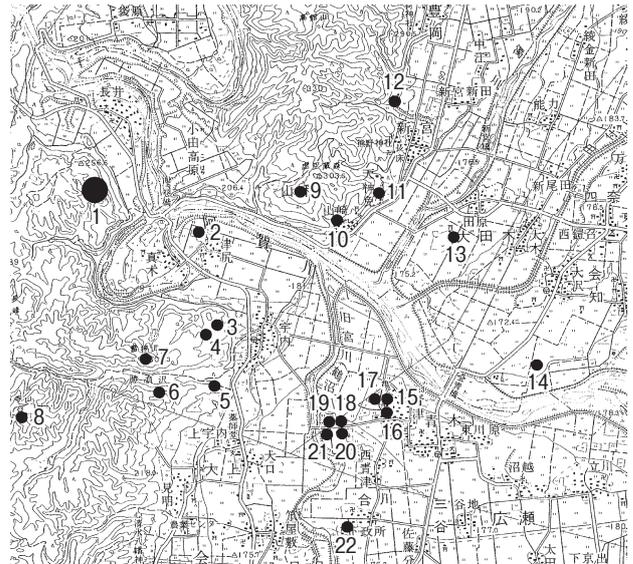
築造年代を推定できる遺物の出土はついになかったが、合掌形石棺の構造から長井前ノ山古墳が5世紀の築造であることが確実視されるにいたった。調査終了時、墳頂作業小屋の外は30cmの雪が積もる真冬の風景となっていた。

#### 4 第4次調査

2002年（平成14）3月20日から開始した第4次調査は、第3次調査で残された墓壇と石棺の構築過程の究明、および物理探査で反応があった後円部墳頂南東部における遺構確認を目的として実施した。調査体制は第3次調査とほぼ同様であり、福島県立博物館学芸員を中心に地元研究者が参加した。のべ作業日数は20日間である。

墳頂南東部調査区では開始からまもなく全面で旧地山層に達し、探査成果に反してここには遺構が存在しないことが判明した。埋葬施設調査区では、石棺の現地保存を前提としたため断ち割り調査を採用することとし、石棺外に5本の断ち割り調査区を設けて墓壇底や石棺構築過程の把握に努め、調査期間中にほぼこれらを明らかにしえた。これに並行して石棺材の採拓およびその表面観察記録を行い、石材利用に関する情報を収集した。

4月11日には墳頂調査区のおほすべての作業を終え、埋め戻しに入った。遺構面保護のため墓壇底・断ち割り調査区および石棺内を山砂で埋め、蓋石のおほすべてと被覆に用いられた川原石の一部をあらかじめ引いた基準線にしたがって原位置に戻した。その後石棺全体を山砂で覆い、掘り上げていた土で調査区全体を埋め戻した。被覆石の一部は原位置に戻すことが困難であったため福島県立博物館へ持ち帰った。埋め戻しと撤収作業をすべて終えたのが4月19日であり、ここに足掛け4年に及んだ長井前ノ山古墳の現地調査が終了したのである。



番号	遺跡名	所在地
1	長井前ノ山古墳	会津坂下町長井字萩ノ窪・七曲
2	中平遺跡	〃 津尻字中平
3	鍛冶山古墳群	〃 宇内字鍛冶山・伊谷沢甲
4	次郎坂古墳群	〃 宇内字次郎坂甲
5	出崎山古墳群	〃 大上字森北
6	森北古墳群	〃 大上字字森北
7	雷神山古墳群	〃 大上字字次郎坂
8	高寺山古墳	〃 高寺字高寺
9	虚空蔵森古墳	喜多方市慶徳町新宮字虚空蔵森
10	山崎横穴古墳群	〃 慶徳町山科字墓東
11	天神免古墳群	〃 慶徳町新宮字虚空蔵森
12	灰塚山古墳	〃 慶徳町新宮字小山腰
13	古屋敷遺跡	〃 塩川町大木田字古屋敷
14	内屋敷遺跡	〃 塩川町会知字内屋敷甲
15	亀ヶ森古墳	会津坂下町青津字館ノ腰
16	鎮守森古墳	〃 青津字館ノ腰・中西
17	男壇遺跡	〃 青津字男壇
18	中西遺跡	〃 青津字中西
19	宮東遺跡	〃 合川字宮東
20	雨沼遺跡	〃 合川字雨沼
21	丈助橋遺跡	〃 合川字宮東・雨沼
22	宮ノ北遺跡	〃 合川字宮ノ北・村前

図2 長井前ノ山古墳周辺のおもな遺跡  
(国土地理院発行5万分の1地形図「喜多方」を使用)

## 第2章 周辺のおもな古墳時代遺跡

本古墳が立地する会津盆地西縁の山地上および阿賀川沿い、旧宮川沿いなどの河岸段丘上には多くの遺跡が分布している（図2）。ここではそのうち古墳時代の遺跡について概観してみたい。

会津盆地西縁の山地上では、森北古墳群、出崎山古墳群、雷神山古墳群、鍛冶山古墳群古墳群、次郎

坂古墳群が確認されている。

そのひとつ、森北古墳群は会津坂下町大字見明字勝負沢に所在する古墳群で、平成10年に測量調査および発掘調査が実施されている。調査に先立ち行われた分布調査の結果、本古墳群は前方後方墳1基(1号)、円墳5基(2・3・6～8号)、方墳2基(4・5号)で構成されていることが判明した。発掘調査はこのうち1号墳と5号墳について行われている。1号墳は全長41.4mの前方後方墳で、埋葬施設内から舟形木棺の痕跡が確認された。その内部からは放射状区画をもつ珠文鏡、鉄製の槍・鉈・針、管玉、漆塗り製品などの副葬品が出土している。出土した土師器から本古墳の築造時期は古墳時代前期前半と考えられている。5号墳については、規模が14mの方墳であることは確認されているが、埋葬施設の調査は行われていない(土井・吉田1999)。

出崎山古墳群は同町大字大上字森北甲に所在する。かつては前方後円墳2基、前方後方墳2基、円墳5基、方墳1基の計10基で構成されていたが、前方後円墳1基と円墳5基が削平され、現存するのは4基のみである。削平された箇所は緊急調査で、円墳から木棺直葬の埋葬施設が確認されている。埋葬施設内から遺物は出土しなかったが、周溝内から須恵器杯(TK208～TK23)が出土している。

阿賀川を挟んで、長井前ノ山古墳の東方山地には、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳、天神免古墳群、山崎横穴群などが分布している。

虚空蔵森古墳は、喜多市市慶徳町大字新宮字羽山に所在する。昭和54年に測量調査が実施され、全長46mの前方後円墳であることが判明している。後円部頂には盗掘跡があり、埋葬施設に用いられたと推察される石材が散乱している(田中・生江1980)。未調査のため、築造時期については判然としないが、前期古墳の可能性が高いと考えられている。

灰塚山古墳は同市慶徳町大字新宮字小山腰に所在する。当館が昭和61年に測量調査を実施し、全長61.2mの前方後円墳であることが確認された(辻1987)。本古墳の発掘調査は、東北学院大学辻ゼミナールによって平成23年から6回行われている。平成28年に行われた6次調査では、2つの埋葬施設(主体部)から多彩な副葬品が出土し注目を集めた。後円部の中央で検出された第1主体部では、全長8m超、幅1.6mの長大な木棺の痕跡が確認され、内部から副葬品として青銅鏡、ガラス玉、堅櫛、大刀が発見された。特に堅櫛が重なって20点以上出土した例は、東北地方では初めての発見となった。第2主体部は、第1主体部の東側にほぼ軸をそろえて検出され、精査の結果、粘土で被覆され上面に石組を

伴った石室であることが確認された。石組の下からは石室の蓋上に置かれた鉄製の武器(大刀・剣・鏃)と漆塗りの堅櫛が発見された。2つの埋葬施設の構築時期は、その構造や副葬品の特徴から、第1主体部が古墳時代前期または中期、第2主体部が中期後半と考えられている。また、中期後半という時期から判断して、第2主体部の被葬者と、本古墳の南約2kmにある古屋敷遺跡(後述)で確認された豪族居館の主との関係も注目されている(東北学院大学辻ゼミナール2016)。

虚空蔵森古墳が立地する丘陵の東斜面、同市慶徳町山崎に山崎横穴群が分布している。本横穴群は明治26年(1903)に発見され、総数37基の横穴から人骨、鉄刀、土器、勾玉などが出土した。出土遺物の一部は帝室博物館(現在の東京国立博物館)に寄贈されたが、多くは散逸してしまった。現存する資料などの検討から、本横穴群の年代は7世紀前葉を中心に8世紀まで至ると想定されている(穴沢1976)(辻1999)。なお、平成13年に実施された本横穴群の範囲確認調査で、総数48基の横穴が確認され、一部について発掘調査した結果、挂甲と玉類が出土した(植村2003)。

旧宮川の河岸段丘上には、亀ヶ森古墳、鎮守森古墳をはじめ、男壇遺跡などの周溝墓群、中西遺跡や丈助橋遺跡などの集落遺跡が分布している。

亀ヶ森古墳は会津坂下町大字青津に所在する全長127m、東北地方第2位の規模を誇る前方後円墳である。平成4年に実施された墳丘部の試掘調査の結果、後世に著しく削平されているため、現況では全長127mであるが、築造当時は約130mの規模であったと予想されること、後円部は3段築成で、墳丘面に葺石をもつことなどが判明した。また、遺物としては円筒埴輪と壺形埴輪が出土した。築造時期は古墳時代前期後半と考えられている(古川・吉田1993)。

亀ヶ森古墳の南西には、全長55mの前方後方墳、鎮守森古墳が所在する。本古墳の築造時期は、周溝から出土した二重口縁壺の年代観から、亀ヶ森古墳よりやや古いと考えられている(吉田1998)。

両古墳に隣接して男壇遺跡がある。本遺跡からは前方後円形周溝墓1基、前方後方形周溝墓3基、方形周溝墓1基が発見され、周溝内から赤彩された二重口縁壺などが出土した。これら周溝墓群の年代は古墳時代前期前半と考えられている。

男壇遺跡の西方には中西遺跡、丈助橋遺跡、雨沼遺跡など、古墳時代前期に属する集落遺跡が分布している。このうち中西遺跡は県営ほ場整備事業に伴い調査され、古墳時代前期の堅穴住居跡が6軒、土坑3基などが確認された(和田・高橋1990)。

阿賀川の河岸段丘上には、中平遺跡、古屋敷遺跡、内屋敷遺跡などが分布する。

古屋敷遺跡は喜多方市大字大田木字古屋敷に所在する。18,000㎡が調査され、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発見された。このなかで特筆されるのは、古墳時代中・後期（5世紀後半～6世紀初頭）に造営された豪族（首長）居館跡と、これに関連する施設（倉庫群・祭祀場）がセットで確認されたことである。遺跡が存在する微高地の周辺を区画するような施設も確認されていることから、居館は東西約240m×南北約250mの範囲におよぶものと推定されている（和田・植村・菅1999）。

中平遺跡は、会津坂下町大字津尻字中平に所在する古墳時代～平安時代の複合遺跡である。特に古墳時代の遺構は、中期末頃の大洪水で堆積した大量の砂によって厚く覆われていた。特筆されるのは、竪穴住居跡のほかに、平地式住居跡、鍛冶工房跡、祭祀遺構などが良好な遺存状態で発見された点である（吉田2003・2015）。

### 第3章 墳丘の構造

#### 1 墳丘の現状

長井前ノ山古墳は、会津盆地西縁を画する山地の



図3 長井前ノ山古墳全体図

端部に位置している。踏査時点ですでに比較的明瞭に墳丘裾部を認めることができ、早い段階から前方後円墳の可能性が高いと考えられたが、測量調査を経てこれがほぼ裏付けられた（図3）。

古墳は、北西から南東方向にのびる尾根の頂部に後円部を置き、そこから西に派生する尾根上に前方部が築かれている。古墳の東側は急斜面になっており、尾根ぎりぎりに後円部が築かれたため、後世の崩落により後円部の北東側が一部失われている。これ以外に等高線の顕著な乱れは少ないが、後円部南東斜面や前方部南コーナーに小規模な崩落が見られる。

墳丘は北側・南側・西側いずれにおいても253.0m付近から立ち上がり、基底を水平に整えることへの強い意識があったことをうかがわせる。ただし、前方部コーナー近くの前方部側斜面は明確な傾斜変化がみられることなく自然斜面に続いている。

後円部斜面途中の標高254.25m付近に、傾斜がいったん緩やかになるテラス状部分が後円部のほぼ全周で認められ、後円部が二段築成であった可能性を強く示唆していた。

一方、前方部に段築が存在するようすは認められず、前方部墳頂の標高は後円部のテラスよりも1m程度高いことから、テラスはくびれ部で墳丘斜面の中に消えてゆくとみられた。

また、くびれ部は後世の道によって溝状にえぐれていた。前方部前端線は仮想の墳丘主軸にたいして直交せずやや斜めに交わっている。

前方部西側には古墳状の高まりが見られ、これを2号墳と仮称しているが、尾根の方向に一致する不整楕円形を呈し、明確な墳丘端部も見られないことから古墳と認めうる積極的な根拠は見出せていない。

#### 2 物理探査の成果

先述のように、第2次調査に先立ち奈良国立文化財研究所（当時）に依頼して物理探査を実施しており、すでに公表している内容にしたがって成果の概要を記しておきたい（菊地・西村2000）。

墳丘およびその周辺の4箇所、すなわち後円部墳頂・前方部墳頂・2号墳・後円部北側平坦部を対象に、地中レーダー探査・磁気探査・電気探査の3種を実施している。

後円部では、レーダー探査によってほぼ中央の浅い位置に東西約4.5m、南北1m強の規模をもつ埋葬施設が存在することがほぼ確実に、ほかの方法でもその蓋然性が追認された。注目されたのは、埋葬施設とみられる遺構が、地表からの深さ約75cmを境に異なる構造・材質に分かれると観察された点で

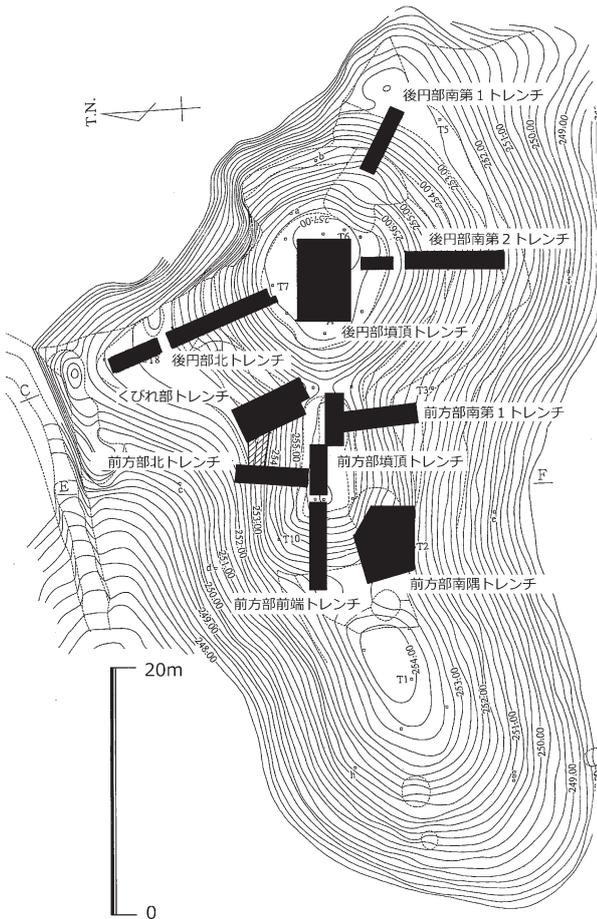


図4 調査区配置図

ある。また、墳頂平坦部の南端付近にこれとは異なる何らかの遺構の存在が推測された。

前方部墳頂と2号墳では、埋葬施設とみてよい明確な遺構の存在は把握できなかった。

後円部北側平坦部では、レーダー探査によって探査区内東よりの深さ1.8mの位置に南北3m以上×東西約2mの遺構の存在が推測されたが、磁気探査と電気探査ではその位置に明確な反応はとらえられなかった。また、探査区内西よりの比較的浅い位置に石垣のような構築物の存在が推測されている。

### 3 調査区の配置

2次と3次で実施した墳丘調査では、後円部に3箇所、前方部に5箇所、くびれ部に1箇所の合計9

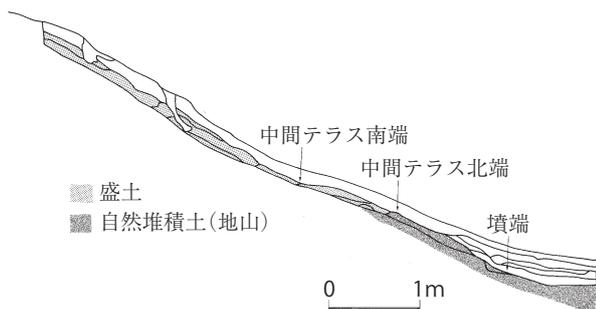


図5 後円部北トレンチ断面図

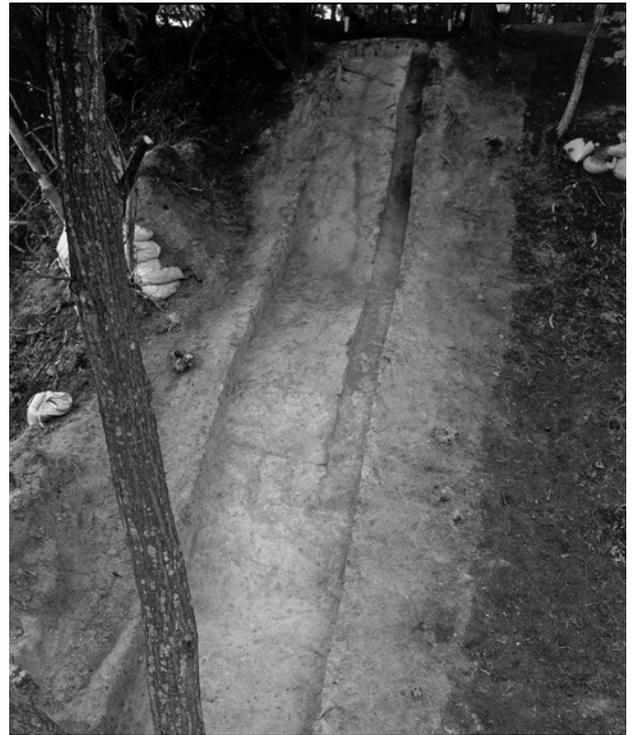


図6 後円部北トレンチ調査状況

本のトレンチを設定した(図4)。調査面積をできるだけ狭い範囲にとどめるよう配慮したが、墳丘形態と構造に関する確証をつかむためにやむをえず拡張したトレンチもある。後円部墳頂調査は2次～4次に渡って行い、拡張によって最終的には2箇所のトレンチとなった。

以下、各トレンチの成果について現時点の見解を述べる。

### 4 後円部トレンチ

#### (1)後円部北トレンチ(図5・6)

後円部北斜面とその北側にある平坦部を貫通するように設定したトレンチであるが、途中で立つ太い木のため南北の調査区に分割させている。

南側の調査区では墳丘面・墳端・テラス・墳頂肩

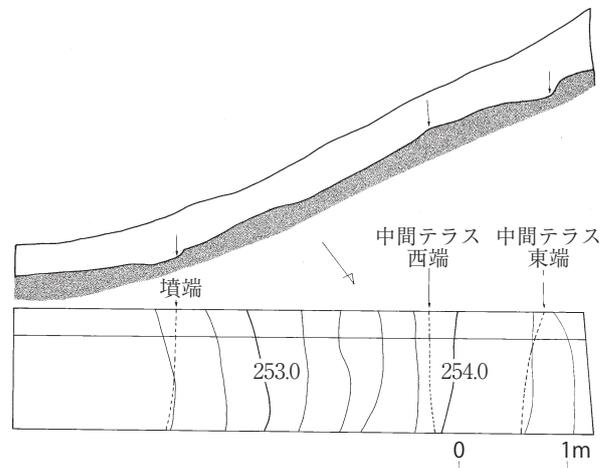


図7 後円部南第1トレンチ断面図

部を検出しており、各部分の標高は、墳端が252.7m、テラスが254.1m、墳頂肩部が256.5mである。ただし、墳丘面が後円部中心に向かってなお上っていくことから、本来の墳頂肩が現在よりも高い位置にあったことは確実であり、墳頂肩の位置に関しては以下のトレンチでも同様と考えてよい。

テラス幅は1.3mである。葺石は認められず、各部分は最終的にサブトレンチによる断ち割りをもとに判断した。この点も以下のトレンチにおいて同様であり、本古墳には葺石が採用されていないことが確定している。

盛土はテラス付近より上部の標高253.7m以上で確認され、それより下部では地山削り出しによって墳丘がつけられている。盛土中から弥生土器とみられる土器片が1点出土した。北側の調査区は、探査によって推定された遺構の確認を目的としたものであるが、現地表面下30cmで地山面に達し、ここには遺構が存在しないことが確定した。

(2)後円部南第1トレンチ(図7・8)

後円部の南東斜面に設定したトレンチである。墳丘面・墳端・テラスを検出しており、各部分の標高は、墳端が252.7m、テラスが254.2mである。テラス幅は1.1mである。調査区内では盛土が検出されず、この部分では墳丘がすべて地山削り出しによってつけられていることが判明した。

(3)後円部南第2トレンチ(図9)

後円部の南斜面に設定したトレンチである。墳丘面・墳端・テラスを検出しており、各部分の標高は、墳端が252.5m、テラスが254.2mである。テラス幅は



図8 後円部南第1トレンチ調査状況



図9 後円部南第2トレンチ調査状況

1.1mである。盛土はトレンチの上部、標高254.7mより上に施されており、淡黄色砂質土と黄褐色砂質土がほぼ水平に積まれているようすが見て取れた。

(4)後円部墳頂南トレンチ(図10)

探査によって推定された遺構の確認のため墳頂平坦面の南端部に設定したトレンチであるが、前述のとおり遺構は存在しなかった。

墳丘面と墳頂肩部を検出しており、墳頂肩部の現標高は256.4mであった。盛土はほぼ水平に積まれていたが、地山面が中心に向かって上っているためその厚さは均一でなく、最も薄いトレンチ北端部分での厚さは20cm程度に過ぎなかった。

注目すべき点としては、トレンチ内で古墳築造後に形成された東西方向の断層が検出されたことがあげられ、これによって南側の墳丘が15cm程度下方に



図10 後円部墳頂南トレンチ調査状況

ずり落ちていることが明らかになった。表土付近から土師器片が数点出土している。

## 5 くびれ部トレンチ

### (1)くびれ部トレンチ (図11・12)

くびれ部の構造および前方部と後円部の墳端ラインを確認するため、北側くびれ部に設定したトレンチである。また、第3次調査において、本トレンチと後述の前方部北トレンチを連結する拡張トレンチを設定しており、この成果もふくめて記述する。

墳丘面・墳端・テラスを検出しており、各部分の標高は、墳端が252.8m、テラスが254.4mである。盛土はテラス付近の254.0mより上部に施されていた。墳端の外側には幅1.2m前後の平坦部が削り出され、その外側は自然斜面へ続くとみられる。この平坦部は前方部側へ向かうにつれてしだいに幅を狭め、拡張トレンチ内部で収束することが判明した。同様に

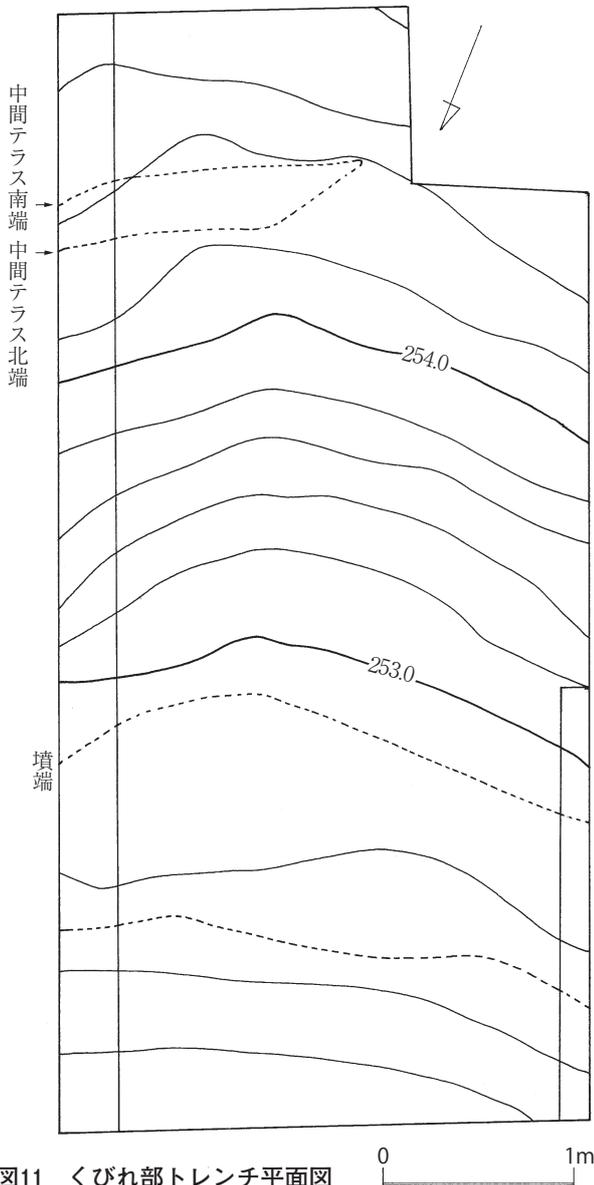


図11 くびれ部トレンチ平面図



図12 くびれ部トレンチ調査状況

テラスもトレンチの東壁付近で約50cmの幅をもつものの、トレンチ内部で収束している。以上の点は測量調査の観察結果を裏づける内容である。

墳端付近からロクロ整形の土師器杯が数個体分出土した。

## 6 前方部トレンチ

### (1)前方部北トレンチ (図13)

前方部の北斜面に設定したトレンチで、トレンチ下部で先述の拡張トレンチと連結している。墳丘面と墳頂肩部を検出したものの、明確な墳端は認められなかった。この点は拡張トレンチおよび測量調査の結果と整合する。墳頂肩部の現標高は255.1mである。盛土は斜面途中の254.3mより上部に施されており、厚さ5cm前後の盛土がほぼ水平に何単位も積まれている状況が確認された。



図13 前方部北トレンチ調査状況



図14 前方部南トレンチ調査状況

また、盛土最下層の直下には炭化物粒を多量にふくむ黄褐色砂質土層が薄く広がっており、これが旧地表面と判断されると同時に、墳丘築成前に地表が焼き払われるような整地行為が行われたことが推測された。

(2)前方部南トレンチ (図14)

前方部の南斜面に設定したトレンチで、トレンチ上部で後述の前方部墳頂トレンチ東区と連結している。墳丘面・墳端・墳頂肩を検出しており、各部分の標高は、墳端が253.1m、墳頂肩が255.2mである。

本トレンチではテラスが検出されなかったことから、トレンチの東側でテラスは収束しているとみられる。盛土はトレンチ上部の255.1mより上部で認められ、トレンチ内におけるその厚さは最大で30cm程度であった。流土中から土師器片が1点出土しているが、小片のため器形や年代は不明である。

(3)前方部前端トレンチ (図15・16)

前方部の西斜面に設定したトレンチである。墳丘面・墳端・墳頂肩を検出しており、各部分の標高は、墳端が253.3m、墳頂肩が255.6mである。検出した墳端線は仮想墳丘主軸に対して斜交しており、測量図による所見と一致している。盛土は254.2m付近より上部で認められ、厚さ5cm前後の盛土がほぼ水平に何単位も積まれている状況が確認された。後述する前方部墳頂トレンチにおいて、地山面が東側すなわち後円部側に向かって上ってゆくことが確認されているので、盛土の厚さは最大でも80cm程度と考えられる。

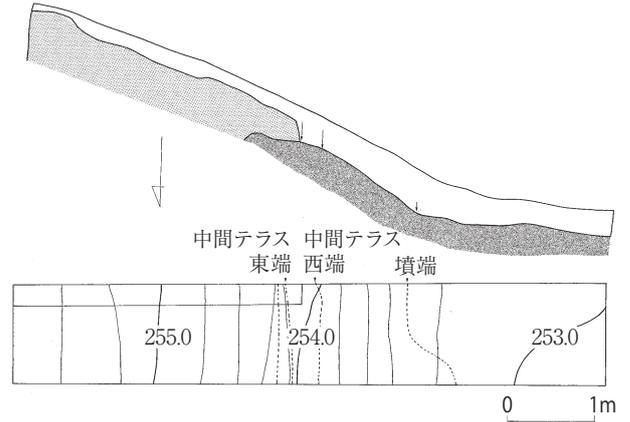


図15 前方部前端トレンチ断面図

また、地山と盛土の境部分にはテラス状の平坦部が認められ、前方部前端斜面にテラスが設けられたことも考えられたが、後述する前方部南隅トレンチの結果により、その可能性は低いと判断される。

(4)前方部南隅トレンチ (図17)

前方部南側コーナーおよびその墳端ラインを確認するため設定した不整扇形のトレンチである。墳丘面と墳端を検出しており、墳端の標高は北壁とコーナーで253.3mである。前方部前端線は墳丘仮想主軸に対して斜交し、先の前方部前端トレンチの結果と対応する。

一方、前方部南斜面には明確な墳端が形成されずに墳丘斜面が自然斜面へそのまま続くとみられ、測量図による所見を裏づける。盛土はトレンチ上部の標高254.4mより上に確認された。

また、トレンチ北東部には攪乱坑があって墳丘が

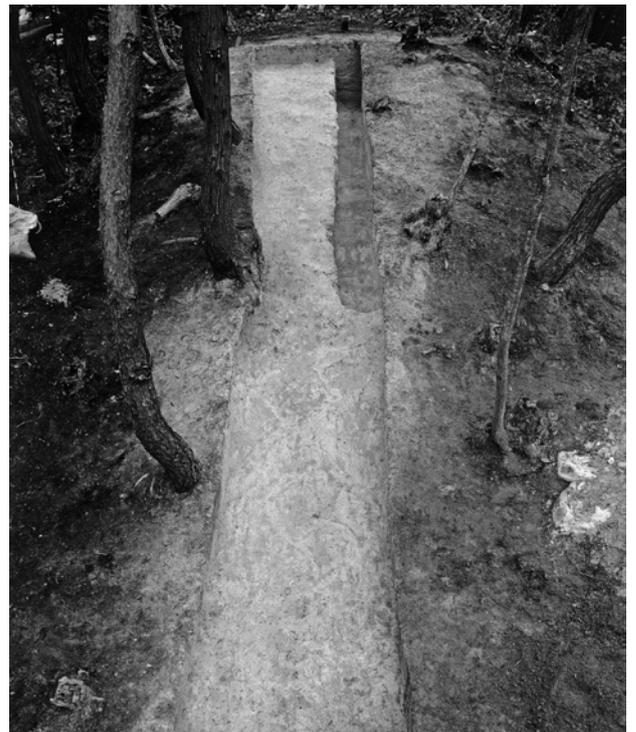


図16 前方部前端トレンチ調査状況



図17 前方部南隅トレンチ調査状況

大きく損なわれ、ここから9世紀前半ごろのものとみられる土師器小型甕が2点出土した。この土坑は測量図にも表れており、古代に何らかの目的で墳丘が改変されたとみられる。

(5)前方部墳頂トレンチ (図18・19)

前方部の構造および前方部埋葬施設の有無を確認するため設定したトレンチであり、仮想主軸線に対して南東側の東区と北西側の西区に分割して掘削した。

トレンチ内部に明確な遺構は確認されず、前方部上に埋葬施設が設けられた可能性はきわめて低いと判断される。墳丘面は、西区西端付近が標高255.6mで最も高く、くびれ部に向かうにつれてしだいに低



図18 前方部墳頂トレンチ調査状況



図19 前方部墳頂トレンチ土層堆積状況

くなってゆき、東区東端では255.3mであった。

断面観察によって10cmの厚さを一単位とする盛土がほぼ水平に積み重ねられている状況が見取れたが、地山面が後円部に向かってしだいに上ってゆくことから、盛土は西区西端で60cmと最も厚く、東区東端では15cm程度の厚さにすぎなかった。

7 墳丘形態の復元

トレンチ調査の結果と所見をもとに、長井前ノ山古墳の墳丘形態と規模の復元を試みる (図20)。

踏査時からすでに本古墳は前方後円墳の可能性が



図20 墳丘形態復元図

きわめて高いと考えられたが、後円部に設定した3本のトレンチとくびれ部トレンチからもこれを否定する所見は得られず、主丘部が円丘であることは疑いない。

また、この4本のトレンチいずれにおいても、墳丘斜面の途中でテラスとみられる平坦部を検出しており、後円部が2段築成であることも確実である。

以上を前提とし、さらに未掘部分の等高線とも大きな矛盾がないように墳端とテラスを結ぶ正円を描くと、後円部基底（下段）直径として24.5m、上段直径として18.0mという値が得られる。

テラス幅は各部によって異なるが、1.2m前後とみるのが妥当であろう。

後円部墳頂については、検出された墳頂肩が2箇所のみであるためやや困難を伴うが、同様の方法によって直径10.0mとみるのが妥当と考えられる。

くびれ部については、くびれ部トレンチおよび前方部南トレンチの成果から、基底幅10.0mと考えられ、くびれ部斜面途中で後円部のテラスが収束することになる。

前方部では、斜面に設定した4箇所のトレンチによって検出された墳端を結ぶことにより、前端幅を11m程度とみることができる。このばあい、前端線が墳丘主軸に対して斜交し、両コーナーの角度が異なるという非対称的な形態に復元される。

一方、前方部墳頂については、3箇所検出された墳頂肩をもとに基底に相似する形態を想定することができるが、くびれ部側の東端部の位置と形状については根拠を欠く。この点については、くびれ部上方の後円部斜面にスロープのような施設の存在を示す等高線の変化がみられないことから、前方部墳頂東端はくびれ部にほぼ相当する位置にあり、墳丘主軸に直交する直線をなすものと想定しておきたい。

以上の検討を総合すると、長井前ノ山古墳の墳長は36mとなり、墳丘高は後円部が4.2m、前方部が2.3mに復元される。後円部中心と前方部前端線中点を結んだ墳丘主軸の方位は、N87° Wである。前方部・後円部とも墳丘に葺石は施されず、埴輪も樹立されない。

墳丘のほとんどは地山削り出しによってつくられ、盛土が行われたのは墳丘上半部のごく一部にすぎない。後円部墳頂トレンチでも盛土の厚さは20～40cmで、後円部中心付近が旧地形においても最高点であることが判明しており、古墳の築造にあたって盛土の量を最小限にすることが意図されたと理解される。正確な盛土量を算出することは困難だが、墳丘下半部の削り出しと尾根の切り離しによって墳丘の完成に必要な土量はほぼ確保されたとみられる。

墳丘調査から得られた長井前ノ山古墳の形態的特徴として、①小型の前方後円墳でありながら墳丘の高さが比較的大きく、ボリューム感があること、②後円部に対して前方部が小さく、また前方部があまり開かないこと、③墳丘基底を水平にし、墳丘主軸を真の東西にほぼ一致させるなど築造にあたって高度な設計企画が存在したことが指摘できる。特に②については、前方部西側の尾根にはなお空間的余裕があり、より大きな前方部をつくるのが可能とみられながら、あえてこの規模と形態にとどめられたようすがうかがわれる。

## 第4章 埋葬施設の構造

### 1 検出状況

長井前ノ山古墳の埋葬施設は、後円部のほぼ中央に設置された組み合せ式の石棺である。物理探査によって埋葬施設の位置と方向はほぼ把握されていたが、それが石棺と判明したのは第3次調査の途中であった。

調査経過の項で概略を示したように、第2次調査において後円部で検出された集石遺構は、川原石が詰め込まれた土坑であり、出土遺物から中世に掘られたものであることが第3次調査開始後まもなく明らかになった。この遺構に関する内容は後に項を設けたため省略する。土坑の底には板石組みの施設があり（図21）、当初は中世の構築物と理解されたが、板石やその周囲の川原石が土坑壁にもぐり込むことから疑念が生じ、精査と検討を重ねた結果、古墳本来の埋葬施設である石棺が中世に改変を受けている

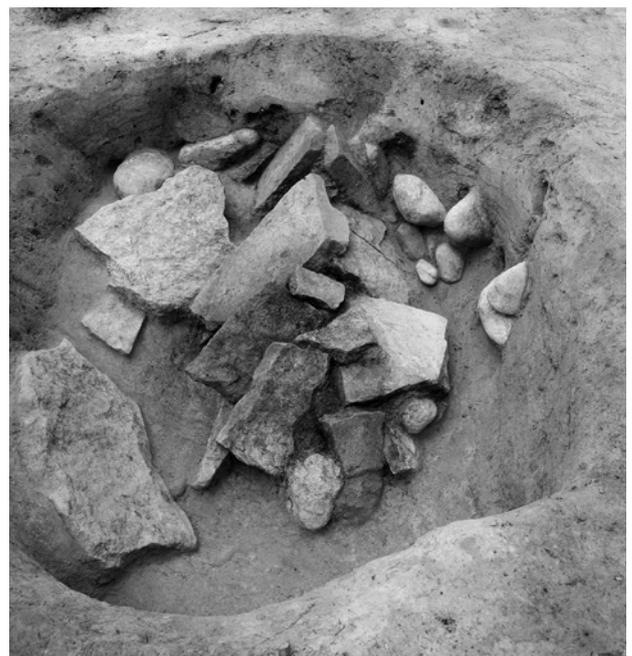


図21 合掌形石棺の検出状況



図22 墓壙と棺被覆平面図

ものと判断されるに至った。

注目されたのは、2次的な移動を受けていないことが明らかな石棺蓋石が、棺身の長辺から立てかけられた2枚の板石によって合掌形をなす構造であったことと、複数の人頭大の川原石によって蓋石が覆われるような状況が認められたことである。本古墳の埋葬施設が通常の箱形石棺とは異なる形態と構造を持つことが、この時点で認識されることになった。

以上の所見を踏まえて墳頂トレンチ全体の平面精査を行ったところ、不整長方形を呈する墓壇プランをほぼ把握できた。そのため、石棺の想定主軸線を基準に墓壇内を10小区に分割する調査区を設定して墓壇埋土の掘り込みを進めた。

以後、埋葬施設の構造について述べるが、中世遺構によって埋葬施設の東半部が破壊と改変を受けていたため、所見の多くは西半部の精査と観察から得られたものであることをあらかじめ断っておきたい。

## 2 墓壇

後円部墳頂の平面精査によって、墳頂平坦面のほぼ中央で、墳丘主軸と並行する東西方向に長辺をもつ不鮮明な長方形プランを検出した。このプランを墓壇と認定して掘り下げを行った(図22)。

墓壇は墳丘の盛土が行われた後、盛土及び地山を掘り込んで形成されている。その規模は上面で短辺(南北)2.3m×長辺(東西)4.1m、深さ約0.5mである。

その後、墓壇の底面に石棺設置用の掘り方が掘られている。掘り方の規模は、上面で短辺(南北)1.3m×長辺(東西)3.3m、深さ約0.7mとなっている。掘り方は墓壇の東寄りに掘られているため、墓壇底面の南・北・西の3面には約0.35m幅の地山の平坦面(テラス)ができています。墓壇上面から掘り方底面までは、あわせて約1.2mの深さになる。なお、南辺の墓壇壁は中世遺構の構築により一部破壊されていた。

上に示した数値が墓壇の最終的な規模を示すものであるが、墓壇の東辺には長さ0.9mの舌状の張り出しが取り付いていた。この張り出し部の底面は東側から西側に向けて、ほぼ石棺東小口部分に向かって約30度の傾斜をもって下っている。墓壇底面まで傾斜が達しており、墓壇の東側だけは斜めのスロープ状になっている。

土層断面の観察により墓壇埋め戻し以前にこのスロープが埋め戻されていたことが確認できたため、スロープの役目が終わった段階で土を積み重ね、墓壇の平面形を長方形に整えた後、墓壇の埋め戻しが行われたことがわかる。



図23 埋蔵面と赤色顔料

そのため、このスロープは石棺構築及び埋葬段階で墓壇底面まで資材や遺体を運び込むための通路として利用された部分と考えられる。

墓壇に設けられたテラスは、合掌形石棺の蓋石の下端が石棺構築掘り方の上方壁際に接していたことから、合掌状の蓋石を支えて固定するためにも有効であったと考えられる。

石棺構築後の墓壇底面には、ほぼ全面にベンガラとみられる赤色顔料の散布が確認でき、この面を埋葬面であると認定した(図23)。

また墓壇埋め戻しの途中にも赤色顔料の散布が見られ、墓壇を埋める以前とその途中で何らかの埋葬儀礼が行われていたと考えられる。

墓壇は石棺を粘土や礫で被覆した後に丁寧に埋め戻されている。墓壇の埋め戻しは土層断面の観察により、質の異なる黄白色砂質土と黄褐色粘質土を選択して南側と北側から交互に重ねるように行われていることが確認できた(図24)。埋め戻しの途中には面として捉えられそうな段階がいくつか見られ、全体を一旦叩き締める作業が行われているようだ。その意図は必ずしも明確でないが、このような手法を採用することで、後に墓壇が陥没することを防ぐ



図24 墓壇埋土



図25 棺被覆状況平面図



図26 棺被覆状況

などの効果があったと考えられる。また、2つの質の違う土は当古墳および付近の地山に見ることができ、掘り上げた土を用いて墓壙が埋め戻されている可能性が極めて高い。

墓壙が全て埋め戻された後、墳頂平坦面全体に厚さ20cm以上の盛土が施されており、完成した墳丘面からは墓壙のプランを確認することができない状態にしている。墓壙プラン検出時に不鮮明な長方形としかその平面形状を捉えることができなかったのは、掘削の深さがこの盛土内に留まっていたためであり、結果として墓壙構築当時の掘り込み面よりやや上のレベルから掘り下げを開始してしまったことになる。

### 3 棺被覆

石棺は粘土と石によって被覆されていた。被覆の主体をなすのは人頭大の川原石で、やや小ぶりの角礫が少数混じり、石どうしの間はきめ細かな均質の粘土で埋められている(図25・26)。川原石が多様な種類の岩石からなるのに対し、角礫が石棺材と共通する安山岩のみであることから、前者は古墳近くの川原で採取されたもの、後者は石棺材として準備さ



図27 西小口の被覆状況

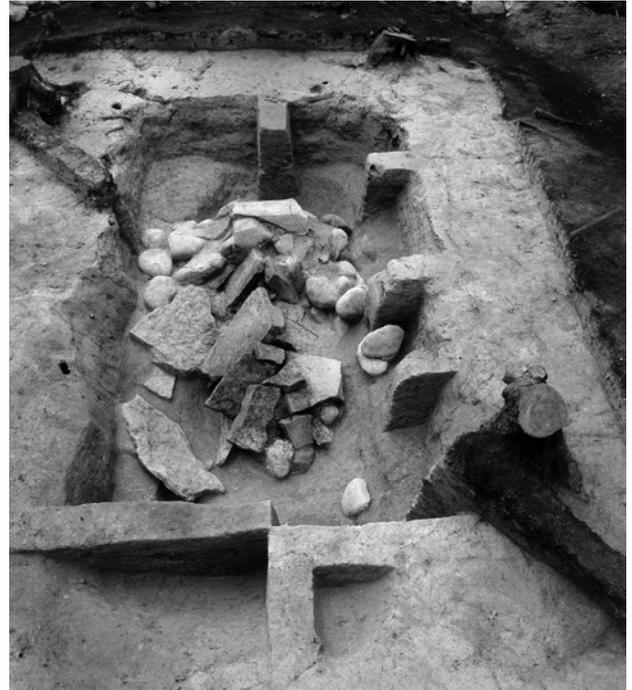


図28 被覆上部の板石設置状況

れた石材の残りが被覆に転用されたものと推測される。このことから、石棺材はこの場所で最終調整の加工が行われた可能性も考えられる。

石は部分的に何層にも重なり、粘土も複数の層に分けられることから、被覆は一回の工程で完成したのではなく、幾度かの工程に渡ったことがわかる。

一方、西側の小口付近では状況がやや異なっており、ここでは最終的に3枚の大きめの板石が立てかけられ、川原石が被覆の裾を取り囲むように半円形に置かれていた(図27)。被覆上には、埋葬施設の主軸に直交するように板石が水平に置かれ、この被覆上面の石の設置が被覆過程の最終段階にあたるものと考えられる。

なお、東半部が同様の構造であるか必ずしも明確ではないが、上記の所見を積極的に否定できる根拠は得られていないため、現段階では東西同じ構造で被覆されていたと考えている。

以上を踏まえると、被覆の完成形態はカマボコ状をなし、東西約3.0m、南北約2.0m、石棺底面からの高さ1.0mの規模をもっていたと考えられる。

また、最終段階に置かれた板石は調査時に1枚が残るのみだったが、本来は5枚程度置かれていた可能性がある(図28)。

### 4 石棺

本古墳の石棺はすべて安山岩製の板石で作られ、蓋石が水平に置かれず合掌状をなすことを最大の特徴とする。この構造の埋葬施設は「合掌形石室」の名で呼ばれることが多いが、本古墳の埋葬施設は規



図29 蓋石構築状況

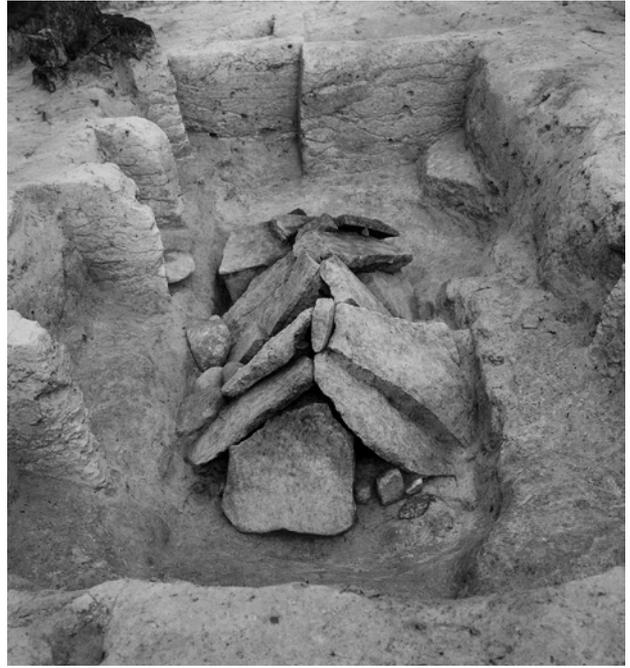
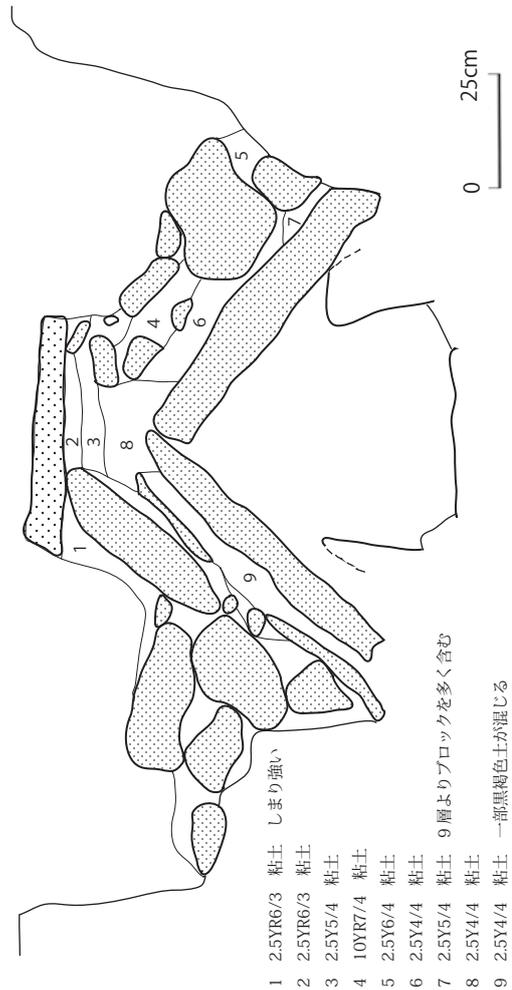


図31 石棺西側小口部の構築状況



図30 蓋石構築状況平面図



- 1 2.5YR6/3 粘土 しまり強い
- 2 2.5YR6/3 粘土
- 3 2.5Y5/4 粘土
- 4 10YR7/4 粘土
- 5 2.5Y6/4 粘土
- 6 2.5Y4/4 粘土
- 7 2.5Y5/4 粘土 9層よりブロックを多く含む
- 8 2.5Y4/4 粘土
- 9 2.5Y4/4 粘土 一部黒褐色土が混じる

図32 蓋石構築状況景

模と構造の点から石棺の範疇に加えられる要素が多く見られることから、本書では「合掌形石棺」の名で統一することにした。

(1)蓋部

合掌形をなす蓋石は2対8枚の板石を基本とする。ただし、中世に東南端の1枚がはずされ、東側の2枚も一部破壊されていたため、本来の位置と状態を保っていたのは残りの5枚である(図29)。

これらの蓋石は南北両側から側石に立てかけられたうえ、対となる反対側の板石と組んでいた(図30・32)。

蓋石は石棺掘り方の上部の壁に角を接するように設置され、設置面には粘質土が置かれたり、小石が敷かれたりして蓋石の安定が図られていた。

石の組み方から、蓋石の設置は東から西に向かい、対の石では北側が先に設置されたことがわかる。すなわち、北東端の蓋石が最初に、南西端の蓋石が最後に設置されていた。西頭位であれば比較的長いあいだ遺体頭部が露出し、東頭位であれば頭部が真っ先に隠されたことになる。

蓋石どうしの間を開く隙間は、やや小さめの板石と川原石を置くことでふさがれていたが、石の重なる部分にはきめの細かい均質な粘土が詰められ、棺を密封しようとする強い意図が感じられた。

また、粘土の一部にゴルフボール大の川原石が混入されていたが、その意味は明確でない。

蓋石を合掌形に組むことで小口部分にできる三角形の隙間を西小口で不整六角形の板石がはめ込んで



図33 蓋石構築状況平面図

塞いでいる(図31)。したがって、この板石はあらかじめ据えられて天井石の荷重を支えるものではない。事実、この石は蓋石調査の前に容易に外すことができた。東小口は中世に改変されているため、これと同様の構造であったか明らかではないが、後述する棺身部の構造から考えて、より大型の石で隙間がふさがれていた可能性が高いと推定できる。

(2)棺身部

底石・小口石・側石からなり、用いられた板石の数は底石3枚、小口石2枚、側石5枚(北側2枚・南側3枚)である(図33・34)。石の組み方および断ち割り部をもとに棺身部の構築過程を復元すると、墓壇底面の東寄りに短辺(南北)1.3m×長辺(東西)3.3m、深さ約0.7mの掘り方を掘る。掘り方底面に底石を置き、底石の周囲にまず両小口石が立てられ、南北両側から側石が立てかけられる。側石を固定す

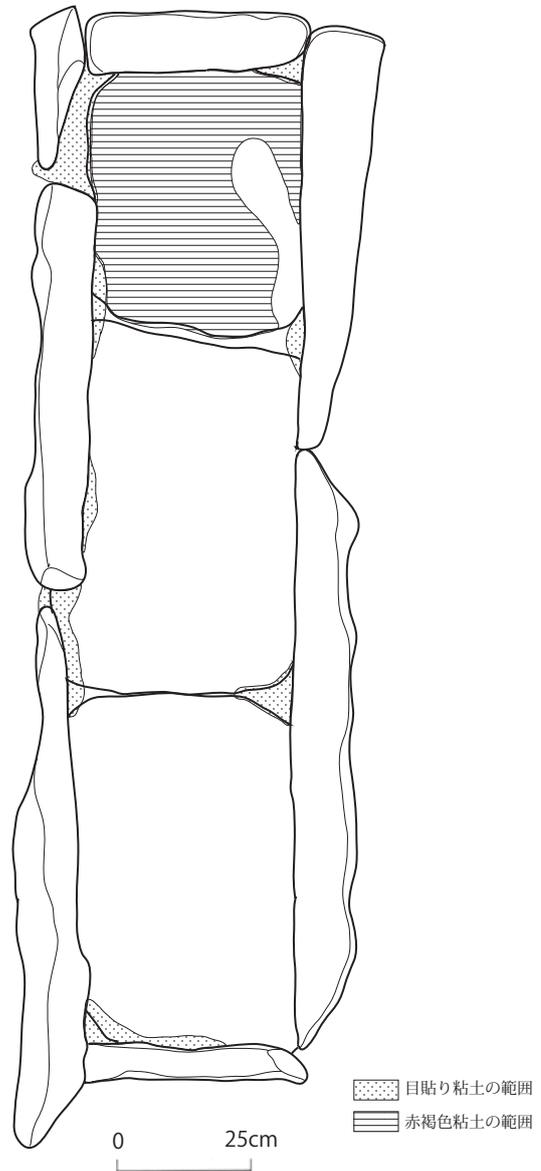


図34 棺身部平面図

るために側石の根本を拳大の川原石で押さえ、側石の上端部よりやや下の高さまで掘り方を埋め戻す(図35・36)。底石から側石の上端部までの石棺内の深さは約50cmある。

この段階で棺身部の上端は墓壙底面より少し下がった位置となり、棺身部と掘り方の壁との間にできた低い隙間に、この後、蓋石の底面が据えられる。

石棺東小口周辺部は後世の経塚による再利用の際に一部破壊されて構造が不明な部分があるが、残存する痕跡から推定した東側部分の構築方法は他の3辺とは違ったものである可能性が高い。

小口石および側石の底石からの高さを比較すると、南小口石の高さが約20cmであるのに対して、他の3辺は50cm前後あり、東小口部分に使用されている石だけが他の3辺と違う法量であることがわかる(図37)。さらに、西小口石は東小口石と比べて明らかに厚く大きな石を使っており、両者が意図的に選択されて使い分けられていたと考えられる。

東小口は最終段階の断ち割り調査の結果、掘り方底面に小口石を置き、その外側を川原石で押さえた後、川原石が隠れるぐらいの高さから墓壙底面の高さまで緩やかなスロープ状の広場を作るように盛土して埋め戻されていることがわかった(図38)。

このため、墓壙底面から棺身部の東小口部分を通して石室内部まで直接続く広いスロープができていたことがわかった。このスロープは、墓壙上面から底面まで続く張り出し部のスロープと少しだけ段差を持ちながら繋がる形になる。

この段階では墳丘面から掘り込まれた墓壙の底面

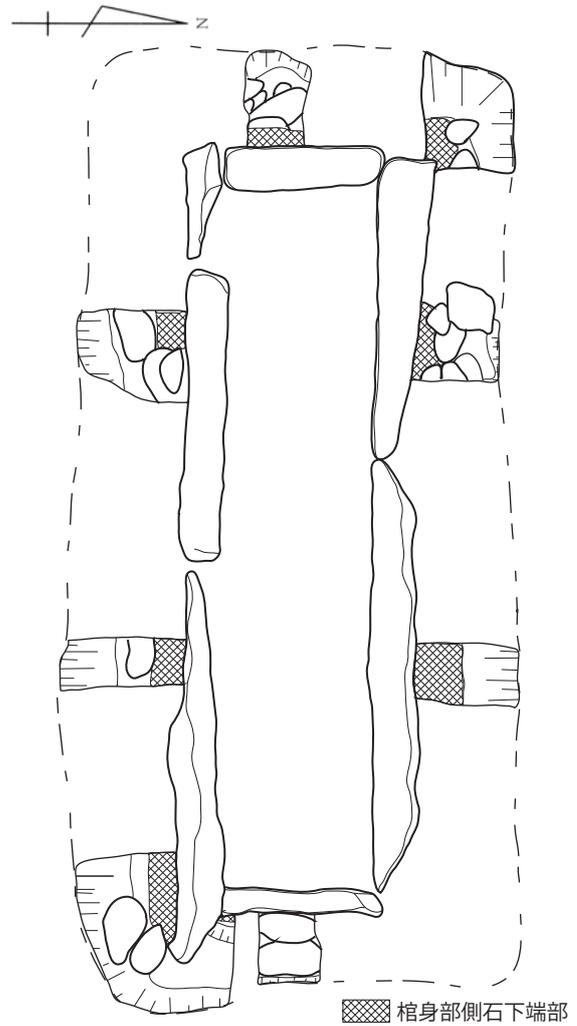


図36 石棺設置基礎構造(1)

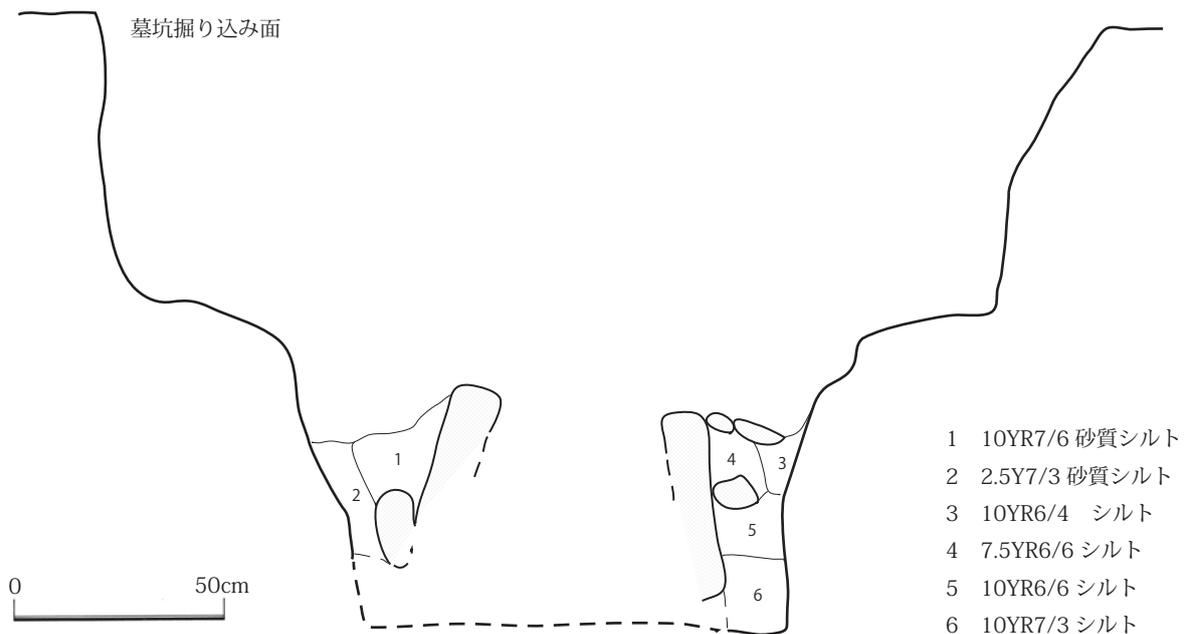


図35 石棺設置掘り方断面図

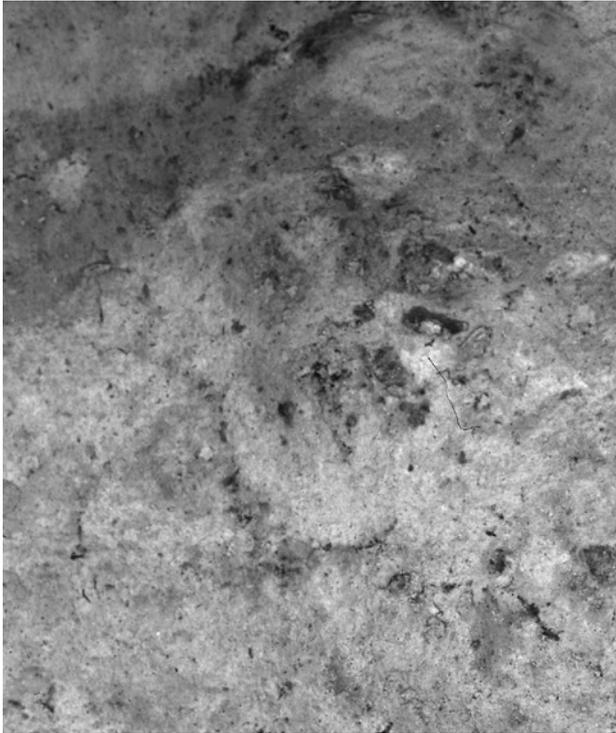


図37 石棺棺身部の基礎構造(2)

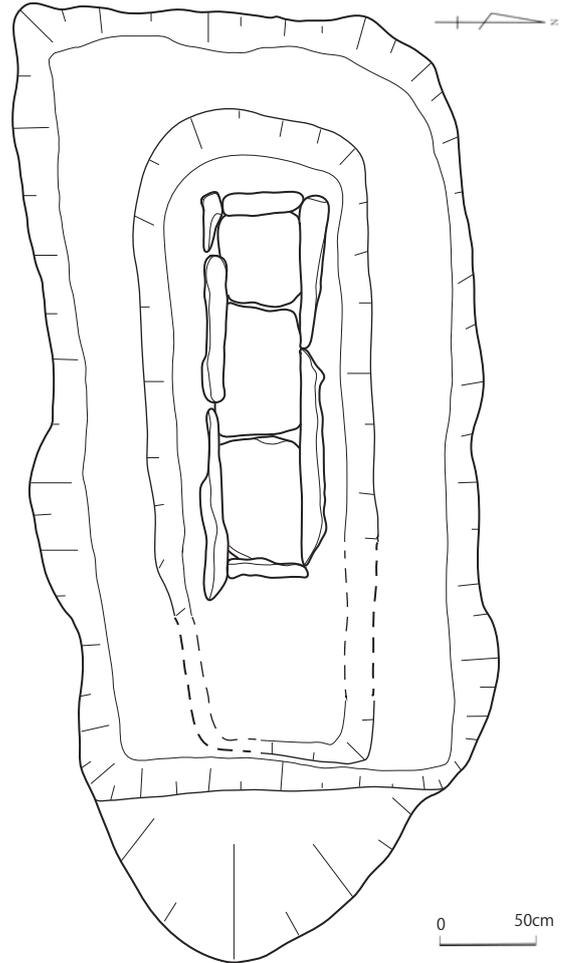


図39 最終段階の墓墳全体図

に棺身部が埋まった状態で、墳丘面から石棺東小口に向けて斜めのスロープ状の墓道が設定された姿が復元できる(図39)。

小口石と側石はいずれも内傾し、石棺底面が最も広い。東小口石は先にもふれたとおり、現況では西小口石よりも明らかに高さが低く、この部分は後世に経塚として再利用される段階で掘削された部分であることから、経筒などを石棺内に安置する際に作業をやすくするために打ち欠かれた可能性もある。

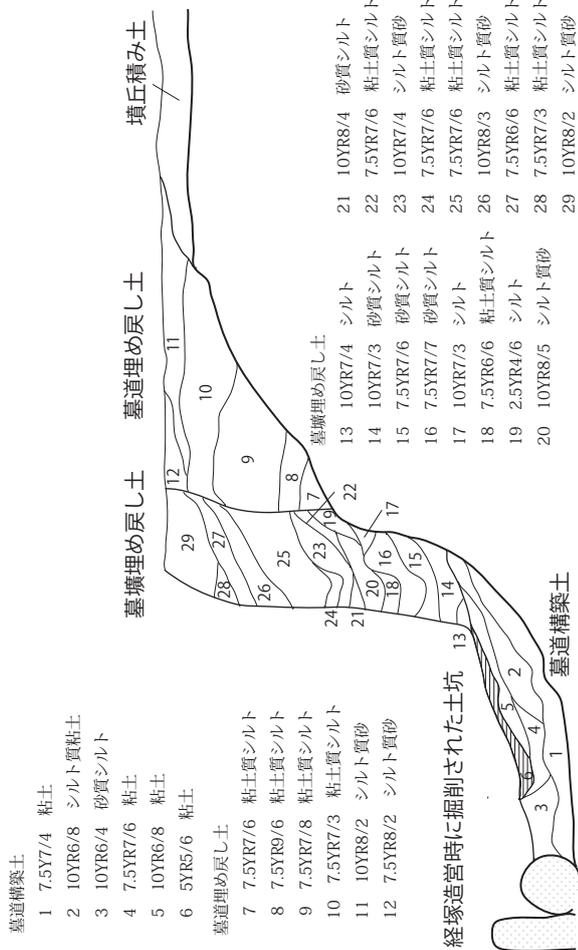


図38 東小口部周辺土層堆積状況



図40 東小口石内面の状況

もし本来の東小口石が西小口石と同じ高さまであったと仮定した場合、経塚として再利用する際に、邪魔であれば蓋石同様に取り外してしまえばよいわけで、あえて20cm程度残すように打ち欠くのは不自然であると考えられる。しかも内面には稜線が削り出されている部分(図40)があることから、現段階では東小口面は当初の小口石が残存していると考えて、このような構築順序を想定しておく。

このように、石棺東側の墳丘上から石棺の小口部分に向かって墓道が形成され、遺体が東側から棺の中に搬入されたことが想定できることから、埋葬施設を構築する上で東側が強く意識されていたことがわかる。

石棺に使用されている石材にはそれ以外に明確な造作はなく、石棺は基本的に石の自然面を極力生かしつつ構築されたと理解できる。

また、各小口石と側石の上端はまったく同一面をなしていないが、蓋石が合掌形であることから構築時にこの点はとくに問題にされなかったと考えられる。

棺底面の大きさは、長さ(東西)が193cm、幅(南北)が東端部で49cm・中ほどで51cm・西端部で53cmである。東西両端における底面の高さはほぼ等しいが、東底石と中央底石の接点付近が最も低くなっており、それによって底面の西側が高いかのような印象を与える。これらの点は埋葬頭位が西であった可能性を示唆するが、その差はごくわずかであり、頭位方向の決定的根拠とは言いがたい。仮に西頭位であったとすると、石棺の主軸の方位はN87°Wとなり、墳丘主軸とほぼ一致する。また、棺底の東西両端、および中央底石と西底石の南北端では明らかに棺内覆土と異なる粘土が検出され、石棺材接合部の目張りのような用途が推測された。西底石の全面にも鮮やかな赤褐色を呈する粘土が認められ、意図的に置かれたものであることをうかがわせた。

## 5 石棺に用いられる石材について



図41 板石の自然面

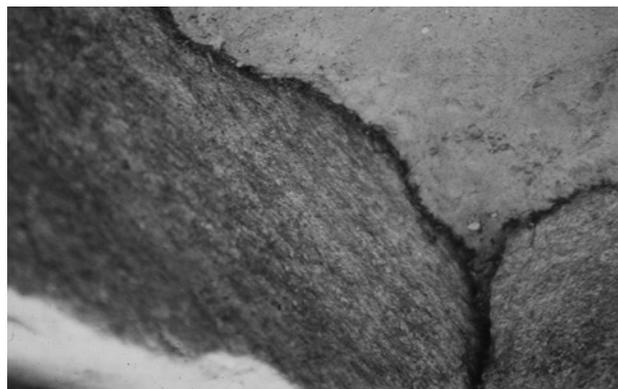


図42 板石の人工面

石棺にはすべて板状の安山岩が用いられている。風化した石の表面は茶褐色であるが、新鮮な面は紫色を帯びた灰色を呈する。側石や底石は取り上げていないので詳細は不明であるが、蓋石に限れば最大のもは長94cm、幅56cm、重62kgとなっている。

これらの板石の表面の状況を見ると、滑らかな面(滑面)と不規則な稜線をもつ粗い面(粗面)があることがわかる(図41・42)。板石の両面の構成をみると、滑面-粗面、粗面-粗面、滑面-滑面の3種類がある。この両面については滑面-自然面/粗面-分割面、あるいは滑面-加工面/粗面-自然面の二つの可能性が想定される。表面状況をみると滑面



図43 会津盆地の安山岩分布図

■新期(第四世)  
■古期(第三世)

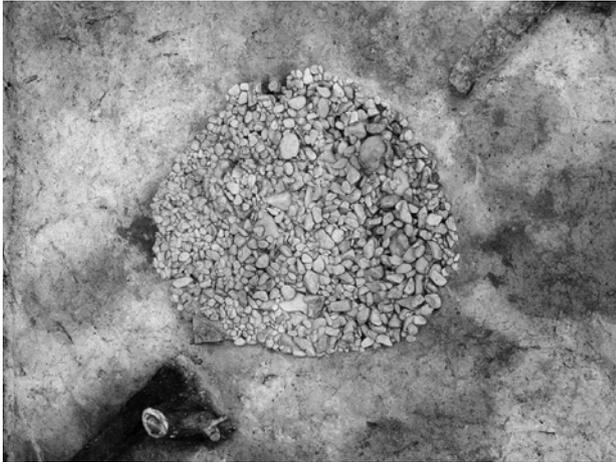


図44 集石遺構検出状況

に加工痕がほとんど観察されないことや、滑面に風化作用によると考えられる小穴（鉦物の脱落した小穴）が認められることから、滑面を自然面、粗面を分割面と考える方が妥当であろう。ただし、分割面にも工具の痕跡や加工痕がほとんど確認できず、どのような方法で分割したかについては不明な点も多い。西小口の板石頂部は敲打によって整形がなされているが、これが石棺構築時になされたものか、中世遺構構築時に加工されたものかは明らかではない。また、側石の一部には「はつり」の可能性のある工具痕や敲打痕がわずかに認められるが、いずれも加工は部分的で全体の形状を改変するほどのものではない。

安山岩はマグマが地上で冷やされて固まった火山岩の一種で、会津盆地周縁地域でも広くその分布が知られている（図43）。これらの分布を見ると、これらの安山岩が少なくとも長井前ノ山古墳のごく近隣に産出する石材ではないということが出来る。また、盆地周辺の安山岩は新期（第四紀）のものと古期のもの（第三紀）に大きく分けることができると

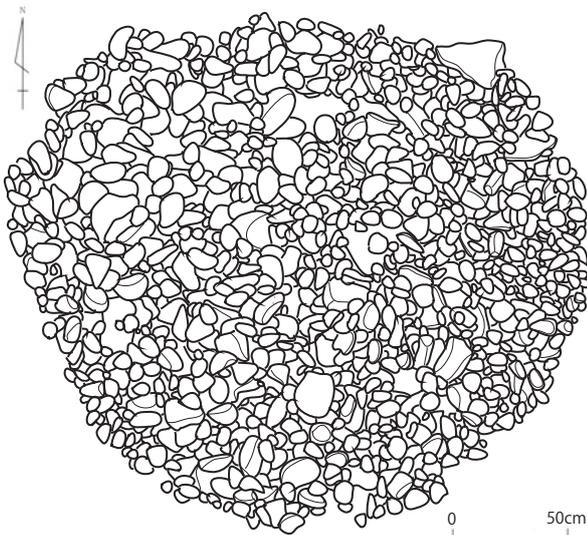


図45 集石遺構平面図



図46 集石半裁状況

されている。現在、各々の原産地の石材調査を継続しており、現段階で原産地を特定することは困難であるが、盆地東側の石材の肉眼観察比較によれば、新期の猫魔火山起源の石材がもっとも類似しているという知見が得られている。今後盆地東側の原産地の調査を進めるとともに、鉦物組成等の分析を行い、原産地の特定を進めていきたい。

石棺の被覆や堀り方内には石棺石材とは異なる種類の石が使用されている。拳大から人頭大あるいはそれよりもやや大きなものまでその大きさは様々である。これらの表面はいずれも水磨を受けており、川原石の特徴をよく示している。これらは近くの川原から古墳に持ち上げられた可能性が高いものと推定している。

## 第5章 中世遺構

### 1 検出状況

第1次発掘調査において、埋葬施設の墓壇の検出を目的として設定した後円部墳頂トレンチでは、墓壇と考えられた区域の中心からやや東寄り、現地表面から20～30cmという比較的浅いところから集石遺構の一部が検出された（図44）。集石遺構は直径10cmほどの川原石を用いたもので、直径2.5mほどの円形に広がり、中央に向かって緩やかな落ち込みが認められた（図45）。この遺構の存在は先に実施したレーダー探査などで予想されていたが（菊池・西村

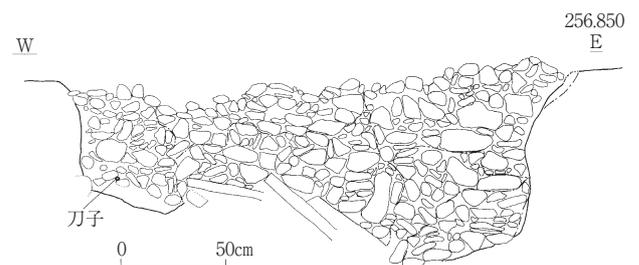


図47 集石遺構断面図



図48 土坑底部遺物出土状況

2000)、実際に検出された遺構を見ると、それが古墳にともなうものではなく、後世の遺構である可能性が高まった。

第2次発掘調査では、この集石遺構の範囲を確認した後、集石遺構の南半分の川原石を除去、半截した(図46)。その結果、この遺構は直径約2.5m、深さ約1mの土坑に大量の川原石を隙間無く詰め込んだものであることが判明した(図47)。

また、集石の下には板石を組み合わせた施設が確認され、後にこれは古墳の石棺を再利用したものであることがわかった。

この時点で板石の上から鉄製品2点(剣と刀子)が確認された(図48)。次いで残された川原石の集

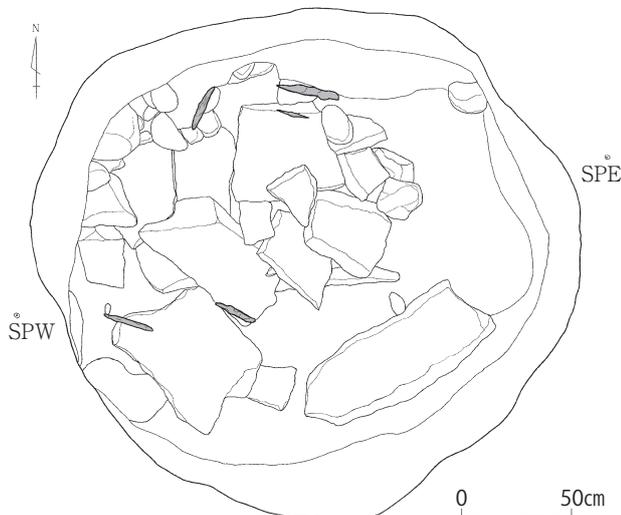


図49 土坑底部遺物分布図



図50 中世に組み直された蓋石

石を取り去り遺構を全掘すると、やはり板石の施設の上部付近から青銅製独鈷杵1点と鉄製品2点(刀子)が出土した。これら5点の金属製品は、板石の施設を取り囲むように配置されていた(図49)。

その後、合掌形石棺全体の被覆状況が明らかになると、集石遺構の下にある石棺の東半分が破壊され、石棺に使われていた蓋石を再利用し、組み直して施設を作っている様子が確認された(図50)。また、剥がされた蓋石の一部と思われる板石が施設の南側に放置されるような形で出土した。その他、小さな板石は集石部分にも含まれていた。

古墳の石室を再利用したこの石組み遺構の板石をはずし石棺内に流入・堆積した土砂を取り除いた結果、石棺東小口側石から約50cm中央寄りの所で、石

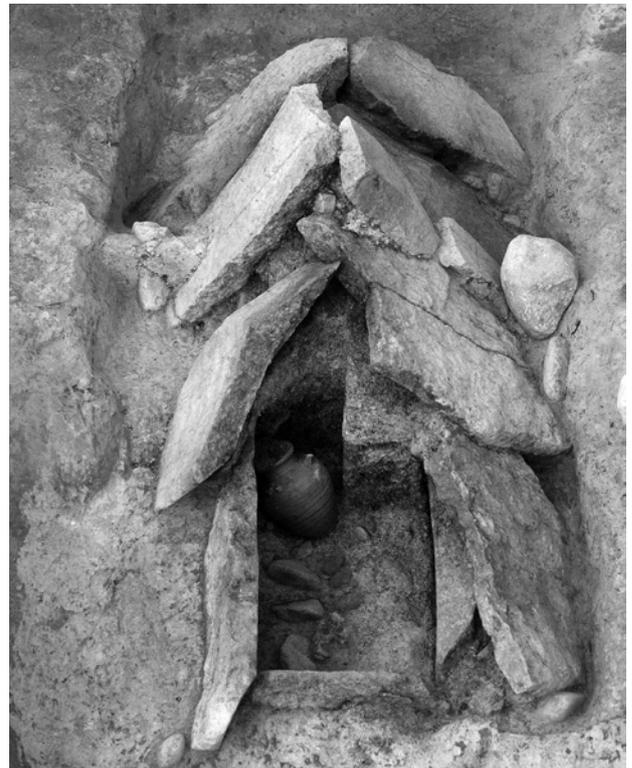


図51 四耳壺出土状況



図52 石製蓋出土状況

棺南側の側石にもたれるような形でほぼ完形の四耳壺が出土した(図51)。壺の底部は棺内の第6層上面に乗り、棺底までは約5cmの層が確認できた。また、この6層上面には、棺全体にわたって川原石が面的に検出された。

石棺の西半分は後世の破壊を免れたと考えていたが、石棺内の発掘を進めた結果、棺内の最も西側にあたる石棺の西小口石そばから石製容器の蓋と思われる遺物が出土した。身はなく、蓋だけが廃棄されたかのように天井部を下にした状態で埋もれていた(図52)。

さらにその石製蓋の直下から棺中央寄りにかけて、長さ約50cm、最大幅約26cmのやや大きめの板石が横たわって出土した。この板石は四耳壺と同じように、棺の底石面から約5cm上位の層に乗っていた。この板石は、もともと石棺の東半分を覆っていた蓋石の1枚と考えられ、石棺の一部が開口され開口部の閉塞までの間に、石棺の奥側にあたる西側に押し込められたものと考えられる。こうして石棺の西半分についても、内部は後世の改変の影響を受けていることが明らかになった。

## 2 遺構の性格

刀剣4点と独鈷杵1点に守られるような形で出土した石室内の四耳壺は、内部に土が堆積して根が入り込んでおり、特に底部には白っぽいシルト質の土が層的に確認できた。しかし、内部に金属・紙・木

片・人骨などは確認できず、その後の土の化学的分析でも有機物の痕跡は確認されなかった。

また、集石遺構や棺内から出土した川原石などには文字などが読み取れるものは無かった。その他の遺物等からもこの遺構の性格を決定付ける明確な証拠は見つかっていない。

しかし、四耳壺底部に堆積していた土については、ブロック状に白味がかかった土が固まっており、自然堆積とは考えにくいことから、人為的に壺に入れられたか、もしくは棺被覆に用いられた粘土が地震などの振動により落下した可能性も考えられる。人為的に入れたとすれば、密教の作法に「即ち光明真言を誦して土沙を加持し、之を病者に授けて其の惱を除かしめ、又は亡者の屍骸、或は墓上等に散じて諸罪を滅し、福報を得しむる法」「是れ土沙を加持して亡者の苦報を除き、浄土往生を得しむることを説けるもの」(以上『仏教大辞典』)という土沙加持という作法があり、これに類する機能を果たすために埋納されたと考えることもできる。古墳を再利用して葬られた者(後述)かあるいは元来の古墳の被葬者に対する供養として、こうした埋納が行われたという推測も成り立つ。

長井前ノ山古墳の中世遺構は、直径約2.5m、深さ約1mのほぼまっすぐ掘り込まれた土坑に握り拳大の川原石を隙間無く詰め込んだ集石部分と、その下の古墳の石棺を再利用した石組み部分からなる。集石部分に使用された川原石の数が約9,000個、重さは推定で約3tにも達する。

周辺地域で時期的に前後する同様の集石遺構としては、まず、長井前ノ山古墳の北西約1.8kmに位置する駒壇経塚(会津坂下町)があげられる。発掘により円墳状の塚の頂上部で川原石を使用した埋経施設が確認され、石製容器と漆塗り木製経筒が出土した。13世紀に築かれたものと思われる(吉田1996)。

長井前ノ山古墳の北東、直線距離で約5kmのところには松野千光寺経塚群(喜多方市)がある。同経塚群は12世紀から13世紀初頭にかけての経塚群・墳墓群とされているが、長井前ノ山出土のものと同様の珠洲系の四耳壺が2点出土していることが知られている。また、同経塚群では独鈷杵と刀子4本・鉄斧・鎧鉈(?)などの鉄製品、墨書礫がセットで出土した遺構、経筒と刀子5本などがセットで出土した遺構などが報告されている(辻・片岡1999)。

長井前ノ山古墳の南方約1.8kmに位置する雷神山古墳(会津坂下町)の後円部は、『新編会津風土記』にも「経塚」として記されており、戦後、銅製の経筒が出土したといわれている(会津坂下町1979)。

さらに、1978年頃には12世紀前半の渥美産と思わ

れる灰釉壺と刀子 2 本が出土しており（前掲吉田 1996）、川原石を使用した施設があったようだが出土状況の詳細は不明である。

また、雷神山古墳の南約 0.4km に位置する森北 1 号墳（会津坂下町）の墳頂部では、川原石を使った集石遺構が確認されているが、付随する遺物は確認されず、遺構の性格は不明である（土井・吉田 1999）。

さらにその南、長井前ノ山古墳から直線で約 4 km の地点には塔寺経塚（会津坂下町）がある。

このように会津盆地西縁の丘陵地帯には、古代末から中世にかけての経塚などに伴う集石遺構が集中している。それらはかつて古墳が形成された見晴らしの良い丘陵上に築かれる傾向がある。長井前ノ山古墳の集石・石組み遺構は、これら周辺の事例から経塚と考えることができる。

なお、石棺内西側から出土した石製蓋・板石については、出土状況から判断して、四耳壺の埋納と同時に置かれたものと考えられる。

棺内からは、四耳壺が出土した位置から約 10cm 西側（奥）で、須恵器系陶器の破片（把手部）が出土している。この破片は四耳壺に接合することから、四耳壺を埋納する際の前後に打ち欠かれ、同時に埋納されたと考えている。このことから、これらの遺物は一括して同時に埋納された可能性が高い。

一次・二次発掘調査での遺構プランの確認、及びその後の検討の中では、四耳壺を埋納する段階以外の再利用の痕跡を確認することはできなかった。

そのため、現段階では四耳壺を埋納した段階で古墳の石室が再利用され、その後は追加埋納などが行われなかったと考えている。

## 第 6 章 出土遺物

### 1 出土状況

本古墳から出土した遺物は、出土位置から埋葬施設内とその周辺、および墳丘上に大別される。前者の多くは中世の遺構に伴うため、これを中世遺構出土として区別することとし、以後、位置別に出土状況の概要を述べる。

#### (1) 埋葬施設

発掘調査中、石棺内には確実な古墳時代の遺物が認められなかったが、石棺内の土を持ち帰って水洗いした結果、錫合金製小玉 5 点と鉄片が検出された。そのため正確な出土位置は特定できないが、小玉はいずれも棺東端から 50-100cm の位置の南半部（石棺内 II S 区）の底面直上土（8 層）から検出されたものであり、中世の遺物とは石棺内の出土層位におい

て区別できる。また、鉄片は同じ II S 区堆積土の上部から検出され、出土位置からは中世の遺物である可能性も捨てきれないが、いずれも小片であることから、中世に持ち出された副葬品の一部と考えている。

また、中世土坑を精査中、土坑南部の底にめり込むような状態で刀子破片とみられる鉄製品が出土した。これは中世遺構にともなう鉄製品とは形態や出土状況において明らかに異なることから、本来は古墳副葬品であったものが、中世に持ち出される際に取りこぼれたものの可能性が高い。

#### (2) 中世遺構

後円部中央で検出された土坑内の集石直下から、鉄製品 4 点と青銅製独鈷杵 1 点が出土した。鉄製品は取り上げ順に NO.1～NO.4 とし、当初はいずれも小刀と理解していたが、NO.1 は整理作業の過程で剣と判明した。NO.1 は土坑南西部の外された蓋石上に鋒を東に向け、NO.2 は開口部を閉じるために土坑中央に置き直された板石上で鋒を東に向け、小刀 NO.3 は土坑北壁に張り付くような状態で鋒を下方に向け、小刀 NO.4 は土坑北端の川原石上から鋒を東に向け、それぞれ出土した。独鈷杵は NO.1 近くの置き直された板石上から両鈷先をほぼ東西に向けて出土しており、直下に木質状の繊維が付着することから、何らかの容器に入れられていたか、あるいは布に包まれた状態で木箱の中に置かれたと理解される。このことと小刀 NO.3 の不自然な出土状況をもとにすれば、鉄製品も木箱などの容器に入れられた状態で置かれた可能性が考えられる。

石棺内からは四耳壺 1 点、壺把手破片 1 点、石製蓋 1 点が出土した（図 53）。四耳壺と把手は、いずれも石棺内堆積土 6 層直上からの出土で、前者は中世に蓋石が外された部分の西端付近、東小口内面から西に約 55cm の位置で南側石にもたれかかるように傾いた状態で、後者は石棺ほぼ中央の南側石のすぐ北

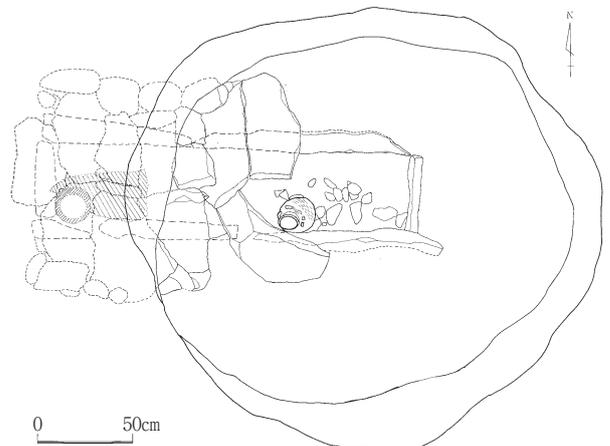


図 53 石棺内遺物分布状況



図54 壺把手・川原石出土状況

側から(図54)、それぞれ出土した。四耳壺に蓋はなく、有機質製の蓋の存在を示す炭化物等の付着も観察できなかった。

なお、6層は石棺のほぼ全面に水平に堆積しており、その上には拳大の川原石が不規則に出土しており、棺被覆の際に隙間に詰めた石が地震などの振動で落下したものと考えられる(図55)。

石製蓋は、西小口石から東に約20cmの位置に中心を置き、6層に置かれた板石の直上から南にやや傾いた状態で内面を上に向けて出土した。四耳壺がほぼ原位置を保っていることは確実だが、把手は石室



図55 棺内6層上面遺物出土状況

天井部から落下した石により破損したものが飛び散った可能性が高いと考えている。

蓋は、その出土状態から石棺の開口部分から板石とともに奥側に押し込められたと考えられる。

### (3) 墳丘上

墳丘上に設定した各トレンチで土器が出土しているが、確実に古墳にともなうとみてよいものは認められなかった。

くびれ部トレンチおよび前方部南隅トレンチでは、ほぼ原位置を保った状態で平安時代の土器が出土している。くびれ部トレンチでは、トレンチ北西部の墳丘面より約15cm上の2層から土師器杯2个体分が出土した。前方部南隅トレンチでは、トレンチ東部の墳丘崩落箇所に対応する位置の4層から土師器小型甕2点と須恵器杯片2个体分が出土し、この部分の墳丘の崩れが古代の改変によるものであることが明らかになった。おそらく円形の土坑になるものと考えられる。

その他にも後円部墳頂・前方部北・前方部南の各トレンチから若干の須恵器片と土師器片が出土しているがいずれも小片で、原位置を保つものはない。

以上の土器は、古墳築造以後、墳丘が何らかの目的で利用されていたことを示しており、平安時代にこの墳丘上で何らかの活動が行われていたことがわかる。

また、1点のみであるが後円部北トレンチの墳丘断ち割り部の盛土内から弥生土器とみられる土器片が出土し、古墳が弥生時代の遺跡を壊して築造されたことをうかがわせる。

## 2 埋葬施設にともなう遺物

### (1) 玉類

ほぼ同形同大の小玉で、5点のうち2点は破片である(図56)。当初ガラス製と考えられたが、蛍光X線分析の結果、錫を主成分とする合金製と判明した(本章5節参照)。錫は腐食しやすい金属であるためいずれもかなり変形しているが、本来の大きさは外径4.5mm、内径1.5mm、高さ2mm程度と推測される。

錫製小玉は現段階では古墳時代の遺物としてはき

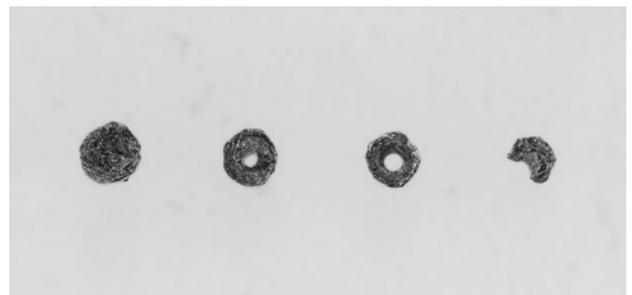


図56 錫小玉

わめて限られた出土例しかなく、確実な例は皆無に近いといってよい。

一方、ごく少数ではあるが後・終末期古墳の副葬遺物として錫を用いた耳環や釧の存在が知られていることから、分析がおこなわれていない遺物の中に錫製品が少なからず含まれる可能性があることが指摘されている（永嶋1986、成瀬1989、小嶋1996、村上1997）。

現在報告されている錫製遺物はいずれも6世紀以降に位置付けられ、その点から本例が中世遺構にもなう可能性も否定できないが、本例は出土位置において中世の遺物と区別できることに加え、その形態と大きさが古墳出土の小玉とほぼ一致し、さらに9世紀以降には錫製遺物の存在が知られなくなることから、中世の遺物と断定できない。

また、錫が青銅の原材料である以上、錫製品の出現が5世紀以前にさかのぼることは十分考えられる。

以上をふまえ、ここでは本例を長井前ノ山古墳の副葬品、すなわち古墳時代中期の遺物と判断したうえで、その当否を今後の研究と資料の蓄積に委ねることとしたい。

## (2)鉄製品

### ①鉄片（図57）

石棺内ⅡS区の堆積土2層から5点検出した。いずれも長さ1cm未満の小片であり、器種等はまったく不明であるが、木質が付着することから何らかの製品の一部であったことは確実である。

### ②刀子（図57）

石棺外から出土した。鋒と茎の先端を欠いており、現存長5.5cm、茎現存長2.6cm、身幅2.1cm、身の厚さ0.6cmをはかる。茎に目釘孔はなく、把材とみられる木質が付着している。その形態と出土状況から古墳副葬品の一部とみて矛盾ない。

## 3 中世遺構に伴う遺物

### (1)中世陶器

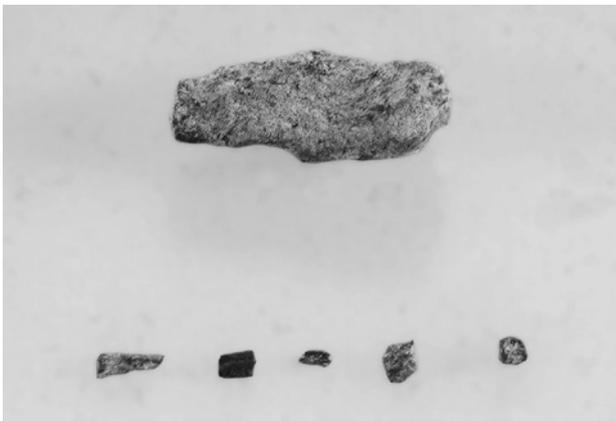


図57 刀子と鉄片

### ①四耳壺（図58）

須恵器系中世陶器の四耳壺で、把手の一つを欠いて出土したが、棺内出土の把手が接合したため、完形で埋納されたものであることがわかった。器高24.2cm、口径11.4cm、胴径は最大で19.2cm、底径は8.7cmで、容積は約3000ccである。最大径が器高の中心より2cmほど上にあり、肩の張りが弱い倒卵形のプロポーションである。肩部に櫛目波状文が1と1/3周にわたり施されており、吉岡康暢氏の珠洲陶器の分類によるところの壺R種AⅡ類（小壺・紐轆轆2段成形・櫛目波状文・把手付き）に属する（吉岡1994）。

口頸部と胴部の接合部分が把手のやや上に確認できる。胴部は整形の轆轆目がはっきり残り、未調整な観がある。轆轆目は内壁にも明瞭に残る。底部は約1.8cmの厚みがあり、そこから胴部にかけて厚みを減じてゆく傾向が見られる。肩部付近の厚みは6mmほどである。頸部はやや内傾気味に立ち上がり、そこから口縁部にかけて緩やかに外に開いている。口縁は轆轆による挽き出しが小さく、稜が作り出されているがシャープさに欠ける。把手は帯状の粘土を指で押さえて貼り付けたもので、浅くU字状に窪んでいる。丁寧な調整は行われていない。櫛目文は凹部分の溝が6本数えられ、凹部は約1mm、凸部が約2mmの幅となっている。波状文は不規則で、施文の範囲は肩部に収まっている。底部は静止糸切りで、切り離した後、乾燥のために板の上に置かれたため、板目状の圧痕が付いたものと思われる。焼成は良好で、暗灰色を呈している。口縁部に若干、自然釉が

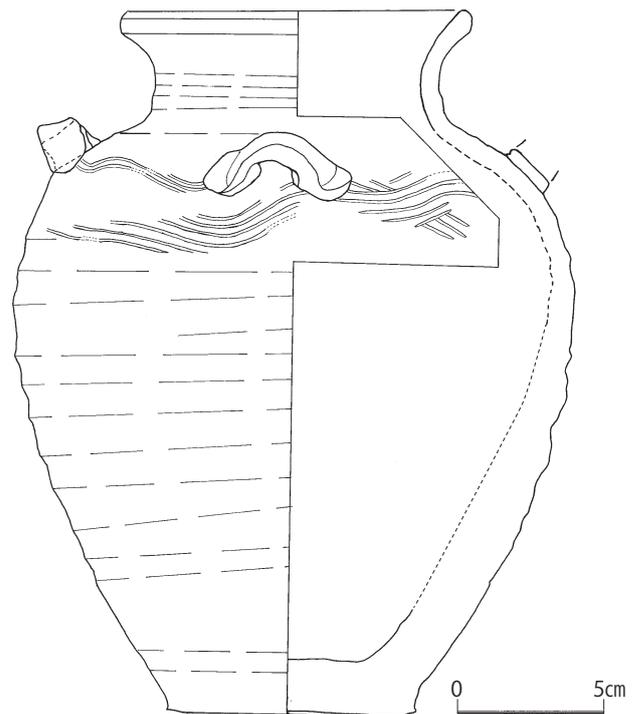


図58 四耳壺

かかっているほか、全体に斑状に黒い融解物質が浮き出ている。胎土には砂粒が多量に残り、ザラザラした感じが強い。そのことが全体にシャープさに欠ける一因となっている。また、長さ1～2cmの小礫が数個確認できるほか、1～2mmの白色の小石（長石粒）が多く含まれる。

輸入された中国（宋）産の白磁四耳壺を補完するために、それを模倣したものが瀬戸窯・美濃窯などで生産されたが、このタイプの四耳壺は蔵骨器として利用されたり、経塚に埋納されたりした出土例が多い。珠洲窯では、ほぼ珠洲陶器編年のⅠ・Ⅱ期（12世紀中頃から13世紀初頭）でしか生産されておらず、当該四耳壺の製作年代については、撫で肩のプローションや櫛目文の特徴などから、珠洲陶器編年のⅠ期に収まるものなかでも後半の12世紀の第4四半期に比定される<sup>(1)</sup>。

また、産地については、胎土、口縁部や把手の作りなどからすると珠洲窯のものとするには違和感が強く、珠洲窯と同系の技術による窯（珠洲系）のものとするのが妥当と思われる。珠洲系の須恵器系中世陶器の生産地は、北陸以北の日本海側、新潟・山形・秋田・福島各県でいくつか知られており、それぞれ珠洲窯の製品の流通を補完する地域窯として機能していたと考えられている。

新潟県北蒲原郡豊浦町・笹神村・安田町にかけて広がる五頭山麓窯は、古代から中世にかけての大窯業地帯で、須恵器系中世陶器の窯としては北沢窯・背中炙窯の存在が知られている。今のところ五頭山麓窯では珠洲Ⅰ期に遡る須恵器系窯は明確になっていないが、周辺の消費資料からも12世紀代に遡る未発見の窯の存在が予想されている（川上1992）。

長井前ノ山古墳出土の四耳壺は、胎土に砂粒を多く含む点で五頭山麓一帯で焼かれた須恵器・中世陶器のそれに似ており<sup>(2)</sup>、有力な候補地と考えられる。五頭山麓窯のある北蒲原郡は、新潟平野に流れ出た阿賀野川のすぐ北側に位置しており、平安時代末期にはこの地方で勢力を強めた城氏が会津地方にも力を伸ばしたと考えられるなど、会津地方との関わり合いが深い地域であったことが知られている。ほぼ同時期の喜多方市松野千光寺経塚群から出土した珠洲系中世陶器の多くが、五頭山麓窯で製作されたのではないかとする見解もあり（石田2000）、会津坂下町を中心とする会津盆地西部で多く出土しているこの時期の須恵器系中世陶器には、五頭山麓窯で焼かれたものがかなり含まれていると考えてよいのではなかろうか。

珠洲系陶器の生産地としては、会津若松市の大戸古窯跡群でも2基の須恵器系中世陶器の窯跡が確認



図59 剣と刀子

されている（KA64、KA65）。いずれも12世紀に遡るものであるが、窯跡から四耳壺は見つかっていない（石田1993）。ここでも未発見の窯がある可能性もあり、長井前ノ山古墳出土の四耳壺の産地として完全に除外することはできない。

会津地方では、同じような須恵器系中世陶器の四耳壺が、松野千光寺経塚群から2点、大塚山経塚（会津若松市）から1点（伊東・伊藤1964）、呉坪山経塚（新鶴村）から1点（山口1959）出土している。さらに、会津坂下町の陣ヶ峯城跡、薬王寺遺跡、中丸遺跡など、経塚以外の遺跡からも出土している（古川1989）。

註1：吉岡康暢氏に御教示を頂いた。

註2：川上貞夫氏に御教示を頂いた。

## ②中世陶器破片

石棺内の四耳壺からやや離れた位置から壺の把手と思われる須恵器系中世陶器の破片が1点出土した。

上記の四耳壺に接合し、割れ方に不自然さは無いことや、周囲に天井から落下したと思われる川原石が散乱していることから、地震などの振動により石が落下した際に破損した可能性が高い。

## (2)鉄製品（図59・60）

中世遺構に伴う鉄製品は4点ある。1点は剣で、他3点は小刀である。

### ①剣（NO1、図60-1）

全長24.0cm。茎長5.9cm。身幅1.7cm。茎部は、茎中央付近から茎尻に向かって細くなる。茎尻は栗尻を呈し、茎のやや尻寄りに目釘穴を一つもつ。目釘の残存は認められず、材質は不明。関は両関直角で、身部の中央茎寄りでなだらかに湾曲している。切先近くと茎の関近くで折れており、切先の片側が欠損している。切先近くの折れは完全には接合しない。

身部には、やや粗いが、筋のよく通った木目をもつ木質が広い範囲で確認できるので、鞘に入れた状態で置かれたと思われる。鞘の樹種については不明

である。また、構造については、木の板を両側から  
はり合わせたものと思われるが、合わせ目がよく確  
認できないため確証はない。把には木質が確認でき  
ないが、細かな凹凸が目立つので、木以外のものを  
把として用いていた可能性が考えられる。切先を東  
に向けて置かれていた。

②小刀 (NO2、図60-2)

全長28.2cm。茎長6.8cm。身幅2.55cm。刀身部の中  
央切っ先寄りで折れており、刃部の中央茎寄りに欠  
損が見られる。刀身は平造りで、切先に向かって幅  
がやや細くなる直刀である。切先は弱いふくらを呈  
する。茎部は茎尻に向かって細くなり、茎尻は栗尻  
である。茎のほぼ中央に目釘穴を一つもつ。目釘の  
残存は認められず、材質は不明。関は両関直角で、  
棟は丸棟である。

刀身に木質は確認できない。抜き身で置かれた可  
能性が強いが、木以外のものを鞘として使用してい  
たことも考えられる。茎には木質がわずかに確認で  
きた。おそらく把の木質であろうと思われるが、樹  
種、構造を確認できるほどではない。刃部を外側に、  
切先は東に向けて置かれていた

③小刀 (NO3、図60-3)

全長31.6cm。茎長9.9cm。身幅2.8cm。茎中央付近と  
刀身部切先近くで折れており、刀身部の折れている  
部分から切先にかけての刃部に欠損が見られる。切  
先近くの折れは完全には接合しない。刀身は平造り  
で、切先に向かって幅がやや細くなる直刀である。  
茎部は茎尻に向かって次第に細くなり、茎尻は栗尻  
である。茎のほぼ中央に目釘穴を一つもつ。目釘の  
残存は認められず、材質は不明。関は両関直角で、  
棟は角棟である。

刀身部には、木目の粗い木質が確認できるので、  
鞘に入れて置かれたと思われる。また、鞘の木質は  
茎中央部付近まで達しており、把を呑み込む形態の  
鞘であった可能性が強い。把の木質は鞘よりは木目  
が細かい。鞘、把の樹種は不明。鞘、把とも2枚の  
板を張り合わせた構造だと思われるが、合わせ目が  
不明のため確証はない。関付近では樹皮状のものが  
鞘に巻かれている。刃を外側に、切先は北に向けて  
置かれていた。

④小刀 (NO4、図60-4)

全長30.6cm。茎長9.7cm。身幅2.75cm。切先近くと  
茎中央付近で折れている。刀身は平造りで、切先ま  
で幅は変わらない直刀である。切先は中ふくらを呈  
する。茎は茎尻に向かって細くなり、茎尻は栗尻で  
ある。茎の中央やや身寄りに目釘穴を一つもつ。目  
釘の残存は確認できず、材質は不明。刀身の棟は角  
棟であるが、茎の外縁は丸みを帯びている。

刀身部、茎ともに木質が確認できる。鞘は粗い木  
目の木質である。把の木質は鞘に比べ木目がはっき  
りせず、鞘の木質とは異なると思われる。鞘、把と  
も木の板を両側から貼り合わせたと思われるが、合  
わせ目が不明のため確証はない。図示しなかったが、  
佩面では、把の木質が関を越え刀身に達しているの  
で、この部分まで把になっていたと思われる。刃を  
外側に、切先は東に向けて置かれていた。

⑤小結

この中世遺構からは、後述するように独鉈杵が出  
土していることから、経塚など仏教に関係した遺構  
であることが考えられる。また、小刀と独鉈杵は四  
耳壺を納めた石棺の蓋石の上、あるいはその周囲か  
ら出土し、この四耳壺の周りにNO1は切先を東に向  
けて、NO2~NO4は刃を外側に向けた状態で配置さ  
れていた。このことはこれらの剣、小刀は四耳壺を  
守るという魔除けの意味で配置されたと思われる。

また、経塚から出土する利器には、人為的に刃を  
欠く、折る、曲げるなどのことをした例がある (末  
永1975、三宅1977)。これらの理由としては、納経  
という信仰行事のために、殺傷のための兵器の機能

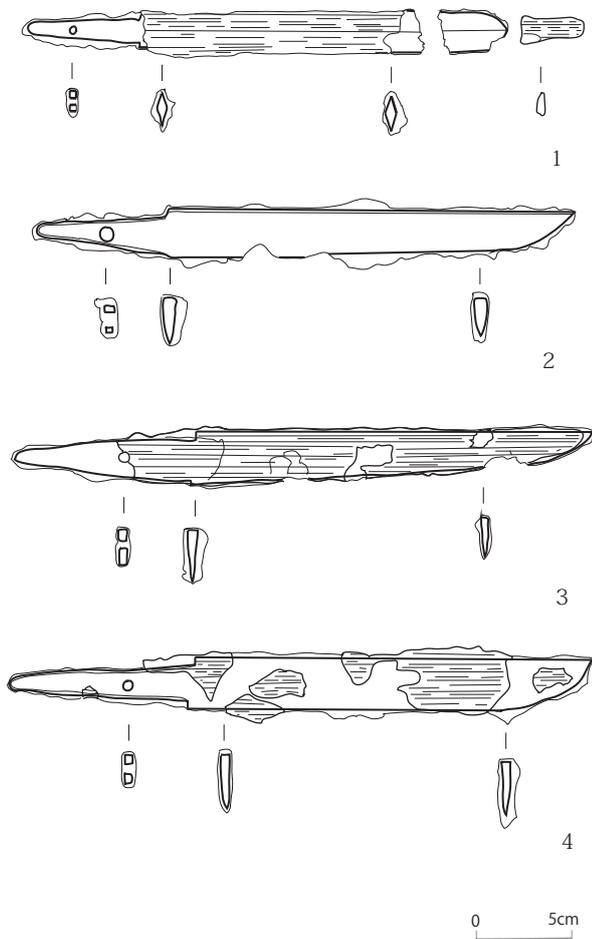


図60 剣と刀子

を破壊したものではないかという指摘（末永1975 17～18頁）や、埋納しやすい大きさにしたという見方もある（三宅1977 127頁）。

本遺構出土鉄製品についても、NO1の剣は湾曲しており、その他の小刀にも欠損や折れが認められた。これらは、埋納にあたって人為的にそうしたのか、または埋まっている間にそうなったのかは定かではないが、当時の埋納方法を知る上で重要な事例である。

### (3)銅製品

銅製品では、独鈷杵が検出された（図61・62）。独鈷杵は密教の祈祷に使用された法具で、把の両端に各々一つの鈷をつけた金剛杵である。把の中央に、鬼目という球状突起が普通4個あり、その両側に2条または3条の紐でしめてくびれをつくった6～8葉の蓮弁を飾る。

平安時代に遡る古い独鈷杵は鈷に匙面をとり、鈷部と把部の長さの比例で鈷の方が長い、鎌倉時代以降は鈷に匙面がなく、把と鈷の長さの比例で鈷の方が短くなるという傾向がある（石田1977、岡崎1976）。また、鬼目が小さく、蓮弁が二重・三重になっているもの、鈍い鈷先のものは時代が下る（蔵田1965）。

本遺構出土独鈷杵は、総長15.3cm、把長5.1cm、幅は鬼目部で1.4cm、鈷部で1.0cmである。全体に細身のつくりで、把部中央には楕円形の鬼目を4つ置き、間弁のある単弁六葉の蓮弁帯を2条の紐で締めている。蓮弁は線刻により縁どりがなされ、その両端には刻み目が施されている。鈷部は断面四角形で、先端に向かって細くなっていく。匙面にはなっておらず、先端はやや鈍角気味である。また、把部に比べ鈷部が短く、二つの鈷部の長さは等しくない。原料の銅は中国産である（本章5節参照）。

長井前ノ山古墳の周辺で独鈷杵が出土した例としては、喜多方市の松野千光寺経塚群出土の1号独鈷杵（以下1号独鈷杵）、同2号独鈷杵（以下2号独鈷杵）がある。これらの独鈷杵の年代位置については、1号独鈷杵は1130年代を前後する年代が想定され、2号独鈷杵はそれよりも新しいと考えられている（青山1999）。

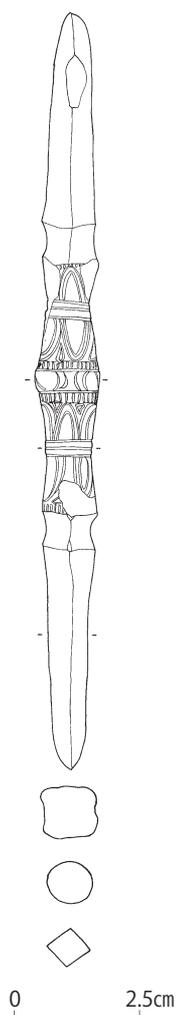


図61 独鈷杵(1) 本遺構出土独鈷杵は、2号独鈷杵



図62 独鈷杵(2)

に形、文様がよく似ている。しかし、2号独鈷杵は把部よりも鈷部が長く、鈷の面は匙面になっているが、本遺構出土独鈷杵は鈷部が把部よりも短く、鈷の面は匙面ではない。また本遺構出土独鈷杵は2号独鈷杵に比べ、鬼目部の幅が小さく、蓮弁中央のくびれが弱い。2号独鈷杵には蓮弁の両端の刻み目がないという違いがあるものの、文様の表現は全体的に2号独鈷杵の方が立体的である。

このようなことから、両者を比べた場合、本遺構出土独鈷杵より2号独鈷杵の方が古い特徴を持つということが言えそうである。2号独鈷杵は、1号独鈷杵よりは新しいと考えられているので、本遺構出土独鈷杵の年代は、12世紀前半以降の年代に位置付けられることになる。

また、鈷先が、鈍重、鯨の頭のようなものは、室町時代以降のものに多く見られる傾向がある（石田1977）。本遺構出土独鈷杵の鈷先は、やや鈍角気味ではあるものの2号独鈷杵に酷似しており、室町時代にまで年代が下がるほどの鈷先の特徴ではないと思われる。伴出した四耳壺が12世紀末のものとしてされていることから、独鈷杵についてもそれに近い年代を想定してよいものと考えられる。

### (4)石製品

#### ①石製容器蓋（図63）

外径約18.5cmの円形で、蓋としてはほぼ完形である。身と接する部分の厚みは約1.5～2.0cmで、そこから内側に厚さを増しながら2cm強ほど彫り窪められて天井となっている。

天井は深さ・幅1mmほどの不正円形の溝で区画されており、その径は約12cmをはかる。天井部外面は緩やかな丸みを帯びており、高さは中央部で約6.0cm、端部で約4.5cmである。天井部外面と口縁部（側壁）との境には面取りが施されている。掘り窪められた天井部内面にはノミ状の工具痕が見られる。天井部外面は平滑に仕上げられているが、かすかに工具痕が確認できる。ノミ状工具で削った後に磨きによって仕上げたものだろう。

また、口縁部（側壁）の外面・内面にも縦に工具痕が見られる。石材はやわらかい粘土質の堆積岩である。薄黄色を呈し、見た目より軽い。触ると粉っぽく、多孔質で吸水性が高い。これはいわゆる珪藻土の特徴を示している。会津地方では珪藻土の産出

は確認されておらず、搬入品である可能性が高い。珪藻土の産地としては能登地方などが知られるが、珠洲系中世陶器の出土とともに、北陸方面からの文化の流入を示唆する資料と言えるかもしれない。

この蓋の形状からすると、かなりの大きさの身が対応していたと考えられるが、発掘ではまったく確認されなかった。中世における会津の石製容器としては、喜多方市慶徳町の新宮中世墓から出土した石製容器があげられる。これは蔵骨器として使用されていたもので、身の胴部に年号「建武二年」を含む銘が刻まれている。石材は凝灰岩である。(喜多方市1995)

会津坂下町駒壇経塚からは緑色凝灰岩製の石製外

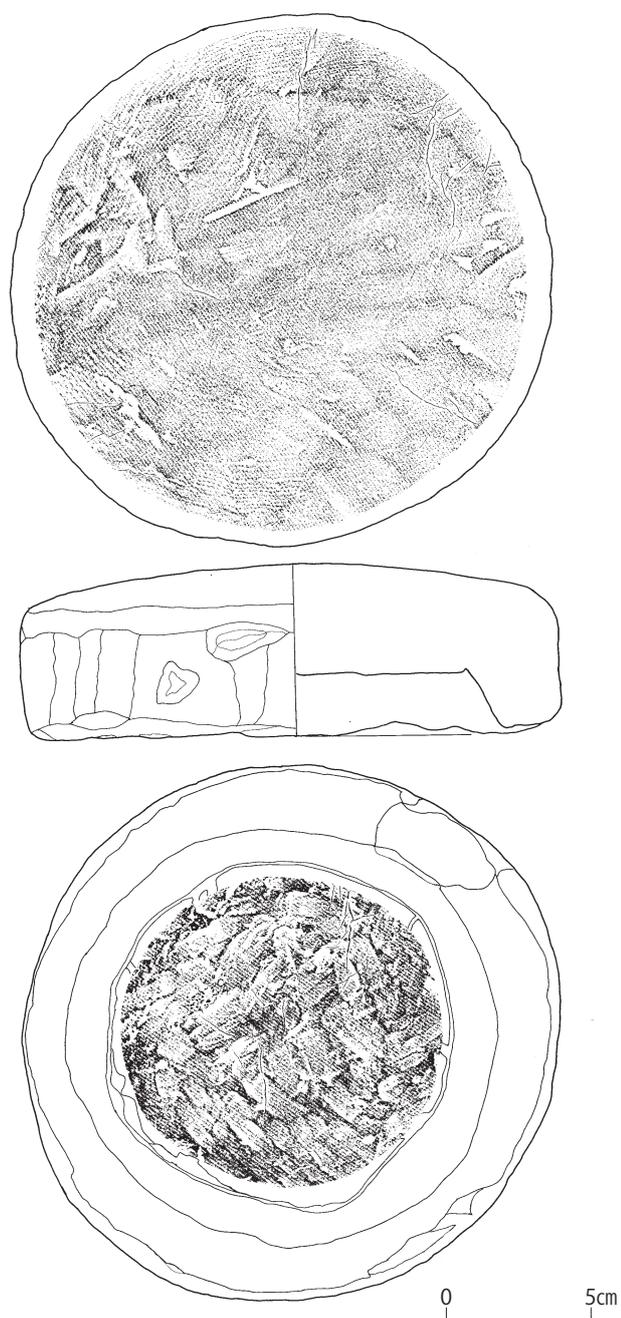


図63 石製蓋

容器は発見されているが、蓋と身を精巧に作ったものではなく、漆塗り木製経筒の外容器として自然石を大きく整形して削り貫いて作られているものである。

これ以外には、会津地方での類例は確認できない。

#### 4 墳丘出土の遺物 (図64・65)

墳丘周辺からは土師器と須恵器が出土しているが、今回の調査がトレンチ調査であるため、墳丘全域における土器の分布状況は不明である。トレンチ内の出土状況を見ると、同一個体の破片がある程度まとまって出土していることから、墳丘上で土器を使った祭祀などが行われた可能性が考えられる。

出土した土器の中には古墳時代のものは含まれておらず、いずれも平安時代の9世紀中ごろ前後のものである。

土師器はロクロ整形の杯と中・小型甕が出土している。須恵器は南原19号窯式 (MH19) に相当する杯と蓋とみられ、土師器・須恵器ともに9世紀中ごろ前後のものと考えられる。

土師器中・小型甕は、前方部南西隅の前端部分からまとまって出土している。調査時は攪乱孔と認識した場所から一括出土しているが、おそらく平安時代の土坑に一括廃棄されたものと考えられる。

その他の杯や蓋は、くびれ部と後円部墳頂のトレンチから出土している。少なくともくびれ部からは、土師器杯4個体、須恵器杯と蓋がそれぞれ1個体、後円部墳頂からも土師器杯と須恵器蓋がそれぞれ1個体出土している。これらの土器は、同一個体の破片が比較的まとまって分布していることから、墳丘上でこれらの供膳具を使った祭祀が行われた可能性が考えられる。

##### ①須恵器蓋 (図64-1)

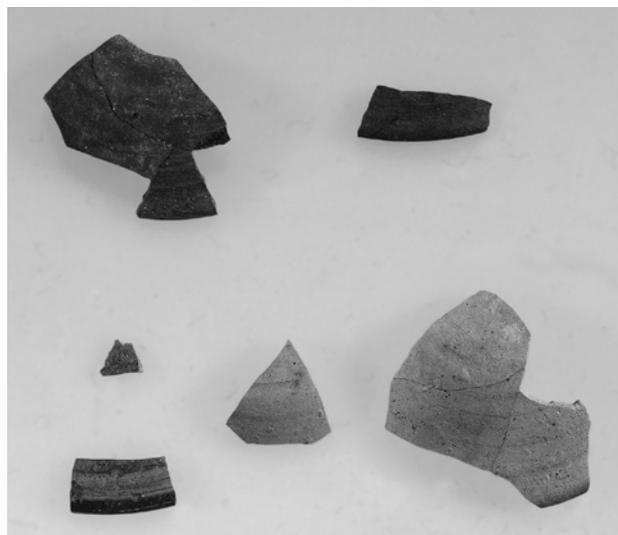


図64 墳丘出土土器(1)

ある程度全体の器形がわかるものは後円部墳頂から出土したもので、内面の返りが痕跡的に肥厚して表現されている口径14cm、底径6cm、器高3.4cmの蓋である。製作時に回転ヘラ切り技法で切り離され、回転ヘラ削り再調整が施されている。

②須恵器杯 (図64-2)

ある程度全体の器形がわかるものはくびれ部から出土したもので、口径14cm、器高2.5cmの杯である。製作時に回転ヘラ切り技法で切り離され、回転ヘラ削り再調整が施されている。

③土師器杯

後円部墳頂部とくびれ部から出土しているが、全体の1/4以上の遺存率のものがないため、図化して

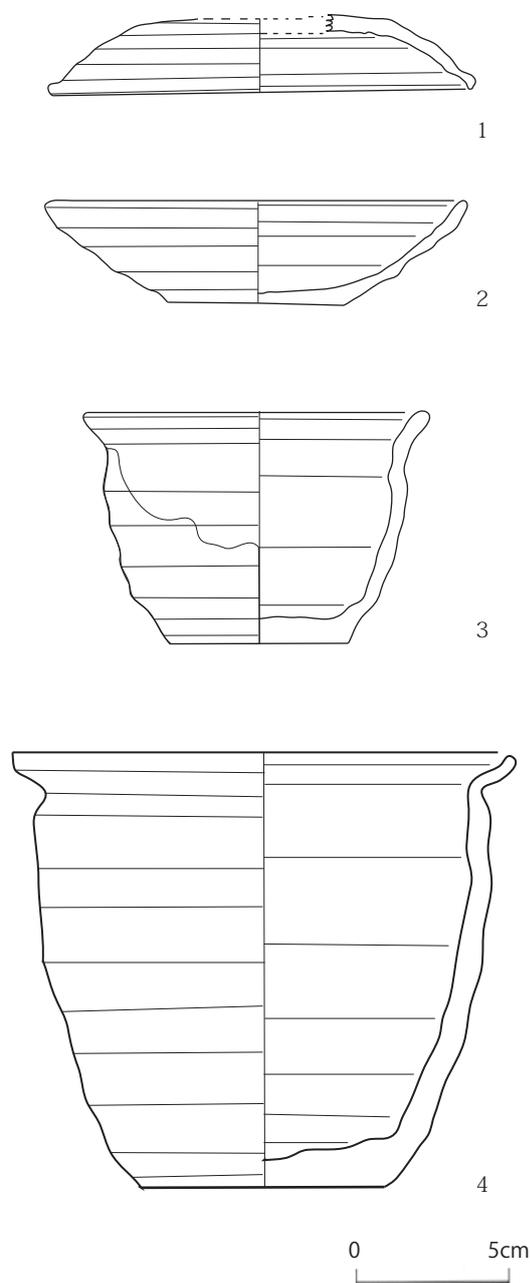


図65 墳丘出土土器(2)

いない。出土資料は、いずれも内面黒色処理が施されたロクロ土師器で回転糸切技法による切り離し、回転ヘラ削りによる再調整が施されたものである。口径/底径比がほぼ0.5前後と考えられることから9世紀中ごろ前後のものと考えられる。

また、くびれ部から出土した土師器杯の1点は、底部だけを円盤状に残して打ち欠き、割れ口を磨いて円盤状にしたものが含まれており、祭祀行為に使われたものと考えられる。

④土師器甕 (図64-3、4)

前方部南西隅の前端部の土坑の中に一括廃棄されたと考えられるロクロ土師器の中・小型甕である。回転糸切技法によって切り離され、回転ヘラ削り技法で再調整が行われている。どちらの甕も胴部表面に被熱による赤変部分が見られ、小形甕には外面約半分に煤が集中して付着している。煤の付着状況から、小形甕は炎に器の半分が接するような形で熱を受けていたことがわかる。

5 出土遺物の理化学的分析

(1)蛍光X線分析

発掘調査直後、当時の(財)福島県文化振興事業団遺跡調査部 奥山誠義氏に小玉3点(NO,1、NO,3、NO,5)について蛍光X線分析を依頼した。分析結果については以下のとおりである。

分析にはX線分析顕微鏡(堀場製作所製XGT-2700)を使用し、以下の条件で測定を行った。

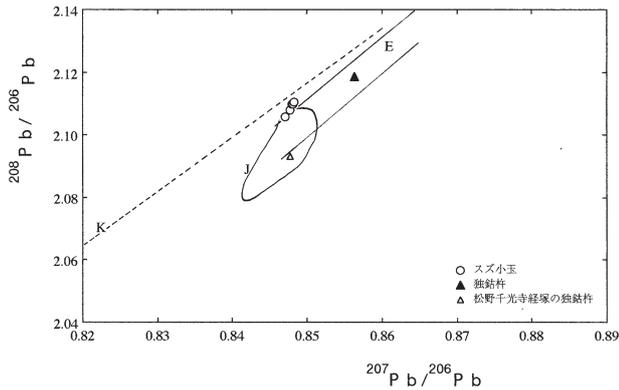
X線管球の対陰極はRh(ロジウム)、検出器は半導体検出器を使用し、測定は大気雰囲気で行った。管電圧は50kV、管電流は1mAである。分析範囲は $\phi 100\mu\text{m}$ とし、分析には300秒を要した。本分析は資料に対して一切の破壊を伴わない完全非破壊による表面分析である。

分析の結果、NO,1は、Si(ケイ素)が主成分であった。その他にAl(アルミニウム)、K(カリウム)、Fe(鉄)を少量含み、Ti(チタン)とMn(マンガン)を微量含んでいた。Si、Al、K、Feは土壌中にも多く含まれる元素であるため、ガラス玉であるか否か、いかなる素材で作られたものであるかは本分析のみでは明確な判断ができない。

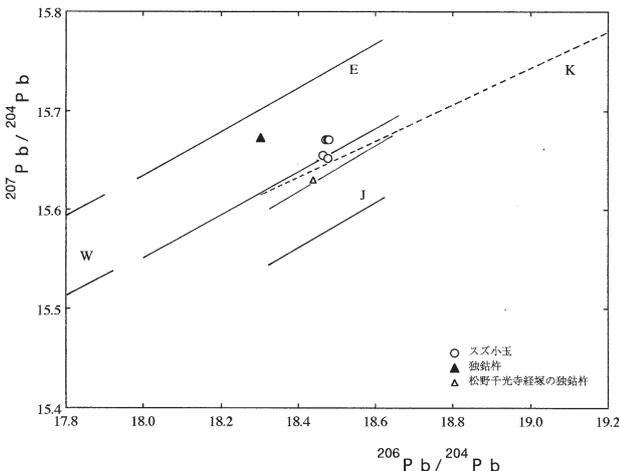
NO,3、NO,5については、Sn(錫)が主成分であった。その他にPb(鉛)、Fe(鉄)、Al(アルミニウム)を少量含んでいた。

本分析より本資料は、Sn(錫)製である可能性が高い。少量含まれるPb(鉛)の存在については、合金を成している元素である可能性もあるが、鉱石に含まれていた元素である可能性もある。

(2)出土した錫小玉と独鈷杵の鉛同位体比分析結果



長井前ノ山古墳出土資料および比較資料の鉛同位体比測定結果(A式図)



長井前ノ山古墳出土資料および比較資料の鉛同位体比測定結果(B式図)

図66 鉛同位体比測定結果

①資料および分析方法

長井前ノ山古墳出土の錫合金製小玉 5 点（5 世紀）と、経塚状遺構から出土した青銅製独鈷杵 1 点（13 世紀前半）の鉛同位体比を測定した。独鈷杵については、喜多方市教育委員会が調査を行った松野千光寺経塚出土独鈷杵（12 世紀）の結果（報告済み）

と比較を行った。資料表面より微量試料粉末を採取し、「高周波加熱分離法」で鉛を単離し、表面電離型質量分析装置（Finnigan MAT 262）を用いて、フィラメント温度 1200℃ で鉛同位体比を測定した（齋藤ほか 2002）。

②分析結果

鉛同位体比測定結果を表 1 に示した。今回の測定結果を、馬淵・平尾（1982、1987）が示した古代日本の青銅器に関する鉛同位体比のグループ範囲とともに表示を行った（図 66）。錫合金製小玉の分析値は、中国の華中～華南の領域に位置している。

混ぜ物をしない錫単一の素材の場合は、その中に含まれている不純物としての鉛に対して分析を行うことになり、その結果を、鉛鉱床の鉛同位体比に対して作製した図の中で、同列に扱ってよいものかどうかはまだよく分かっていない。しかし、No.3 と No.5 の元素分析の結果によれば、鉛が数%程度含まれていたとのことであった。他の資料についても、採取した試料粉末のごく一部について、エネルギー分散型特性 X 線検出器付走査型電子顕微鏡でラフな元素分析を行ったところ、ほぼ同濃度の鉛が検出された。

従って、この資料は、錫に鉛を混合した素材を使用していると考えられるので、資料の年代からみても、鉛の産地を図 66 に表示したグループにあてはめて判断して差し支えないであろう。原料は中国の華中～華南地域のもものと推定される。

長井前ノ山古墳の独鈷杵については、図 66 の E の領域に入り、中国の華中～華南産の原料が使用されていると考えられる。この独鈷杵の測定値も上述の錫小玉の測定値も、領域としては E の範囲内にプロットされているが、両者の数値は明らかに異なっており、原料産地について特に関連性を考える必要はない。

なお、比較資料である松野千光寺経塚の独鈷杵は

表 1 長井前ノ山古墳出土資料および比較資料の鉛同位体比測定結果表

資料名	分析番号	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$
スズ小No. 1	B5301	0.848	2.111	18.473	15.671	38.986
スズ小No. 2	B5302	0.848	2.108	18.465	15.655	38.919
スズ小No. 3	B5303	0.847	2.106	18.477	15.652	38.908
スズ小No. 4	B5304	0.848	2.110	18.477	15.671	38.984
スズ小No. 5	B5305	0.8480	2.110	18.480	15.671	38.987
独鈷杵	B5306	0.856	2.119	18.304	15.673	38.777
(比較資料) 松野千光寺経塚出土独鈷杵	B4203	0.848	2.093	18.438	15.630	38.592

日本産の鉛が使用されていたと考えられ、本資料とは原料産地が異なっていることになる。

### (3)四耳壺内堆積物自然科学分析結果

経塚に使用されていたと考えられる中世陶器（四耳壺）の内容物について、株式会社古環境研究所に委託して自然科学的分析を実施した。分析結果の概略について下記に示す。

#### ①花粉分析及び寄生虫卵分析

四耳壺内部から採取された土壌の花粉分析を行った結果、経塚が造営されたところの周辺環境はアカマツの二次林を主体としたコナラ、スギ、ハンノキなどが生育する森林植生が分布し、イネ科やヨモギ属などの草本が育つ、比較的開かれたところも見られるような場所であったことがわかった。

また、寄生虫卵や明らかな食料残渣を検出することはできなかったため、経塚と考えている遺構が墓として利用されていた可能性は低いと考えられる。

#### ②珪藻分析

四耳壺内部から採取された土壌中の珪藻化石組成を分析した結果、陸生珪藻が少量検出されただけであった。このことから、四耳壺が埋納された段階では内部に水などの液体が入った状態ではなく、乾燥した状態であったと考えられる。

#### ③植物珪酸体分析

四耳壺内部から採取された土壌中のイネ科植物に起因するプラント・オパール含有状況を分析した結果、クマザサ属などのササ類を主体としてススキ属なども見られ、一部ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られよう環境であったことがわかった。

#### ④蛍光X線分析

四耳壺内部から採取された土壌を観察すると、底部付近に硬くしまった灰白色土が集中して堆積していた。内部の堆積土の違いを検討するために、壺内の堆積土を上層から5ヵ所採取して、各土壌に含まれる元素の定量分析を実施した。分析の結果、各層中に含まれる元素量に大きな違いがなく、底部付近に堆積している灰白色土が特別な物質であった可能性は低いことがわかった。

#### ⑤元素分析

四耳壺内部から採取された土壌について元素分析を行った結果、紙などの有機物に由来する硫黄や窒素などの成分は検出されなかった。四耳壺の中に紙本経などがあったことを積極的に証明するデータを得ることはできなかった。

以上の分析結果から、四耳壺内には液体や遺体の一部が納められた可能性は低く、乾燥した状態で埋納されたこと、さらに内部に入っていた土は特別な

ものではなく、周囲の丘陵部分の環境に分布する土壌であることがわかった。

## 第7章 総括

今回の発掘調査は、会津盆地西半部において特異な立地を示す長井前ノ山古墳の考古学的調査成果をもとに会津地方における古墳時代の様相を解明することを目的としたが、古墳時代に限らず他の時代に関しても非常に多くの成果を得ることができた。

長井前ノ山古墳が築造されたこの丘陵突端部の地域は前方後円墳が築造された古墳時代だけでなく、その後も宗教的意味を持った場所として意識され利用されていたことも調査の成果から明らかになった。

以下、今回の調査成果についてまとめていくが、この遺跡は出土遺物と遺構から大きく3期の変遷があることがわかったため、それぞれの時期別に調査成果を見ていく。

### (1)1期：古墳時代（5世紀）

この場所の本格的利用が始まった時期であり、合掌形石棺という東北では特異な埋葬施設を持つ前方後円墳が築造される段階である。

古墳に関する調査成果については、調査担当者の菊地芳朗氏が過去に速報として発表されているが、今回は過去の報告をもとに本報告作成の過程で新たに判明した情報を加味しながらまとめていく。

#### ア) 古墳の基本属性

【墳形】 前方後円墳（前方部前端線がやや斜め）

【葺石】 なし 【埴輪】 なし

【時期】 5世紀後半？

【墳丘構築法】 地山削り出し後に盛土整形

【段築状況】 後円部2段、前方部1段

（後円部に幅約1mのテラスが巡る）

【墳丘主軸】 N87°W（ほぼ東西方向の主軸）

【墳丘規模】

墳長（主軸長）：36m、

後円部：基底部直径24.5m、墳頂部直径10m

くびれ部：幅10m

前方部：主軸線上の長さ13m、前端幅11m

墳丘高：後円部4.2m（1段目1.5m、2段目2.7m）

くびれ部2.3m、前方部2.3m

【埋葬施設】 後円部中央の墓壙内に合掌形石棺

【墓壙形態】 不整長方形

【墓壙規模】 南北2.3m×東西4.1m、深さ約0.5m

【石棺掘り方】 南北1.3m×東西3.3m、深さ約0.7m

【石棺規模】 南北0.5m×東西1.9m、内面の高さ0.5m

【副葬品】 錫製小玉4点、鉄製品破片

後世の攪乱により副葬品の大半は消失

## イ) 古墳の企画性

先に記述した古墳の基本属性のうち、墳丘規模に関して各部の比較を行った結果は以下のとおりである。

- ・後円部基底径：前方部基底長 = 24.5 : 13 ≒ 20 : 10
- ・後円部基底径：後円部墳頂径 = 24.5 : 10 ≒ 20 : 8
- ・後円部基底径：くびれ部幅 = 24.5 : 10 ≒ 20 : 8
- ・後円部基底径：前方部基底幅 = 24.5 : 11 ≒ 20 : 8
- ・後円部墳頂径：前方部基底幅 = 10 : 11 ≒ 8 : 8
- ・後円部墳丘高：前方部墳丘高 = 4.2 : 2.3 ≒ 4 : 2
- ・後円部1段目の高さ：後円部2段目の高さ = 1.5 : 2.7 ≒ 1 : 2

以上のように、各部の規模を比較した結果はきれいな整数値の近似値として表され、この整数値はほぼ1.25mを基本単位とみることができる。

基本単位と考えられる1.25mは晋尺（1尺=約24cm）ではほぼ5尺にあたり、本古墳はきちんとした尺度を基に非常に高い企画性を持った設計思想により築造されていることがわかる。

時間的制約の関係で本古墳と共通の設計に基づいて築造された古墳を探ることができなかったが、おそらく同様の設計のもとに築造された古墳が存在することは予想できる。

今後、同一企画に基づいて築造された古墳が判明すれば、この特異な古墳の系譜について、さらに意味付けを深めることができるであろう。

## ウ) 古墳の築造方法 (図67)

墳丘各部に設定したトレンチの調査成果をもとに本古墳の築造順序や築造方法の特徴をまとめる。

### ①古墳築造予定地の草本類を焼き払う

墳丘積土の直下に炭化物層が確認されていることから、墳丘構築前に周辺の草本類など野焼きして旧表土を整理している。

### ②地山を削り出して古墳の概形をつくる

トレンチの土層堆積状況を見ると、現表土直下ですぐ地山が現れるなど、旧表土を確認できない場所があることから、地山を削り出しておおよその形を造り出していることがわかる。

古墳の西側に存在する高まりは、尾根を削り出して古墳の概形を造り出した際の尾根の掘り残し部分と考えられる。

### ③削り出した地山上に盛土をして墳形を整える

後円部及び前方部に設定したトレンチで現表土直下に盛り土が確認され、盛り土を取り除くと旧表土や地山が現れることから、削り出した地山上に盛土して最終整形を行っていることがわかる。

盛土は後円部から前方部にかけて行われているが、墳丘のほとんどは地山削り出しで造られ、盛

土が行われているのは墳丘上半部のごく一部に過ぎないと考えられる。

また、厚さ約5～10cmの水平に積まれた盛土単位が確認され、版築状に盛土が積まれて墳丘が形成されていたことがわかる。

前方部及び後円部1段目の多くの部分は地山削り出し、後円部2段目を含めた墳丘上部はその上に盛土をして整形されている。

旧地形を最大限に利用して、盛土量を最小限に抑えようとする意図が感じられ、先の墳丘規模の企画性とあわせて極めて高度な築造計画のもとに墳丘造成が行われていたことがわかる。

### ④後円部墳頂から墓壙を掘る

墳丘の盛土整形が完了した段階で、後円部の中央に墳丘主軸方向に平行するように長方形の墓壙を掘削する。

墓壙の東側には、墓壙底面中央部に向かって約30度の傾斜で下る長さ約90cmの舌状の張り出し部を掘削する。張り出し部のスロープを利用して棺材の安山岩板石などを墓壙底面に運ぶ目的と考えられる。

### ⑤石棺を設置するための掘り方を掘る

墓壙底面の東壁スロープに接するように東寄りに石棺構築用の南北1.3m×東西3.3m、深さ約0.7mの掘り方を掘る。

### ⑥石棺の棺身部を構築する

掘り方底面に3枚の底石を敷き、その周囲に側石を立てる。最初に両小口石を立て、南北両側から5枚の側石（北側2枚、南側3枚）を立てかけて、拳大の川原石で押さえ、南・北の側石及び西小口石周辺の部分は掘り方上面より少し下の部分まで、掘り方内を土で埋め戻して板石を固定する。

### ⑦墓道を構築する

底石から外面で20cmしか飛び出していない背の低い石棺南小口石は外側を川原石で固定した後、川原石が隠れる高さから墓壙底面の高さまで斜めにスロープを作るように掘り方内を土で埋め戻して固定する。

この段階で、墳丘面から石棺内に東から遺体を搬入できる墓道が完成するとともに、石棺の棺身部も完成する。この段階で棺内部の石の隙間と西端底石を赤褐色の粘土を使って目張りし、棺内面の仕上げとする。特に西端底石は全面に粘土が塗布されており、他の底石とは違った場所であると認識されていたことがわかる。

### ⑧石棺に遺体を埋葬する

棺内は平安時代末に経塚に転用される際に攪乱を受けているため、埋葬状態に関する詳しい情報

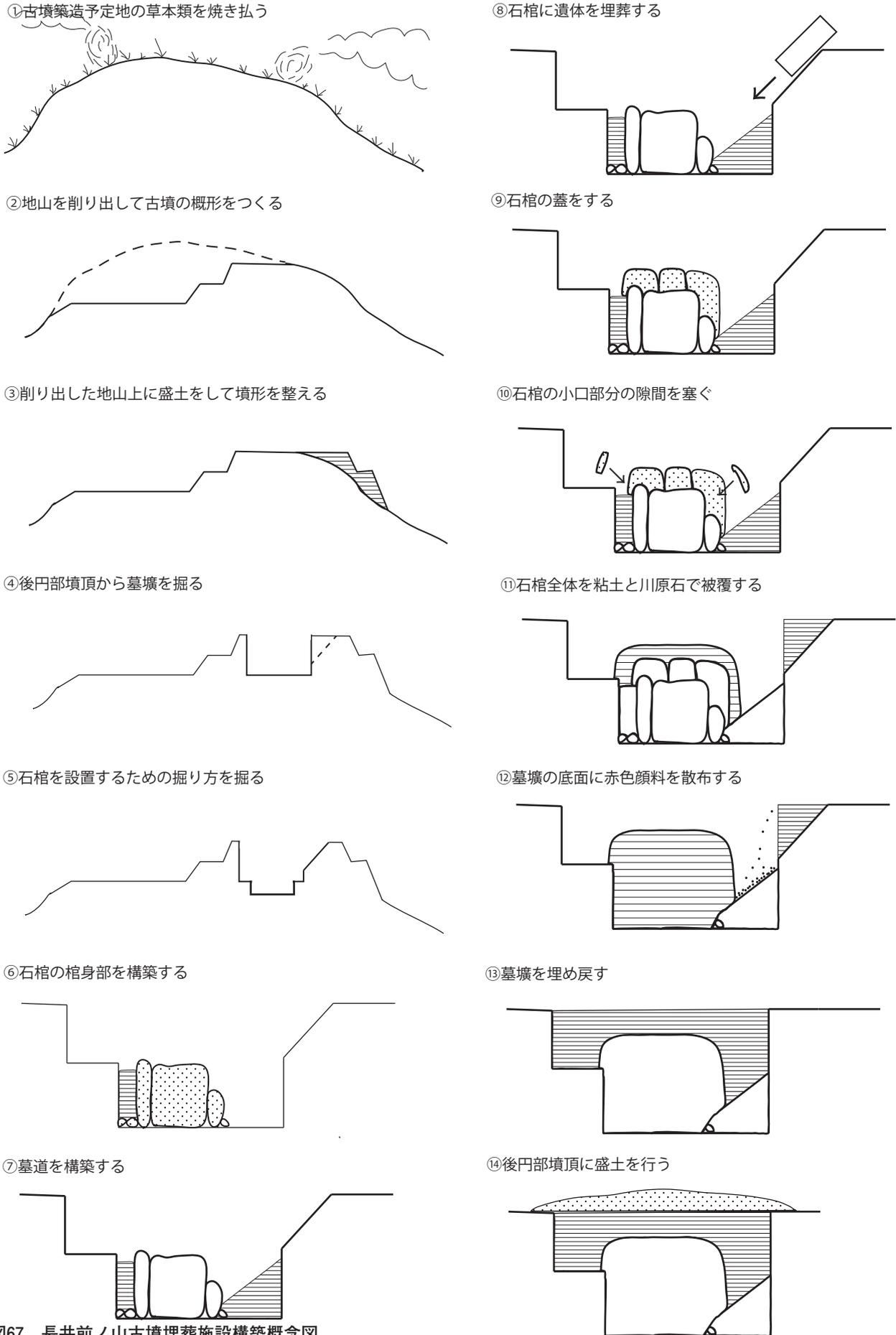


図67 長井前ノ山古墳埋葬施設構築概念図

は無い。

副葬品と考えられる錫製小玉と鉄製刀子が確認されていることから、棺内に副葬品とともに遺体が安置されたと考えられる。

前工程でわざわざ墓道を構築していることから考えて、木棺などの有機質の棺材に入った遺体が墓道を使って棺内に安置された可能性が高いと考えられる。

また、石棺底面は西側がやや高いことから埋葬頭位は西の可能性が高く、遺体は頭部から石棺の中に入れられた可能性が考えられる。それを証明するように西端底石だけが赤褐色粘土を全面に塗布しており、頭部位置を意識していたと考えられる。

#### ⑨石棺の蓋をする

石棺側石と掘り方の壁の間の部分に粘土や石を置いて蓋石の基部を固定しながら合掌形に組んでいく。2対8枚の板石を北東隅から南西隅に向けて北→南、東→西の方向で合掌形に組み合わせていく。蓋石の隙間を小さめの川原石で塞ぎ、粘土で固定する。

#### ⑩石棺の小口部分の隙間を塞ぐ

蓋石を合掌形に組むことで西小口に開く三角形の隙間を塞ぐために不整六角形の石をはめ込む。

東小口は後世の経塚造営時に破壊されているため確実ではないが、西小口よりも東小口石の高さが低いことから、西小口より大型の石で塞がれていた可能性が高い。

#### ⑪石棺全体を粘土と川原石で被覆する

人頭大の川原石と粘土で石棺全体を最終的にカマボコ状に被覆する。石や粘土が複数の層になっていることから、被覆は何回かの工程に分けて行われた。西側の小口部分は3枚の大きな板石が立てかけられ、被覆の裾部分を取り囲むように川原石が半円形に置かれている。それに対応する東小口部分の被覆最終段階の姿は中世段階の経塚造営に伴う掘削によって不明である。

全体がカマボコ状に被覆された後、埋葬施設の主軸方向に直交するように板石が水平に置かれ、被覆の最終仕上げをしている。水平に置かれた板石は後世の経塚造営の際に取り外された部分もあるが、おそらく埋葬施設全体を覆うように5枚程度置かれていたと考えられる。

#### ⑫墓壙の底面に赤色顔料を散布する

棺の被覆が終了した後、墓壙内部で赤色顔料を使った祭祀行為が埋葬施設東小口側を中心に行われる。

墓壙底面の全面にベンガラと考えられる赤色顔

料が散布されており、特に石棺東小口外側の平坦部では多量の赤色顔料が検出されている。この平坦部は約1m四方の広さがあり、赤色顔料が多量に散布されていたことから、何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。

墓壙東側のスロープは、墓壙を版築状に埋め戻す以前に埋められていることから、この段階でスロープが埋められ、長方形の竪穴状の墓壙に戻されたと考えられる。

#### ⑬墓壙を埋め戻す

祭祀行為が終了しスロープが埋められた後、墓壙は黄白色砂質土と黄褐色粘質土を交互に用いて版築状に丁寧な埋め戻されている。

埋戻し途中の数面の埋土上面にも赤色顔料が認められることから、埋戻し作業中にも何度か赤色顔料を散布する祭祀行為が行われたことがわかる。

また、埋め戻し土には途中で硬い面が何面か存在していることから、埋戻し作業の途中の段階で何度か叩き締める作業が行われたこともわかる。

#### ⑭後円部墳頂に盛土を行う

墓壙の埋め戻しが終了した段階で、墓壙よりも広い範囲で再度墳頂平坦面全体に約20cm程度の厚さに盛土を行い、墓壙上面を完全に見えないようにしている。

以上、古墳の築造方法について調査成果を基に時系列で説明したが、この順序の埋葬過程はまさに竪穴系横口式石室の構築方法ととらえることができる。

本古墳例のような「合掌式石室」の成立に竪穴系横口式石室の思想が反映されていることが、近年指摘されてきている（土生田1996）。

次節では、この点を詳しく検討するために、本古墳例が「横口を意識した石棺状埋葬施設」の条件に符号するものであるか検討する。

#### エ) 合掌天井式石棺の比較検討

本古墳の埋葬施設は、長野県長野盆地（善光寺平）に分布が集中する「合掌式石室」に形態や構造が類似しており、その影響で成立したことは確実である。

ただし、本古墳の例は天井部の形態を除くと、構造・規模ともに一般的な箱形石棺と大きな違いはないようにも見え、大局的には箱形石棺の変異種ととらえることも可能である。

そのため、長野県に分布する「合掌式石室」との系譜関係が明らかになり、大きく「合掌式石室」と一括りで呼ばれる埋葬施設の再検討を経て、本例のような埋葬施設に適切な名称が与えられるまでは、調査担当者である菊池芳朗氏が調査速報時に提唱した「合掌天井式石棺」という名称を踏襲して使用す

る。大きな意味で合掌構造の屋根施設を持つ埋葬施設全体を指す場合には、これまでの「合掌式石室」という用語を使用して説明していく。

本古墳例は福島県内ではじめて確認された「合掌式石室」であり、長野盆地以外の例としても山梨県中央市王塚古墳、山形県南陽市松沢1・2号墳に次ぐ4例目である。さらに、確実な前方後円墳の埋葬施設として合掌式石室が確認された全国唯一の例でもある。

「合掌式石室」を埋葬施設に持つ古墳は長野県では圧倒的に円墳が多く、集中地域の長野県から波及した外部地域では他の墳形も採用されている。円墳以外の墳形は本例以外には山梨県王塚古墳だけである。王塚古墳の詳細は不明であるが、前方後円墳とも帆立貝式古墳とも考えられており、いずれにしても円墳よりも格が高い墳形に採用されていることから、古墳の系譜や被葬者を考える上で注意が必要である。

また、長野県に集中的に分布する「合掌形石室」は、「積石塚古墳」との関係も踏まえて早くから朝鮮半島との系譜関係が論じられてきた。近年ではその一部が竪穴系横口式石室と強い結びつきを持った石室構造であるという見方も出されており（土生田1996）、埋葬施設の構造の再検討から埋葬施設としての系譜や年代観などに関する新たな課題が提起されている。

そのため、本古墳で確認された「合掌天井式石棺」と長野県を中心に分布するいわゆる「合掌式石室」との比較を行い、本例の特徴を抽出していく。

長野県内の「合掌式石室」については、飯島哲也氏が研究の現状の再整理を行っており（飯島2003）、今回はそれを基に長野県の事例と本古墳例を比較検討していく。

#### a. 石棺規模の比較

長野県内で合掌形の天井構造を持つ埋葬施設は49例確認されている。

そのうち、埋葬施設本体の棺身部構造に注目すると、箱形石棺を呈するものと横穴式石室を呈するものの2種類がある。

箱形石棺状のものは長さ1.8~2.5m、幅0.6~1.0前後の大きさの範囲にほぼ収束し、それ以上の大きさのものは横穴式石室状のものが主であるという傾向が指摘されている。

本古墳例は、基本属性の項で記したが、東西1.9m×南北0.5mと長野県の箱形石棺の規模とほぼ一致しており、大きな相違が無いことがわかる。

#### b. 横口の意識を採用した石棺との比較

竪穴系横口式石室は北部九州を中心として西日本

に主として分布する竪穴式石室に横口構造という新しいアイデアを導入した埋葬施設である。

これは4世紀後半に北部九州で発生した後、5世紀中頃から主に西日本に広がるが、その後、日本全域には広がらなかったもので、古墳時代の埋葬施設の系譜や年代観を考える上で鍵になるものである。

土生田純之氏は合掌式石室にも、このような発想のもとに造られたものがあることを指摘した。

そのなかでも、判別が難しい「横口の意識を採用した箱形石棺状の合掌形石棺」に関する横口閉塞部の判別観点として以下の4つをあげている。

- ①閉塞石と考えられる小型石材の存在と位置
  - ②墓壙の形状として立ち上がりの傾斜が両短軸側で異なる
  - ③基部となる箱形石棺両短側壁の幅が異なる (a) 床面敷石や長側壁の隙間調整用充填石材の存在 (b)
  - ④直接的な根拠とはならないが、基部構造の石材に対して天井石が大型である
- さらに、飯島哲也氏はこれを受けて、以下の4点を追加しながら判別基準をより明確化した。
- ⑤基部構造となる箱形石棺の短側壁の両側の高さが違う
  - ⑥片側の短側壁外側に据えられた板石材の存在と形状
  - ⑦直立する片側短側壁材の存在と形状
  - ⑧閉塞石としての機能が類推できる寄棟屋根構造の妻側天井石の存在

以上の観点を本古墳例に当てはめると以下のような結果となる。

#### ①閉塞石と考えられる小型石材の存在

西側小口部分では屋根と本体基礎部分の三角の隙間を埋めるように不整六角形の板石がはめ込まれていた。これを閉塞石と捉えることも可能であるが、実際には高さ50cmほどの石棺基礎部分の側石が据え付けられており、横穴式石室の羨道部のように内部に入ることは難しい状況である。この板石は石室の隙間の充填材ととらえられる。

東側小口部分は後世の経塚造営により部分的に破壊されているため、小口の部分の構造は不明であるが、小口石が他の3辺の側石より高さが低く、外面で20cmしかないことから、東小口から棺内部に入りやすい状況である。この部分を塞ごうとすれば、西側よりも大型の石が必要であり、閉塞石が存在していた可能性が考えられる。東小口石の内面に削り出された稜線は閉塞石の固定のために施された可能性も考えられる。

#### ②墓壙の両短軸側の立ち上がり傾斜

長方形の墓壇の東側にだけ約30度の傾斜がついたスロープ部分が付いており、墓壇の両小口の形態は明らかに違っている。

さらに、墓壇底面に掘り方を掘って設置された石棺の東小口部分の板石は、他の3辺と比べて非常に低く、この部分から墓壇のスロープに向かって、さらにスロープ状に掘り方が埋め戻されていることから、これらのスロープは一連の墓道として石棺の東小口まで続き、墳丘面から東小口部分を通して石棺内に遺体が入られた状況が推定できる。

### ③-a基部となる箱形石棺両短側壁の幅が異なる

石棺幅は東端部で49cm、中央部で51cm、西端部で53cmとなっており、西側が若干広い形になっている。さらに、棺底の傾斜も中央部分がやや低いため、西側が高いような印象を与え、西側が意識されているように見えるが、東端と西端の長さの差はわずかに4cmであり、西側が広く意識して造られていると判断するには、この部分だけでは躊躇せざるをえない。

しかし、西小口側石が東に比べて分厚く、高さも高いことから、棺の西側が意識されていたと考えられる。

### ③-b床面敷石・長側壁の隙間調整用充填石材の存在

蓋石の隙間には小さめの川原石が詰められ、粘土で固定されていることから隙間充填材が施されていたと言える。

また、床面敷石上も後世の経塚への再利用の際に攪乱されていることを考慮すると、残存する粘土の状況からはっきりと判断することはできないが、西端の底石全面に赤褐色の粘土が貼られていたと推定でき、石棺の西側がさらに意識されていたと考えられる。

以上のことから、石棺内を隙間なく封じ込める意図は持っていたと考えられる。

### ④基部構造の石材に対して天井石が大型である

側石や底石は取り上げていないため、写真や図面による比較となるが、石棺身部に使用されている板石よりも合掌状に組んだ蓋石のほうが大型の石を使用している。この点については意識されていたと考えられる。

### ⑤基部構造の短側壁の両側の高さが違う

石棺身部の短側壁（小口）は西が高く、東が低い状態で作られており、短側壁の板石の高さは明確に違っている。

東小口を除いた3辺はほぼ同じ高さであるが、上端がまったく同一面を成すように平坦には揃えられてはいない。上面に平らに蓋石が載る通常の箱形石棺の基礎部分とはやや状況が違うが、合掌状の屋根構造になる石棺であれば、上端部の揃い方はあまり

意識されないのかもしれない。

### ⑥片側の短側壁外側に据えられた板石材の存在

本古墳例では短側壁（小口）外側にさらに板石を据えている痕跡は確認できなかった。先の閉塞石の項目で述べたように、西小口部分では蓋石と石棺基礎部分の隙間を後から石を詰め込んでいる程度であり、明確に石棺の小口を大型の板石でふさぐことは行っていない。

東側小口については、現在の板石の低さと内面の稜線の削り出しなど、何か組み合わさる石が存在した可能性が推定できる。どのような構造かは不明であるが、外側に板石があった可能性は否定できない。

### ⑦直立する片側短側壁材の存在と形状

西小口石は内側にやや傾いており、東小口石は逆に外側にやや傾いているが、東小口石は高さの低い掘り方の裏込土が薄く、しかも中世の経塚造営の際に動かされ、やや傾いている可能性もあるため不明である。

### ⑧閉塞石としての機能が類推できる寄棟屋根構造の妻側天井石の存在

本古墳例は切妻造の合掌式石室であるため、このような天井石はもともと存在しない。

以上、土生田・飯島両氏の判定基準をもとに、本古墳例を見てきたが、ほとんどの項目で合致する内容であったことから、間違いなく「横口の意識を採用した箱形石棺状の合掌形石棺」として認定できることがわかった。

この認識に立てば、長井前ノ山古墳の埋葬施設は遺体が入った木製棺などを安置するための石の部屋であると考えられ、「石棺」ではなく「石室」と呼べる施設であったと言う事もできる。

このような埋葬施設の調査研究の進展により、その機能等が整理された段階で名称変更が必要になってくる可能性もある。

今回の調査結果から導きだされるのは、長井前ノ山古墳で発見された「合掌天井式石棺」は堅穴式石室の変異種としての埋葬施設の可能性があるということである。

#### c. 長野県の特徴的な石棺との比較

次に、長野県の特徴的な石棺との比較を行いながら、本古墳例の特徴を明らかにしていく。

##### i) 大星山2号墳(図68)

現在、合掌式石室として最も古い時期に推定されているのは長野市大星山2号墳のものである。周溝や棺内から出土している須恵器模倣の小型壺がTK73型式併行と考えられていることから、5世紀前半でも中葉に近い、5世紀第2四半期と考えられている。

大星山2号墳は箱形石棺状の棺身構造で天井部が一部残存している。

【天井部】

天井部は小形の板石を何枚も持ち送り状に重ねて切妻屋根形にしていると考えられている。

【棺身部】

棺身部は石棺よりひとまわり大きな掘り方を掘り、板石を使用した両小口石・側石を立てている。それぞれの板石の外側根本部分を粘質土で固く叩き締め固定し、側石の上端部近くまで土で埋めている。北側小口石は埋め込まず、横置きにするだけで、他の側石より10cmほど低い状態になっている。

【床面】

石棺内の床面は、全面に小円礫が敷かれており、床石は敷かれていない。

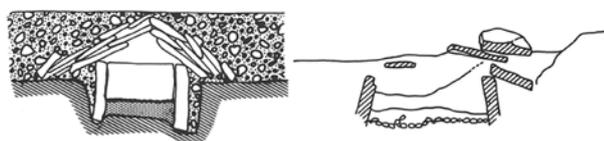
【墳丘内敷石】

墳丘上部が削平されてしまっているため不明

【比較結果】

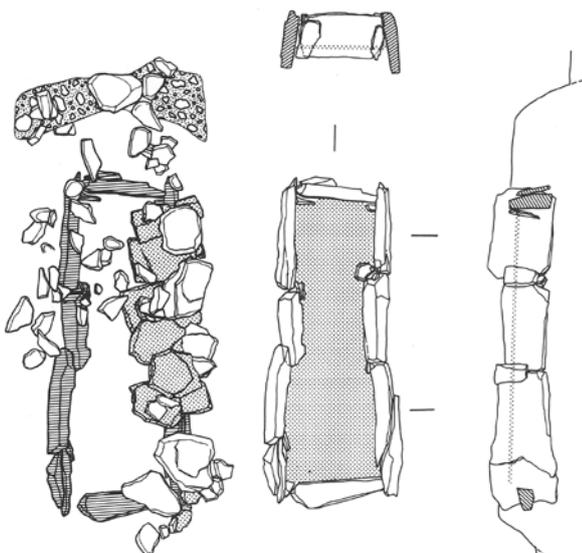
入口と想定できる小口部分の石を深く固定しないなど、石棺の構築方法は本古墳例とよく似ており、どちらも横口式石室を意識して構築されていると考えられる。

しかし、構築手法をよく見ると、長井前ノ山古墳例と大きく違う点が2点指摘できる。



天井構築状況復元図

天井部残存状況



石棺及び天井部残存状況



石棺身部

図68 大星山2号墳

天井部の蓋石が、大星山例では小型の板石を持ち送り状に重ねているのに対して、長井前ノ山例では大型の板石を身部に被せる単純な屋根構造になっている。

また、長井前ノ山例では石棺掘り方内の横口として意識された小口部分から墳丘面に向けて墓道状のスロープを作るのに対して、大星山例は掘り方上面に向かって墓道が延びる痕跡は確認できなかった。

このことから、大星山例で墓道が存在したとしても、長井前ノ山のように掘り方底面に向かうような墓道の構造ではなかったことがわかる。

また、石棺内の床面も大星山では敷石で仕上げられているのに対して、長井前ノ山では板石を敷いている。

ii) 金鑑山古墳 (図69)

1925年に偶然発見され、森本六爾らにより「合掌形石室」が調査された学史上有名な古墳である。

これまで、大きくTK73~216型式とTK208型式の須恵器が表採されていることから5世紀中頃の時期と考えられている。

古い調査例であるため、詳細が不明な部分もある

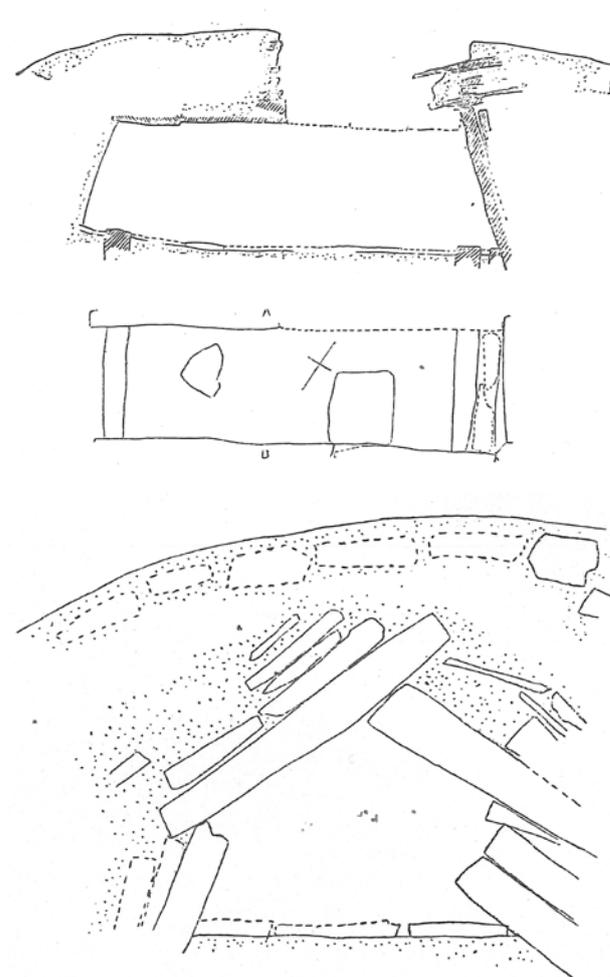


図69 金鑑山古墳

が、石室構造が分かりやすいため、この時期の石室の比較資料として選定した。

【天井部】

天井部は大型の板石を両側から被せる形で組み合わせるが、片側の蓋石の上に反対側の蓋石を大きく被せ、持ち送り状の雰囲気を出している。蓋石の接点部分の上部に小型の板石を重ねて載せている。

持ち送り状の天井部構造を意識しながら、大型板石を使用して簡略化して表現しているが、持ち送り状に多数の板石を使用するという意識が残っているためか、大型の板石を使用しているにもかかわらず、小型の板石を上重ねている。

【棺身部】

棺身部は掘り方を確認していないため、詳しい構築方法は不明である。棺身部は側石が内傾する箱形石棺となっているが、片側小口部は側石より大型の板石を内傾させて作られている。妻側の石のうち、片側が大型になる形式であり、横口構造の可能性が高いと考えられる。

【床面】

床面全面に板石が敷かれている。

【墳丘内敷石】

報告書の記述では触れられていないが、墳丘断面図の中に石棺と墳丘上面の中間部分の封土中に板石が並んでいるように描かれている。合掌式石室の天井部の上部に板石を水平に敷いた部分が存在するのは間違いないと考えられる。

【比較結果】

天井部分は大型板石を使用するなどの共通性があるが、金鍔山例は蓋石を持ち送り状に重ねたり、接点部分に小型板石を重ねて置いたりするなど、持ち送り天井を意識した要素が残っているが、長井前ノ山例はより簡略化された単純な板石構造になっており、蓋石の重ね方も石棺中軸線上で組み合わせるなど、持ち送り式天井という意識が構築手法には殆ど見られないと考えられる。

棺身部は大型板石を組み合わせる形で石棺を構築しており、横口にあたる部分の構造が不明であるが、掘り方内に板石を埋め込んで棺の身部を構築し、底面全体に板石を敷く手法は共通している。

また、石棺を構築した後、石棺部分を墳丘封土で覆う段階で作業途中で板石を水平に敷き、その上部にさらに封土を盛って埋葬を完成させる手法もよく似ている。

墓道部分が存在したかどうかについては、不明であるため、比較が困難である。

iii) 上池ノ平1号墳1号石室(図70)

丘陵頂部にある小型の前方後円墳(地附山古墳)

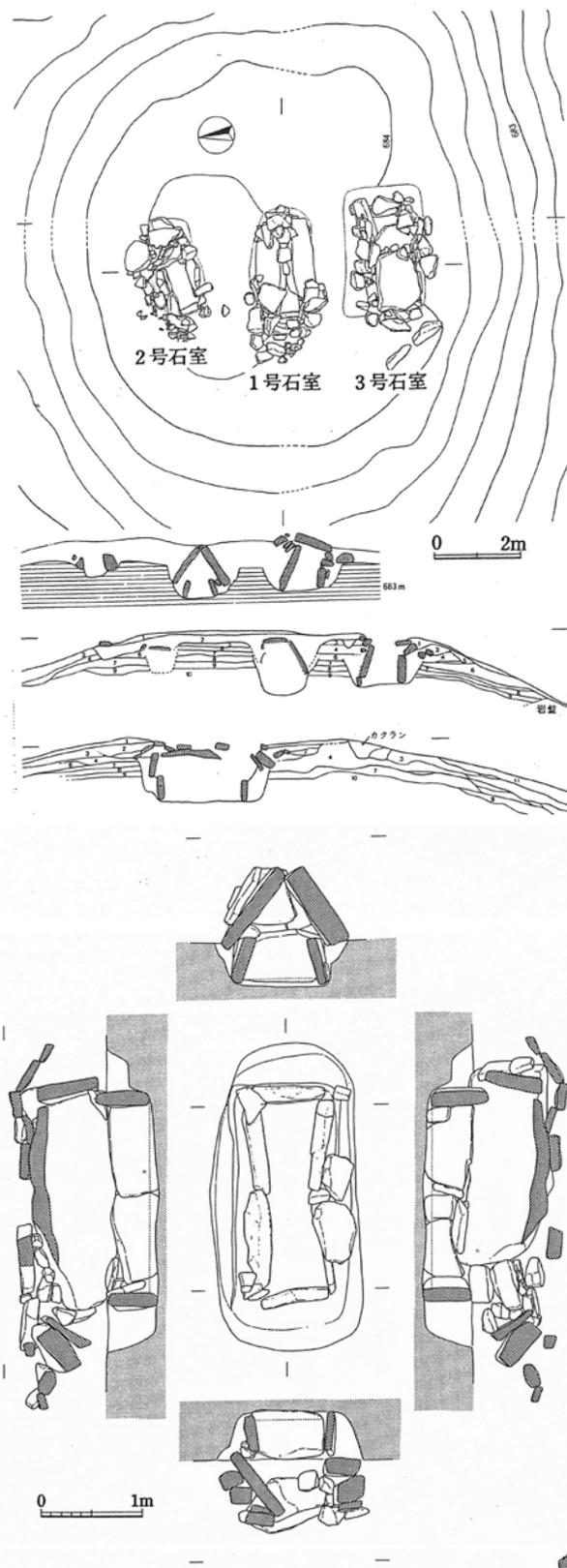


図70 上池ノ平1号墳1号石室

から下った斜面上に6基の円墳(上池ノ平古墳群)が築造されており、その最東端に位置するのが1号墳である。1号墳は3基の小石室を内部主体として持っており、円墳の中心部に最初に築かれた石室が1号石室である。

この1号石室は「合掌式石室」で、TK23~47型式併行、5世紀後半のものと考えられている。

その後で作られる2~3号石室は合掌形の屋根構造が形骸化し、次第に箱形石棺に近い平坦な屋根構造に近くなっている。最終段階の3号石室はTK47型式併行と考えられ、6世紀初頭前後ごろのものと考えられている。

石室構造が分かりやすく、年代がある程度絞り込めるのが1号石室であるため、この時期の石室の比較資料として選定した。

#### 【天井部】

天井部は大型の板石を両側から被せ、石棺中軸線上で組み合わさる形となる。西側の小口近くの部分を閉塞するために板石を被せ、その両側を小型の板石を組み合わせて閉塞している。四注造の屋根構造を意識していると考えられる。

小口の閉塞部分以外は大型の板石を合掌形に組み合わせるだけで、蓋石の上に小型の板石を重ねて載せることはしていない。小口部分から遺体を入れて閉塞する形を保持しながら、なるべく簡略化した形と考えられる。

#### 【棺身部】

棺身部は掘り方を掘って、板石を立てて設置しているが、小口部分を意識して低くするなどの配慮はなく、両小口及び両側辺ともに同じ高さに板石を埋め込んで固定している。

側石が四辺とも内傾して設置されており、設置方法は通常箱形石棺と共通する形となっている。

#### 【床面】

床面に板石は敷かれず、掘り方底面の上に別な土が敷かれている。

#### 【墳丘内敷石】

墳丘上部の土が流出してしまっているため不明

#### 【比較結果】

天井部分は大型板石を使用し、蓋石の重ね方も石棺中軸線上で組み合わさるなどの点が共通している。両者とも「持ち送り式天井」という意識が構築手法には殆ど見られなくなっている。上池ノ平は四注造、長井前ノ山は切妻造と表現する屋根構造は違っているが、構築手法は共通している。

また、棺身部の構造は、上池ノ平例は小口部分を意識した造りとはなっておらず、まさに箱形石棺そのものと言ってもいい構造であるが、長井前ノ山例は小口部分を横口にする意識が残っている。

#### オ) 石棺の比較から見える長井前ノ山古墳の時期

事実報告の中で述べたとおり、長井前ノ山古墳の発掘調査では古墳時代の土師器が出土しなかったため、詳しい年代は不明と言わざるをえない。

しかし、特徴的な石棺が発見されていることから、この石棺の編年的位置付けから古墳のある程度の時期を絞り込むことは可能であると考えられる。

前節で扱った長野県内の特徴的な「合掌式石室」の変遷を見ると、天井部分は古墳時代前期の竪穴式石室に特徴的に見られる「持ち送り式天井」を意識した手法から簡略化する方向へ、棺身部分は小口部を広くするために小口石の設置に工夫を凝らすものから簡略化し意識しない方向へ進むと考えられる。

長井前ノ山古墳の天井構造は切妻造と四注造という表現屋根形式は違うが、上池ノ平1号墳1号石室と共通する構築手法が想定でき、棺身部分では金鎧山古墳とよく似た手法で作られている。

さらに、石棺上部の墳丘内に敷かれた板石による敷石遺構についても金鎧山に近い墳丘構築要素であると考えられる。

長井前ノ山古墳の石棺は、後世に経塚の造営によって一部破壊されているが、辛うじて破壊を免れた部分から竪穴式石室を構築する際に設けられる墓道に近い形の竪穴系横口式石室で用いられる墓道と同じようなスロープが確認されている。これが墓道であるとすれば、埋葬施設構築手法に前代の意識が強く残っていたことになる。

埋葬施設の各要素を比べてみると、長井前ノ山例は金鎧山例と併行する段階の前後に位置付けることができると考えられ、5世紀中ごろを前後する年代を推定することができる。

発掘調査終了段階で、調査担当者の菊地芳朗氏は主に大星山2号墳との共通性を重視してTK73型式併行まで年代を上げて考えている。

今回の検討でも、墓道の形成、石棺身部分の構造などの構築手法は大星山2号例に併行させることができる要素と考えられるが、天井部の構造の違いをどのように評価するのが大きな問題となる。

長井前ノ山古墳の簡略化された蓋石構造が使用されているのは上池ノ平1号墳1号石室の段階であることから、天井部分の構築手法はやや新しい要素になっている。

また、長井前ノ山古墳の合掌天井式石棺は遺体が安置された後に川原石と粘土で表面を厚く被覆されカマボコ状に仕上げられている。このような手法の被覆方法は長野県の合掌式石室では見ることができないが、長野県の合掌式石室の墳丘土の変遷をみると、年代を推定する鍵を見つけることができる。

「合掌式石室」を持つ古墳の封土を見ると、積石塚、封土のみ、土石混合の3種類が見られる。合掌式石室が登場する大星山2号墳段階では、土と石が混じることはなく両者が排他的に存在しているよう

であり、大星山2号墳は封土のみの古墳である。合掌式石室が盛行する5世紀中ごろ以降の金鑑山古墳や上池の平1号墳1号石室になると、封土の中に石が混じるようになり、土石混合封土がある程度普及し始める。6世紀になると合掌式石室を持つ古墳の封土の多くは土石混合封土となる。

長井前ノ山の被覆状態は、まさに土石混合状態であり、共通した要素としてあげられる。

被覆要素と天井構築手法という石棺の上部構造に関しては6世紀初頭に近い年代に収まる要素であるが、石棺の身部分や埋葬関連施設の要素は5世紀前半に通じるものがある。

さらに、墳丘内の敷石遺構については金鑑山例を根拠に5世紀半ばごろにみられる要素とも考えられる。

それぞれの構築手法要素の存続年代が明確でない現段階においては、5世紀第2四半期～6世紀初頭の中のどこかの段階になるのは確かであるが、決定打となるものがない。構築要素のうち5世紀後半でも終わりに近い要素も見えることから5世紀中ごろまで遡らせることは難しいと考えられ、現段階では5世紀後半ごろに位置付けたい。いずれにしろ長井前ノ山古墳からは現在のところ年代の根拠となる土器の出土がないため、決定打に欠ける部分があるが、とりあえず5世紀後半と考えておきたい。

今回の年代観は、あくまでも現段階の不確定要素の多い中での判断であり、決定版と言えるものではない。今後の類例の増加や、古墳に伴う土師器の発見などを踏まえながら継続して研究を進めていき、さらに確実性のある年代観を決定していく必要があることを明記しておく。

#### カ) 近隣の古墳との比較

東北地方では、これまで確実に中期前半ごろに位置付けられる古墳は見つけられず、特に会津盆地では中期以降、古墳の築造が停滞すると考えられてきた。

会津地方の中期古墳として想定されていたのは、喜多方市灰塚山古墳（前方後円墳）、同市虚空蔵森古墳（前方後円墳）、会津若松市天子宫古墳（前方後円墳？）などであるが、詳しい調査が実施されたものが少なかったため、長井前ノ山古墳の発掘調査終了後も近隣の同時期の古墳と比較検討することができなかった。

近年、東北学院大学辻ゼミナールによって喜多方市灰塚山古墳の発掘調査が進められ、平成28年度には埋葬主体部の発掘調査が行われた（東北学院大学辻ゼミナール2016）。後円部墳頂に設けられた二つの埋葬主体が確認され、第2主体部の箱形石棺は5



図71 灰塚山古墳調査状況

世紀後半であることが明らかにされた（図71）。

この調査結果を基に会津盆地西縁部に築かれたほぼ同時期の二つの前方後円墳を比較検討することができるようになった。

灰塚山古墳の発掘調査は今後も継続して実施される予定であることから、正式報告書は今後刊行されることになろう。現段階では、埋葬主体の本格的発掘調査に取り掛かった今年度の現地説明会資料を基に比較を行いながら長井前ノ山古墳の特徴を考えていく。

灰塚山古墳は後円部の中央に古墳の主軸に合わせるように、南北に細長い第1主体部が確認されている。墳頂面から掘り込まれた墓壇の底に粘土床を設け、全長8m、幅1.6mの大型木棺を埋納した痕跡が確認されている。棺内の副葬品も残されており、青銅鏡、ガラス玉、20個以上重なって出土した豎櫛、大刀が出土している。

現段階ではこの副葬品から詳しい年代を絞り込むことは難しいが、前期後半～中期前半の範囲の中で考えることができる。

今回の長井前ノ山古墳の検討と密接に関連するのは、第2主体部である。第2主体部は、第1主体部の東側にほぼ主軸線を揃えるように設置されており、粘土で全体を被覆された状態で発見されている。粘土の被覆を外すと、内部に板石を水平に置いた敷石遺構があり、敷石遺構の下部には箱形石棺状の埋葬施設が設置されている。この埋葬施設はまだ未開封で、今後の調査により内容が明らかになると思われる。

また、敷石遺構と石棺状の埋葬施設の間には多量の鉄鍬をはじめ、大刀や剣などの鉄製品が埋納されており、被葬者を邪悪なものから守るための儀式が行われたことが推定できる。第2主体部の時期については、出土した鉄鍬の特徴から5世紀後半と考えられている。

現地説明会資料から現段階でわかる情報は以上であるが、灰塚山古墳第2主体部と長井前ノ山古墳には以下のような共通する要素が指摘できる。

- ①石棺を粘土などで被覆する。
  - ②石棺の上部に板石を使った敷石遺構がある。
  - ③板石を使った石棺状の埋葬施設である。
- それぞれの要素について長井前ノ山と比較していく。

#### ①石棺の被覆

石棺の被覆材としては、灰塚山は粘土のみ、長井前ノ山は川原石と粘土を用いた土石混合となっている。粘土で被覆する手法は古墳時代前期から木棺を埋葬する段階で使用されていたものであり、前期以来の伝統的な手法であると言える。

灰塚山は前代の手法を踏襲したものであるが、長井前ノ山は土石混合という前代には無い手法が採用されている。土石混合の手法は長野県の6世紀の横穴式石室の墳丘封土として広く採用される手法であるが、長野県の善光寺平の5世紀段階の古墳には「合掌形石室」と並んで特長的な「積石塚古墳」も分布している。石で被覆するとい発想は、5世紀段階の長野県ですでに存在しているわけであるから、この土石混合材による被覆という築造手法も、伝統的な「粘土被覆」と新来の「石による被覆」を組み合わせた手法と言うこともできる。いずれにしても、この手法は長野県との交流をうかがわせるものであるといえよう。

#### ②石棺上部の敷石遺構

灰塚山では石棺の蓋石の上部にさらに敷石を行い、全体を粘土で被覆しているが、長井前ノ山では土石混合材で棺全体を被覆した後に敷石を行っている。一見工程が違うようにも見えるが、灰塚山の場合には石棺蓋石と敷石の間に多量の鉄製品が埋納されており、祭祀儀式の工程を中間に想定できる。長井前ノ山も前後関係は詰め切れないが、棺被覆の後、墳丘を埋め戻す前に墓壙内に赤色顔料を散布する祭祀行為が行われている。両古墳ともに敷石行為を行う段階で祭祀が伴っているという共通性がみられる。

それぞれの古墳の作業工程を復元すると以下のようになる。

#### 【長井前ノ山】

[石棺構築] → [土石混合材での被覆] → [敷石

設置] + [赤色顔料を使った祭祀] → [墳丘盛土埋め戻し]

#### 【灰塚山】

[石棺構築] → [鉄製品を使った祭祀] → [敷石設置] → [墳丘盛土埋め戻し]

以上のことから、この要素に限定すると、両古墳の築造工程の中に共通する意識が存在したといえることができる。

敷石遺構については、前節で見たように、長野県金鎧山古墳で類似のものが想定でき、石棺の上部に板石による敷石遺構を形成する作業は、やはり長野県に源流が見出せると考えられる。

この古墳構築要素についても長野県との交流が考えられる。

#### ③板石を使った石棺状の埋葬施設

灰塚山の第2埋葬主体部は、今後の発掘調査によって明らかになると思われるが、現段階の情報からは箱形石棺状の埋葬施設であると推定できる。

一方、長井前ノ山はいわゆる「合掌式石室」の埋葬主体である。

両古墳は一見違う埋葬形態をとっているように見えるが、身部分の形態は非常に近いものがあり、長野県で合掌式石室が多数確認されている大室古墳群でも、同時期に「合掌式石室」を持つ古墳と「箱形石棺」を持つ古墳が共存しており、両者が並存した形で古墳群が形成されている。

さらに、上池ノ平1号墳は、前節でも見たように埋葬施設を3基持っており、「合掌式石室」から「箱形石棺」への変遷が跡付けられる。最初に設置された「合掌式石室」の1号石室も、最終段階の箱形石棺の2号石棺も、同じように「横口構造を意識した箱形石棺」形態をとっていることが確認できる。5世紀後半段階の長野県善光寺平では、「合掌式石室」も「箱形石棺」も同様の埋葬思想が背景にあることを示す例と考えられる。

このことから、灰塚山古墳の第2主体部も「横口構造を意識した箱形石棺」の可能性も考えられる。

もしそうであるとすれば、この古墳構築要素についても両古墳が長野県との交流のもとに形成されたことを物語っていると考えられる。

以上、両古墳の比較を行ってきたが、両古墳の造営には長野県地方との交流が背景にあったことが想定でき、両古墳の被葬者像を考える上で留意すべき点として指摘できる。

両古墳の造営の細かい順序までは踏み込む情報が無いが、5世紀後半というほぼ同じ時代に阿賀川を挟んだ南北の丘陵上に前方後円墳が造営されている

ということも、両古墳の被葬者像を考える上で欠かすことのできない情報であろう。

墳丘規模を単純に比較すれば、灰塚山古墳の方が大きく、当時の会津盆地西側を治めていた首長の墓と考えられるが、そのような解釈をした場合、長井前ノ山古墳の被葬者をどのように位置付けるのか、今後検討していかなければならない課題である。

さらに、長井前ノ山古墳から出土している錫小玉も古墳時代前～中期の副葬品のなかでは、これまで3例しか確認されていないうちのひとつである（横須賀2011）。分析例が少ないため希少なものであるのか判断が難しいものであるが、錫自体が国内で入手しにくい金属であり沿海州を始めとした大陸の文物に多く見られることから、当時も希少なものであったことは想像に難くない。

このような装飾品は、おそらくヤマト政権との交渉の中で入手できたものであると考えられることから、その点からの検討も必要である。

#### キ) 周辺遺跡との関係

5世紀後半の段階は前節で比較した二つの前方後円墳の他に、豪族居館と考えられている喜多方市古屋敷遺跡や、鍛冶をはじめ手工業生産が集中的に行われていた会津坂下町中平遺跡など、盆地西側の平坦部、特に阿賀川沿いの河岸段丘上に特徴的な遺跡が分布している状況を見ることができる。

会津盆地内の古墳時代の遺跡動向を見ると、古墳時代前期の段階では、盆地東部に会津大塚山古墳に代表される勢力、盆地西部には亀ヶ森古墳に代表される勢力が見られ、盆地の東西を本拠にした複数の首長勢力の存在が推定できる。

このような状況の中、5世紀段階後半段階になると、先に見た遺跡群に示されるように盆地西側で目立った特徴を持った遺跡がたくさん発見されている。この後、やはり盆地西部では埴輪を伴う経塚古墳が形成されるなど、大きく盆地西部に権力基盤が移ってくる様子が想定できる。

このような会津盆地内の勢力分布の移行が目立ち始める時期がまさに長井前ノ山古墳や灰塚山古墳が形成された時期であると考えられる。両古墳の被葬者の性格を解明していくことによって、盆地内の勢力分布を変えた要因も見えてくると考えられる。

これまでの両古墳の調査成果の分析からは、長野県との関わりが大きな影響を与えていたことは指摘できるであろう。

#### (2)2期：平安時代（9世紀）

前方部前端から土師器中・小型甕、くびれ部からは土師器杯・須恵器杯・蓋、後円部墳頂から土師器杯・須恵器蓋が墳丘上から出土している。須恵器は

9世紀中ごろの南原19号窯式（MH19）に相当する杯と蓋で、土師器も9世紀中ごろ前後のものと考えられる。

しかも、小型の土師器甕は外面を約半周する範囲で煤が付いており、炎に非常に近づいた状態で使用されていたことがわかり、何らかの祭祀儀式行為に使われたものであると考えられる。

これらの土器が墳丘上から発見されたということは、9世紀中ごろの段階に墳丘上で何らかの祭祀行為が行われた可能性が考えられる。

このような例は、本古墳だけではなく、会津盆地東西丘陵部の他の古墳でも見ることができる。

会津坂下町森北古墳は、古墳時代前期の前方後方墳であるが、後方部墳頂部からロクロ土師器杯・小型甕が出土している。この土器は報告書では10世紀後半と記載されているが、実測図から判断すると、おそらく9世紀中ごろ前後のものと考えられる。

同町の駒壇経塚は13世紀の経塚であるが、円墳状の墳丘盛土とその外側に周溝を持っており、墳丘の頂部から土坑を掘って内部に石製容器を埋納している。この経塚の周溝からも9世紀前半ごろの土師器杯と須恵器杯が出土している。

さらに、会津坂下町次郎坂古墳群からも二つの円墳（2・3号墳）の間の平坦地に直径約3mの浅い円形の土坑が掘られており、内部からは大量の礫といっしょに土師器杯・甕・須恵器長頸瓶が出土している。これらの土器も9世紀前半から中ごろにかけてのものである。

また、盆地東部の会津大塚山古墳においても後円部の墳頂周辺から土師器が出土している。江戸時代の攪乱孔に入り込む形で出土しているが、ロクロ土師器杯・甕、須恵器甕など9世紀ごろのものと思われる土器が確認されている。

調査で確認されている例は以上であるが、いずれも会津盆地東西の丘陵上にある古墳であり、これらの地域で9世紀中ごろに同じように墳丘上で土器を使った祭祀行為が行われていたと考えられる。

この共通性の背景には何があるのか、文献資料などを基に探っていきたい。

9世紀前半から中ごろの福島県周辺に関する記事を見ると、現在の福島県周辺で大きな事件が起こったことがわかる。

『類聚国史』によれば、天長七年（830）一月に出羽国で大地震が発生しており、『日本三代実録』には嘉祥三年（850）十月に再び出羽国で大地震が発生している記事が載せられている。

特に嘉祥三年の大地震は被害が大きかったようで、出羽国府の近くまで津波が押し寄せてきたことや、

川が氾濫して堤や水路などが崩壊していることが記録されている。

『類聚三代格』には、翌年嘉祥四年（851）二月に出羽国に陰陽師を派遣していることが書かれており、呪術の力で災害を治めようという律令国家の考えがよく表れている記事である。

『日本文特天皇実録』によれば、さらに翌年の仁寿二年（852）には陸奥国の神々の位階を上げ、仁寿三年（853）には陸奥国と坂東諸国に分担させて一切経を書写させている。この流れの中で斉衡二年（855）には陸奥国石椅神の位階が従四位下まで上げられる。

これら一連の記事を見ると、嘉祥三年の出羽国大地震の発生後、律令国家は神仏の力により災害を収め、復興に向けた援助を意図していたことがわかる。この中で位階が上げられる陸奥国石椅神は磐梯山の神であり、この時期に注目されるということは震災対策に何らかの関係があったことが想定できる。

嘉祥三年（850）の出羽国大地震では出羽国府付近まで津波が押し寄せる規模の大地震であることが書かれているが、9世紀当時の出羽国府は山形県酒田市城輪柵跡と考えられており、現在の酒田市が大津波による被害を受ける地震だとすると、当時の会津地方も相当な揺れを経験したことは想像に難くない。

そのような自然災害を荒ぶる神の仕業と考える例は古代の記録の中に多数見られる。おそらく会津地方の人たちも出羽国大地震の際には、神の怒りと考え、その魂を鎮める方法を行ったと考えられる。

平安時代の人々が古墳時代に造られた豪族の墓である古墳を認識していたかどうかはわからないが、古墳が造営される丘陵地は当時の人々の宗教観の中で特別な場所であったことは、当時の記録からも想像できる。

『常陸国風土記』の記事を見ると、古代の人々は天上に住む神が磐梯山などに代表されるような地域の象徴的な高い山、さらにそれよりも低い里山、そして大木や巨岩など集落の近くにある象徴的な場所などを經由して人々のいる地上と天上界を行き来していると考えていたことがわかる。

この神の行き来する經由地点の一つとして地域の里山が認識されているとすれば、当然、地域の里山の中でも目立つ場所で神の怒りを鎮める祭祀を行った可能性は高い。

9世紀中ごろの土器が墳丘周辺から出土する理由について、文献資料をもとに考えてきた。このような考えは、あくまでも推論の域をでないことは承知であるが、新たな考古学の方向性を模索する取り組

みの一つとして敢えて挑戦した。

### (3)3期：平安時代（12世紀）

本古墳の後円部は12世紀後半段階で経塚として利用される。その際に古墳の埋葬主体部であった合掌天井式石棺が一部破壊され、埋経用の石槨として再利用されている。

#### ア．経塚の構築方法

調査過程で明らかになった経塚の構築方法について工程ごとにまとめていく。

##### ①埋納用の土坑を掘る

後円部墳頂中央部に直径約2.5m、深さ約1.0mのほぼ円形の土坑を掘る。土坑はほぼ垂直に掘られているが、土坑下部で古墳の埋葬施設であった合掌天井式石棺の東半分が現れる。

##### ②合掌天井式石棺を石槨に転用する

土坑下部に現れた石棺の蓋石を外し、石棺内部を清掃して石槨として再利用する。

この段階で石棺内に残っていた副葬品などが持ち出され、今回の調査で副葬品として確認できたのは錫小玉と鉄製品破片だけであった。

##### ③経筒を石槨に納める

合掌天井式石棺から外した長方形の蓋石の上に石製蓋を伴う経筒を載せ、清掃した石室（石槨）の中央から奥に向かって入れる。蓋石の乗った板石の右脇の空間に四耳壺を設置する。

石槨床面に散乱していた川原石は、合掌天井式石棺の蓋石の隙間を埋めている川原石に近いものであることから、埋め戻し後に地震などの振動によって天井から落下したものと考え、何らかの目的で経筒と同時に埋納したものではないと現段階では判断している。

##### ④石槨を閉じる

経筒などを石槨に納めた後、外した蓋石を使って石棺の開口部を塞ぐ。立体的な石棺の開口部を塞ぐため、開口部の上に置かれた蓋石は亀甲形に積み重ねられている。

##### ⑤石槨の周囲で祭祀を行う

開口部を閉じた蓋石の北側に木箱に入った独鈷杵、南側の蓋石には鞘に入った鉄剣を横に置き、開口部の周囲に鞘に入った刀子を3点、すべて鋒を東に向けた状態で置いて経典を守る魔除けの儀式を行う。

##### ⑥土坑を礫で埋め戻す

大量の川原石で土坑を埋め戻す。

以上の方法から、この経塚の製作者は古墳の石室が偶然に出現したため、通常の構築方法を取らずに変形した形になっているが、基本的には石槨を有する経塚をイメージして造営にあたっていたことがわ

表2 長井前ノ山古墳周辺の経塚

番号	遺跡名	所在地	時期	主な出土品
1	松野千光寺経塚	会津坂下町	12世紀前半～後半	銅製経筒、大治五年(1136)銘石製外容器、須恵器系中世陶器、瓷器系中世陶器、馨、五鈷鈴、独鈷杵など
2	雷神山経塚	〃	12世紀後半	渥美焼四耳壺
3	塔寺経塚	〃	12世紀?	銅製経筒、湖州鏡、鏡箱
4	長井前ノ山経塚	〃	12世紀後半	石製経筒、須恵器系中世陶器四耳壺
5	駒壇経塚	〃	13世紀	石製外容器、漆塗木製経筒
6	暮壺山経塚	会津美里町新鶴	12世紀?	須恵器系中世陶器四耳壺
7	大塚山経塚	会津若松市	12世紀後半	須恵器系中世陶器四耳壺
8	白津八幡山経塚	猪苗代町	12世紀?	銅製経筒、須恵器系中世陶器壺

かる。

石槨を伴う経塚はいわき市上ノ原経塚、二本松市木幡山蔵王経塚、須賀川市米山寺経塚、喜多方市松野千光寺経塚、会津坂下町駒壇経塚などが知られている。県内3地方でそれぞれ発見されており、この石槨を有する経塚の構築方法は県内で一般的に見られるものであることがわかる。

#### イ. 県内調査事例との比較

発掘調査により経塚の構造が分かっている例は少ないが(表2)、中世初頭ごろの各経塚の基本情報をまとめながら、本古墳に造られた経塚の特徴をまとめていく。

#### a) 県内各経塚の基本情報

##### ①松野千光寺経塚群SK02(喜多方市)(図72)

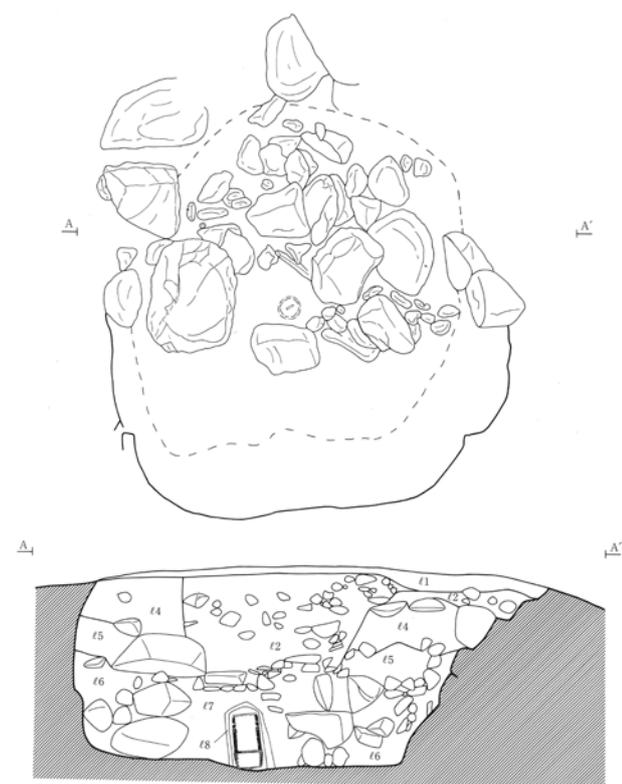


図72 松野千光寺経塚群SK02

【時期】12世紀?

【経典】不明

【経筒】銅製経筒(木箱に収納)

【外容器】なし

【埋納位】逆位

【構造】直径2mの土坑の中央に石槨(有槨式)

【祭祀】東: 鞘に納められた刀子 1点

南: 鞘に納められた刀子 1点

西: 鞘に納められた刀子 1点

北: 鞘に納められた刀子 1点

※刀子の刃部を外向きにして配置

【埋め戻し】川原石と土・岩(掘削の際の排出土)

【墳丘状遺構】上部が削平されているため不明

【その他】

経筒の入った木箱を置く場所に細かく砕いた炭を敷く

##### ②松野千光寺経塚群SK04(喜多方市)

【時期】12世紀?

【経典】不明

【経筒】不明(木・竹製の可能性大)

【外容器】なし

【埋納位】不明

【構造】直径1.5mの円形の土坑の中央に石槨

【祭祀】東: 独鈷杵 1点、鉄斧 1点

南: 鞘に納められた刀子 1口

西: 槍砲もしくは槍 1口

北: 鞘に納められた刀子 2口

【埋め戻し】川原石と土・岩(掘削の際の排出土)

【墳丘状遺構】上部が削平されているため不明

【その他】

埋め戻しの最終段階で大型の石を中央に置く

##### ③駒壇経塚(会津坂下町)(図73)

【時期】13世紀

【経典】不明

【経筒】漆塗り木製容器

【外容器】台石+石製外容器

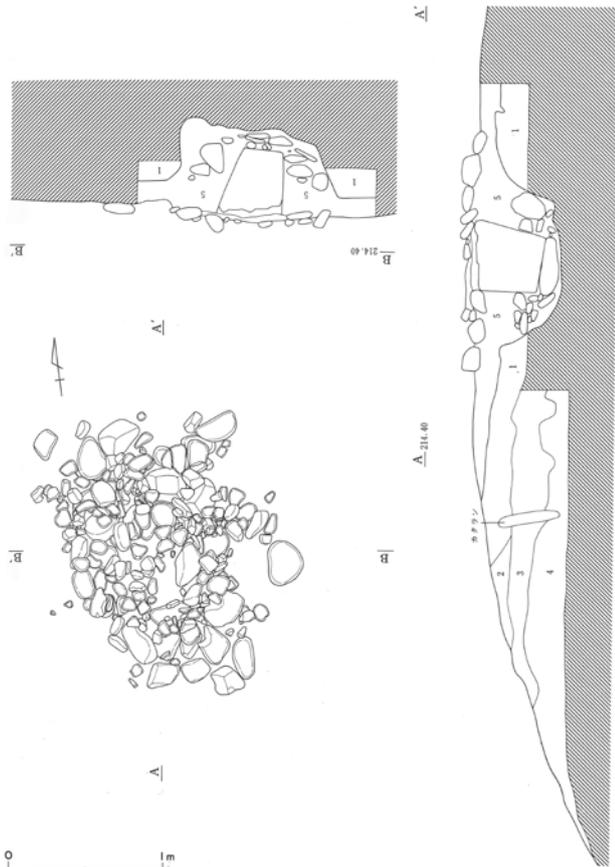


図73 駒壇経塚

【埋納位】 正位

【構造】 約1.2mの円形土坑に直接埋納（無槨式）

【祭祀】 東：鞘に納められた刀子 1口（南東）

南：なし

西：鞘に納められた刀子 1口（北西）

北：なし

※刃を上にして対になる場所に配置

【埋め戻し】 川原石と土の混合土

※経筒上部は礫だけで埋め戻し土坑上

面に一辺2mの方形範囲に敷石

【墳丘状遺構】 直径8mの円墳状盛土の外側に幅1

～2mの周溝

【その他】

古墳（円墳）を再利用している可能性がある

④雷神山経塚（会津坂下町）

【時期】 12世紀前半

【経典】 不明

【経筒】 不明

【外容器】 渥美産灰釉壺

【埋納位】 正位

【構造】 円形土坑の中央に直接埋納（無槨式）

【祭祀】 東・南・西・北：不明

※土坑内から刀子が2点出土

【埋め戻し】 土？（川原石で充填されているという

記述は報告には無い）

【墳丘状遺構】 前方後円墳の墳丘部（後円部）を再利用

【その他】

古墳の墳丘部を再利用した経塚

⑤森北1号墳石組遺構（会津坂下町）

【時期】 不明

【経典】 不明

【経筒】 不明（木・竹製の可能性大）

【外容器】 なし

【埋納位】 不明

【構造】 直径1mの土坑の中央に一辺30cmの小ピットを掘り窪め、内部に石槨（有槨式）

【祭祀】 東・南・西・北：不明

【埋め戻し】 川原石

【墳丘状遺構】 古墳の墳丘部（後方部）を再利用

【その他】

古墳の墳丘部を再利用した経塚

⑥次郎坂古墳群1号墳（会津坂下町）

【時期】 不明

【経典】 不明

【経筒】 不明

【外容器】 不明

【埋納位】 不明

【構造】 不明

【祭祀】 東・南・西・北：不明

【埋め戻し】 墳丘盛土の上部に直径3mの敷石

【墳丘状遺構】 直径8mの墳丘とその外側に周溝、古墳（円墳）の墳丘部を再利用

【その他】

円墳を墳丘部を再利用した経塚

⑦大塚山経塚（会津若松市）

【時期】 12世紀後半

【経典】 不明

【経筒】 不明

【外容器】 須恵器系陶器 四耳壺

【構造】 直径1mの円形土坑の中央に石槨（有槨式）

【祭祀】 東・南・西・北：不明

【埋め戻し】 川原石

【墳丘状遺構】 古墳の墳丘部（後円部）を再利用

【その他】

四耳壺の上部に板石を水平に置いて蓋にする

古墳の墳丘部を再利用した経塚

⑧木幡山蔵王経塚1号経塚（二本松市）

【時期】 12世紀

【経典】 不明 紙本経8巻

【経筒】 銅製経筒

【外容器】 石製外容器

- 【埋納位】 不明  
 【構造】 円形土坑の中央に石槨（有槨式）  
 石槨底面に木炭が敷かれている  
 【祭祀】 東・南・西・北：不明  
 ※土坑内から銅鏡の破片が出土  
 【埋め戻し】 川原石  
 【墳丘状遺構】 塚状の円形盛土の表面に敷石  
 【その他】  
 6基の経塚が発掘調査されており、石製外容器  
 か中世陶器壺が出土しており、刀子が容器と一緒  
 に出土している例もある。

⑨米山寺経塚群 1号経塚（須賀川市）

- 【時期】 12世紀  
 【経典】 法華経、無量寿経（朱書経）  
 【経筒】 銅製経筒  
 【外容器】 須恵器系陶器  
 【埋納位】 不明  
 【構造】 円形土坑の中央部に石槨（有槨式：推定）  
 【祭祀】 東・南・西・北：不明  
 ※刀子4口と雁股式鉄鎌が2本出土  
 【埋め戻し】 不明  
 【墳丘状遺構】 円形の塚の中央に土坑  
 【その他】

大正年間の不時発見のため詳細不明

⑩米山寺経塚群 3号経塚（須賀川市）

- 【時期】 12世紀後半  
 【経典】 不明  
 【経筒】 銅製経筒  
 【外容器】 陶製外容器 承安元年（1171）銘  
 【埋納位】 不明  
 【構造】 円形土坑の中心に石槨（有槨式）  
 【祭祀】 東・南・西・北：不明  
 ※刀子15口、鉄鎌30本、銅鏡1点出土  
 【埋め戻し】 川原石  
 【墳丘状遺構】 塚状の円形盛土の表面に敷石  
 【その他】

承安元年銘の陶製外容器は福島市天王寺、桑折  
 町沢寺経塚からも発見されている。

⑪上ノ原経塚（いわき市）（図74）

- 【時期】 12世紀前半  
 【経典】 妙法蓮華経（朱書経）  
 【経筒】 銅製経筒  
 【外容器】 なし  
 【埋納位】 正位  
 【構造】 直径2mの土坑の中心に石槨（有槨式）  
 【祭祀】 東：なし  
 南：刀子5口を10cm程度に折ったものを集  
 積

- 西：刀子6口を並べる  
 北：柳歯式と雁股式の2本1組の鉄鎌を北  
 東と北西に置く

- 【埋め戻し】 川原石  
 【墳丘状遺構】 上部が削平されているため不明  
 【その他】

- ・紙本経の天地幅や書風は12世紀前半
  - ・銅鑄製経筒の形態的特長は12世紀前半
  - ・副葬された赤焼土器は12世紀前半
  - ・経塚の木炭の放射性炭素年代は12世紀末～13世紀半ば
- ※経筒の製作年代と埋納年代にズレがある

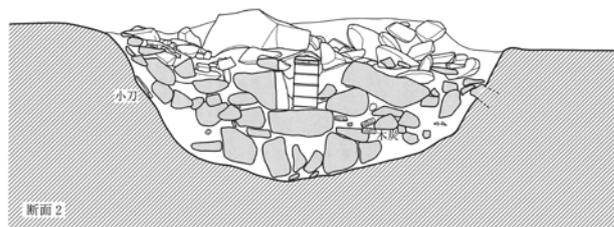


図74 上ノ原経塚

以上、中世初頭前後の県内に所在する経塚のうち、発掘調査等によってある程度情報の得られるものを概観してきた。

項目ごとにまとめると、

- 【時期】  
 ・12世紀～13世紀で12世紀後半のものが多い。
- 【経典】  
 ・残存しているものは法華経と無量寿経  
 ・残存しているものは朱書経
- 【経筒】  
 ・銅製経筒と木製容器がある。  
 ・不明や「なし」のものは木製もしくは竹製経筒の可能性が高い。
- 【外容器】  
 ・石製外容器、陶製外容器、中世陶器壺、木箱を使う場合がある。  
 ・外容器の口に板石を載せて蓋をしている例がある。  
 ・外容器は木製蓋などの有機質素材で蓋がされている可能性がある。
- 【埋納位】  
 ・正位と逆位の両方がある。  
 ・逆位は松野千光寺経塚のものだけである。  
 ※木箱の中に経筒が入っていれば、正位と逆位の埋納はどちらでも簡単にできる。
- 【構造】  
 ・円形土坑の中央に石槨を構築する有槨式と、石槨を構築しない無槨式がある。

- ・有槨式の発見例が多い。
- ・有槨式の底面には木炭が敷かれているものがある
- ・有槨式には木箱に入ったと推定できる例がある。
- ・無槨式も経筒が木箱に入った可能性が考えられる。

【祭祀】

- ・経筒を中心に東西南北を意識して刀子や鉄鏃などの刃物を配置する。
- ・配置される刃物は鞘に入っているが、刃は外の方向に向けられている。
- ・刃物の代わりに銅鏡が置かれることもある。

【埋め戻し】

- ・川原石で埋め戻されるものがほとんどである。
- ・土で埋め戻しているものも地表近くは川原石を敷く例や大型の岩を置く例などがある。

【墳丘状遺構】

- ・塚状の円形盛土にする例が多い。
- ・上部が削られているものも塚があった可能性が高い。
- ・古墳の墳丘を塚に転用している例も多い。

これまでの調査事例を重ねていくと、以上のようないくつかの経塚の一般的な様相がみえてきた。

時間の経過とともに腐朽して消滅してしまう有機質素材の物品の存在を考古学的に証明することは困難であるが、これまでの出土例を有機質素材の物品を前提に考えると、非常に明快に説明ができる。

経筒素材は、銅製のものや竹や木などの有機質製のものの2種類が想定できる。

陶器は外容器としての機能を想定すると、石製外容器、陶製外容器、壺や四耳壺などの中世陶器、木箱の4種類である。

これらの組み合わせで、県内の経塚事例はすべて説明がつく。

- ①松野千光寺経塚群SK02（喜多方市）  
銅製経筒 + 木箱 + 石槨 + 鎮壇 + 石詰め
- ②松野千光寺経塚群SK04（喜多方市）  
有機質経筒 + 木箱 + 石詰め
- ③駒壇経塚（会津坂下町）  
有機質経筒 + 石製外容器 + 鎮壇 + 石詰め
- ④雷神山経塚（会津坂下町）  
有機質経筒 + 中世陶器四耳壺 + 鎮壇 + （土？）
- ⑤森北1号墳石組遺構（会津坂下町）  
有機質経筒 + 木箱 + 石詰め
- ⑥次郎坂古墳群1号墳（会津坂下町）  
墳丘部内を発掘していないので不明  
※地表面には石敷きが見られる

- ⑦大塚山経塚（会津若松市）  
有機質経筒 + 中世陶器四耳壺 + 石詰め
- ⑧木幡山蔵王経塚1号経塚（二本松市）  
銅製経筒 + 石製外容器 + 石槨 + 鎮壇 + 石詰め
- ⑨米山寺経塚群1号経塚（須賀川市）  
銅製経筒 + 中世陶器壺 + 石槨 + 鎮壇 + 石詰め
- ⑩米山寺経塚群3号経塚（須賀川市）  
銅製経筒 + 陶製外容器 + 石槨 + 鎮壇 + 石詰め
- ⑪上ノ原経塚（いわき市）  
銅製経筒 + 木箱 + 石槨 + 鎮壇 + 石詰め

以上のような整理をすると、まず石槨の有無で大きく2分できる。石槨がある経塚は経筒の外側に経筒 + 外容器 + 石槨の3重の障壁、石槨の無い経塚は経筒の外側に経筒 + 外容器の2重の障壁を想定することになる。この2重の障壁のものは会津地方でしか確認されていない。県内全域に広がる3重障壁構造、会津地方だけに広がる2重障壁構造と整理することができる。

また、鎮壇の儀式についても刀子などの刃物を使用することが圧倒的に多い。確認できないものは数が少ないことから、腐植してしまったために確認できないものと考えられる。

これらの様相をもとにすると、当経塚の構造で一見不可解な事象も説明がつく。

古墳の石室を再利用した石槨内の遺物の出土状況は、複数回の追埋納の痕跡が確認できず、1回の埋納で先に報告した状況になるためには、以下のような状況が想定できる。

石製蓋と木製筒身を組み合わせた経筒の内部に写経した経巻を入れ、木箱に入れる。経筒の入った木箱を合掌天井式石槨の天井部分から外した蓋石の上にさかさまに載せる。経筒の入った木箱が載った板石を石室の中央部の奥に向かって押し込む。もう一つ木製経筒（筒と経巻）の入った中世陶器四耳壺を板石と石室壁の間に置く。石室開口部を外した蓋石を重ねて塞ぐ。塞いだ孔の周囲に刀子と独鈷杵を置いて、鎮壇の儀式を行う。土坑を川原石で埋め戻す。

つまり、本経塚は同時に2つの経筒を埋納した結果、先のような石室内状況になったと考えることができる。

ウ. 本古墳に造営された経塚の特徴

前節の想定を生かせば、本経塚例は { (石と植物質素材の経筒 + 木箱) + (植物質素材経筒 + 中世陶器四耳壺) } + 石槨 + 鎮壇 + 石詰めという構造となる。

合掌天井式石槨を再利用して経塚としているため、特殊なものという印象が強いが、構造を分析すると石槨内に2つの経筒が埋納される以外は、県内で一

一般的に見られる経塚の構造であると捉えることができる。

そこで、複数の経筒を同時に一つの石槨内に埋納させる原因が出土品から推定できるかという問題が出てくる。

一つの石槨の中に複数の経筒を埋納する例は、福岡県求菩提山経塚など山岳信仰と密接なかかわりのある山などを中心に12世紀前半の九州地方で多く見られることができる。おそらく山岳信仰と結びついた背景のもと経塚が造営されるものに、このような複数の経筒の埋納が関係しているのかもしれない。

また、当経塚の石槨内の出土品を見ると、産地が推定できるものは石製蓋と四耳壺の二つである。

石製蓋は能登産の珪藻土でできていて、北陸方面からの搬入品であると推定できる。このことから、石製容器が容器として搬入されたのか、すでに経筒の完成品として北陸地方に関係の深い人物から会津の地に造営する経塚に埋納するために持ち込まれたという二つの可能性を考えることができる。

長元四年(1031)に覚超が記した『如法堂銅筒記』には、慈覚大師円仁が書写した如法経が円仁没後四十七年目に上東門院の助成を受けて比叡山の横川に銅塔を造り、これを納めて埋納したことが書かれている。つまり、円仁の如法経はすぐに埋められたのではなく、はじめに堂内に安置され、四十七年後に埋納経として納められたわけである。

また、本県出土の承安の三経筒の銘文を見ても、いずれも如法堂に納めるといふ文言が見られる。このことは、写経した経典は経筒に入れられてすぐに埋められるわけではなく、堂内に一定期間安置された後に、地下に埋納されるものがあるということを示している。

このことを裏付けるように、いわき市上ノ原経塚は、経筒をはじめ、内部の経典などは12世紀前半の特徴を有しているのに、経塚内から出土した木炭を使った放射性炭素年代では13世紀前半の値を出している。この例もおそらく経筒の完成品が堂内に安置され、一定期間過ぎた段階で埋納されたと考えれば違和感がない事象といえる。

また、長井前ノ山経塚の石製蓋と植物質筒身の組み合わせの根拠について少し触れたい。

静岡県沼津市三明寺経塚では、陶製経筒が40口まとめて埋められており、出土した銅製品経筒に刻まれた銘文から埋納の経緯がわかる。銘文と出土状況から、建久七年(1196)に寺の勧めにより100部の如法経をいろいろな人々が結縁して書写し、一旦寺に奉納された後、それを寺が50部ずつ二つに分けて土中に埋納したようである。この例からも、写経さ

れた如法経が寺に一時的に多数預けられ、その後、寺の差配によって数箇所の経塚に分けられて埋納されていることがわかる。

また、承安の三経筒のように、ほぼ同じ結縁集団から複数の経塚に埋納するために、複数セットの経筒を寺が預かる可能性もある。

寺に預けられた段階で、石製外容器に入った木製経筒と木製外容器に入った木製経筒の2セットの身と蓋が何らかの理由で取り違えられ、木箱に納められた可能性も考えることができる。

このような状況を想定しない限り、今回のような出土状況は理解できない。とりあえず、現段階ではこのような2セットの片割れが発見されたと解釈したい。

さらに、四耳壺は科学的胎土分析を行っていないため、産地については同定できないが、肉眼観察では珠洲系須恵器窯の製品であることは間違いない。

現在のところ、新潟県五頭山窯と会津若松市大戸窯の二つが候補地として考えられるが、胎土は大戸窯製品に非常によく似ており、大戸窯の可能性が高いと考えられる。四耳壺が地元産のものであるとすれば、この中に納められた経筒の中の経典も地元で写経された可能性が高い。

つまり、当経塚には北陸に縁の深い外部の人物に由来する経筒と地元の人物が製作に関与した経筒の二つが埋納されたと考えることもできる。

しかも、この二つの経筒の埋納方法を比べると、石槨の中央に台石の役目をする蓋石の上に経筒が置かれる石製蓋の経筒を埋納する北陸と強いつながりのあった人物と、それに遠慮して石槨の脇に安置しなければならぬ地元の人物という関係を想定できる。

四耳壺の製作年代が12世紀後半であることから、この当時の会津地方でこのような関係にあった二つの集団が存在したと推定できる。

12世紀後半の会津地方周辺の状況を見ると、『玉葉』の中には寿永元年(1182)に城四郎長茂が木曾義仲追討のために越後・出羽・会津の兵六万を率いて横田川原の合戦に望むことが書かれている。当時、会津地方が北陸地方を本拠地とする城氏の影響下であったことがわかる。

まさに、この経塚の埋納の構造は、「越後の城氏関係の人物の経筒」と「城氏傘下の地元の豪族層の経筒」がいっしょに埋納されていると推定することも可能である。

この時期の蜷川庄(会津坂下町周辺)は、撰関家、越後城氏、奥州藤原氏など、さまざまな勢力が入り乱れて勢力拡張を行っている状況であることが文献

資料からも読み取ることができる。

考古学的な資料についても、陣ヶ峰城跡、薬王寺、松野千光寺経塚を始めとするたくさんの経塚群など、地域の政治的・宗教的状况を考える上で重要な情報を与えてくれる遺跡が多数存在している。

このような遺跡の分析を重ね合わせながら、本経塚の意味について今後とも分析を深めていくことによって、中世初頭の会津地方、さらには福島県地方の役割が見てくると考えられる。

## おわりに

今回の報告は、発掘調査が終了から約16年が経過した後に発表されたものであるが、調査結果に関する十分な考察ができていないものとなっていることは否めない。

今回の報告は、発掘調査で明らかになった事実報告を中心に編集し、まず文化財保護法で求められている発掘調査の正式報告を行うことに重点を置いた。正式報告として基本情報を公表し、調査成果を多くの研究者が利用できるようなためである。

今回の調査報告の総括でもふれたように、長井前ノ山古墳の持つ考古学的価値は高く、会津地方、福島県、東北地方、ひいては日本の古墳時代を考えるうえで、多くの問題点を提起していると考えている。

今回の報告は先に述べたように事実報告が主であるため、それらの論点について当館としての統一的な見解を示すまでには至っていない。総括については、荒木の個人的な見解を中心に記述しているため、この部分についての責は荒木にある。

今後、多くの研究者の方々が、今回の報告をもとに長井前ノ山古墳が提起する論点に活発に研究を展開していただければありがたいと考えている。

また、9世紀中ごろの土器が墳丘周辺から出土する理由について、あくまでも推論の域をでないことを承知で仮説を提示した。

考古学の目的は、「出土する遺構・遺物から当時の人々の生活のようすを復元していくこと」であると考えている。遺物が「なぜ、そこから発見されるのか」、「その出土状況から当時の人々の何がわかるのか」、これまで通り着実な研究を進めて行くだけでなく、そろそろ想像の翼を広げながら、当時の人々の生活を生き生きと語れるような推論も含んだ研究の方向性にも挑戦していかなければならないのではないだろうか。

不幸な発掘捏造事件から「考古学」という学問が立ち直るためには、多くの人々に「考古学の有用性」を感じてもらふ活動が必要になってくる。捏造の学説ではなく、根拠に基づいた推論という前提を明ら

かにした上で、それぞれの地域の実像を生き生きと理解できるような仮説の提示という作業も「考古学再生」に向けた方向性の一つであると信じている。

県民に愛される博物館という目標に向かって、私たちの郷土福島県の姿をより具体的に理解しやすい形で情報発信していくことに努めていきたい。

最後に、調査に携わった職員を含め、当館関係者の中で今後とも調査で提起された論点について議論するとともに、今後行われる企画展をはじめとした当館活動の中でさらに深めていきたいと考えている。

多くの研究者の方々からの今後のご指導をお願いし、報告を閉じる。

## 謝辞

当時の地権者である佐藤信高氏および長井区共有地管理組合（代表永山廣昭氏）には、調査実施へのご快諾をいただき、折々に励ましとご配慮をいただいた。

また地元の会津坂下町教育委員会と会津坂下町長井区からはさまざまな協力と援助を受けた。特に地元研究者の渡邊満氏と齋藤哲子氏からは筆舌に尽くしがたいご協力をいただき、調査を全面的に支えていただいた。

さらに、ボランティアとしてご参加いただいた多くの方々には調査進行の大きな支えとなり、見学にお越しいただいた福島県内外の研究者の方々からは種々の有益なご教示を受けた。

発掘調査の終了から約16年経過して本報告を発表することができたのは旧職員及び外部研究者の方々のご協力がなければ実現できなかった。早い段階で原稿の提供をいただきながら発表が遅れてしまった方、また、今回新たに原稿の提供をいただいた方など、今回の報告は執筆分担の方々の献身的なご尽力に支えられた。

最後に、調査に関わっていただいた機関および諸氏のお名前をすべて記さない非礼をお詫びするとともに、ここに心より感謝の意を表したい。

## 参考文献

- 会津坂下町史編纂委員会 1979 『会津坂下町史Ⅲ 歴史編』 会津坂下町
- 青山博樹 1999 「考察3 仏具」『松野千光寺経塚発掘調査報告書』喜多方市埋蔵文化財調査報告書第5集 喜多方市教育委員会 p101-107
- 穴沢味光 1976 「喜多方市山崎横穴古墳群の出土遺物」『福島考古』第17号 p55-68
- 飯島哲也 2003 「合掌形天井の埋葬施設について - いわゆる合掌形石室についての再整理 -」『帝

- 京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 p 131～148
- 五十嵐和博 2004 「会津地方の経塚（会津北部の様相）」福島県経塚検討会資料
- 五十嵐和博 2006 「有機質経筒の諸問題－陸奥・駒壇経塚の再検討－」『坂詰秀一先生古稀記念論文集 考古学の諸相Ⅱ』 p 559～572
- 石田明夫 1993 『会津大戸窯』会津若松市教育委員会
- 石田茂作 1977 「密教法具各説」『仏教考古学講座論5 仏具編』思文閣出版 p 23～58
- 伊東信雄・伊藤玄三 1964 『会津大塚山古墳』
- 植村泰徳 2003 「平成13年度の各地の動向 会津地方」『福島考古』第44号 福島県考古学会 p 110～112
- 白杵 勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALAN－古墳文化研究会－ p 49～70
- 大塚初重 2013 「信濃大室古墳群とともに60年」『文化の十字路 信州』一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 一般社団法人日本考古学協会 p 131～148
- 岡崎譲二 1976 「密教法具」『新版仏教考古学講座第5巻 仏具』雄山閣 p 183～22
- 風間栄一 2013 「5世紀の古墳から文化交流を考える－長野県北部の様相」『文化の十字路 信州』一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 一般社団法人日本考古学協会 p 463～466
- 川上貞夫 1992 『北沢遺跡』新潟県豊浦町教育委員会
- 菊地芳朗・西村康 2000 「長井前ノ山古墳調査報告Ⅰ－測量調査・物理探査－」『福島県立博物館紀要』第15号 福島県立博物館
- 菊地芳朗 2002 「遺跡速報 福島県会津坂下町長井前ノ山古墳－“合掌形石室”をもつ前方後円墳の調査－」『考古学ジャーナル』No.492 ニューサイエンス社
- 喜多方市史編纂委員会 1995 『喜多方市史4 考古・古代・中世資料編』喜多方市
- 蔵田 蔵 1965 「密教法具」『仏具』日本の美術 No.16 至文堂 p 58～79
- 小林等・石田明夫 2000 『会津若松市史14 文化編1 須恵器から陶磁器まで』会津若松市
- 齋藤 努・高橋照彦・西川裕一 2002 『IMES Discussion Paper』No.2002-J-30.
- 渋谷恵美子 2013 「5世紀の古墳から文化交流を考える 長野県南部の様相－飯田市飯田古墳群を中心に－」『文化の十字路 信州』一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 一般社団法人日本考古学協会 p 467～472
- 末永雅雄 1975 「中世の副小刀」『日本刀の副小刀』刀春選書2 刀剣春秋新聞社 p 14～18
- 関 秀夫 1985 「古代の経塚」『経塚』考古学ライブラリー33 ニューサイエンス社 p 23～49
- 関 秀夫 1990 『日本の美術292 経塚とその遺物』至文堂
- 田中幸悦・生江芳徳 1980 「会津坂下町宇内青津古墳群虚空蔵森前方後円墳の測量調査」『福島考古』第21号 福島県考古学会 p 65～71
- 土屋積ほか 1996 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 大星山古墳群・北平1号墳』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 辻 秀人 1987 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集 福島県立博物館
- 辻 秀人 1999 「会津盆地の横穴群」『喜多方市史』1 喜多方市 p 130～134
- 東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・喜多方市教育委員会 1999 『松野千光寺経塚』喜多方市教育委員会
- 東北学院大学辻ゼミナール 2016 『灰塚山古墳発掘調査現地説明会資料』
- 土井健司・吉田博行 1999 『森北古墳群 森北古墳群測量・発掘調査報告書』創価大学・会津坂下町教育委員会
- 中村五郎 2005 「宗教史・地方史と福島県の経塚（その1）」『福島考古』第46号 福島県考古学会
- 土生田純之 1996 「長野市地附山古墳（上池ノ平古墳）について」『専修考古学』第6号 専修大学考古学会 p 31～43
- 土生田純之 2002 「積石塚古墳と合掌形石室の再検討－大室古墳群を中心として－」『専修考古学』第9号 専修大学考古学会 p 47～69
- 古川利意 1989 『中丸遺跡・鬼渡りA遺跡』
- 古川利意・吉田博行 1993 『亀ヶ森古墳 国指定史跡亀ヶ森古墳試掘調査報告書』会津坂下町教育委員会
- 馬淵久夫・平尾良光 1982 『考古学雑誌』68-1馬淵久夫・平尾良光 1987 『考古学雑誌』73-2
- 三宅敏之 1977 「経塚の遺物」『新版仏教考古学講座第6巻 経典・経塚』雄山閣 p 71～140
- 森本六壘 1926 『金鎧山古墳の研究』
- 山口弥一郎 1959 『奥州会津新鶴村誌』
- 横須賀倫達 2011 「錫製品にみる大化前代の東北と関東－福島県浜通りの2例より－」『福島考古』第53号 福島県考古学会

- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』
- 吉田博行 1996 『駒壇経塚』 会津坂下町教育委員会
- 吉田博行 1998 『鎮守森古墳 国指定史跡鎮守森古墳発掘調査報告書』 会津坂下町教育委員会
- 吉田博行ほか 2003 『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 中平遺跡・男壇遺跡』 会津坂下町教育委員会
- 吉田博行ほか 2008 『町内遺跡（陣が峯城跡・周辺遺跡）範囲内容確認調査報告書Ⅱ 次郎坂古墳群』 会津坂下町教育委員会
- 吉田博行ほか 2015 『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ 中平遺跡Ⅱ』 会津坂下町教育委員会
- 和田聡・高橋和 1990 『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書 宮東遺跡・中西遺跡・男壇遺跡・御稷神塚』 会津坂下町教育委員会
- 和田聡・植村泰徳・菅智子 1999 『古屋敷遺跡』 塩川町教育委員会
- 猪狩忠雄ほか 1998 『常磐自動車道いわき市内埋蔵文化財調査報告12 上ノ原経塚』 いわき市教育委員会



図版1 経塚石槨に再利用された合掌天井式石棺



図版2 須恵器系中世陶器 四耳壺



図版3 石製蓋



図版 4 合掌天井式石棺全景



図版 5 合掌天井式石棺構築状況